

大阪府埋蔵文化財調査報告2009-2

大町遺跡Ⅱ

—府営岸和田大町住宅建替えに伴う発掘調査—

大阪府教育委員会

大町遺跡Ⅱ

—府営岸和田大町住宅建替えに伴う発掘調査—

大阪府教育委員会



a. 06 - 2区木組井戸 47 曲物梓 (13 世紀中葉)



a. 06 - 3区石組井戸 53 桶杵 (14 世紀中葉)



b. 06 - 2区石組井戸 48 木製井桁 (14 世紀中葉)

序 文

大町遺跡は、岸和田市大町にある縄文時代から中世に至る複合遺跡です。現在までの発掘調査で、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての土器が多量に出土していて、当該期の大規模な集落跡であることが判明しています。

大阪府教育委員会では、府営岸和田大町住宅建替えに先立ち、平成18年度から平成19年度に発掘調査を実施しました。その結果、縄文時代の落ち込みや中世の石組井戸・石列群などの遺構が検出され、縄文土器や弥生土器、中世の瓦や土器・木器などの遺物が多数出土しました。これらの遺構・遺物は、当地域の歴史を解明していく上で、かけがえのない貴重な資料になるものと思われまます。

本調査の実施にあたっては、地元の方々をはじめ、大阪府住宅まちづくり部、岸和田市教育委員会等々の関係各位に多大なご指導とご協力を賜りました。厚く感謝いたしますとともに、今後とも本府文化財保護行政により一層のご理解とご協力を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成22年3月

大阪府教育委員会事務局

文化財保護課長 野口 雅昭

例 言

1. 本書は、大阪府住宅まちづくり部から依頼を受け、大阪府教育委員会が実施した府営岸和田大町住宅建替えに伴う岸和田市大町所在、大町遺跡の発掘調査報告書である。
2. 現地調査は、大阪府教育委員会文化財保護課調査第二グループ主査上林史郎が担当し、平成18・19年度に実施した。遺物整理は、調査管理グループ主査三宅正浩・副主査藤田道子が担当し、平成20・21年度に実施した。
3. 本調査の調査番号は、平成18年度が06031、平成19年度が07015である。
4. 本書に掲載した遺構写真は、主に上林が撮影した。それ以外の遺構・遺物の写真撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
5. 本調査の写真測量は、平成18年度が和歌山航測株式会社、平成19年度が大阪測量株式会社に委託した。撮影フィルムは各社が保管している。
6. 本調査で出土した木製品の保存処理は、株式会社吉田生物研究所に委託した。
7. 本調査で作製した記録資料と出土遺物は、大阪府教育委員会で保管している。
8. 発掘調査・遺物整理にあたっては、岸和田市教育委員会近藤利由・虎間英喜・瀬尾正人氏から貴重なご助言・ご協力を得た。記して感謝する。
9. 本書の編集・執筆は、上林が担当した。
10. 発掘調査・遺物整理ならびに本書の作成に要した経費は、すべて大阪府住宅まちづくり部が負担した。
11. 本報告書は、300部作成し、一部あたりの印刷単価は、1,447円である。

本文目次

序文

例言

目次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 大町遺跡周辺の歴史的環境	4
第3章 調査の成果	8
第1節 平成18年度の調査	8
第1項 06-1区	8
第2項 06-2区	9
第3項 06-3区	36
第2節 平成19年度の調査	41
第1項 07-1区	41
第2項 07-2区	62
第4章 まとめと展望	66

挿図目次

第1図 明治18年仮製地形図による調査区位置図	1
第2図 昭和36年大阪府作製地形図による調査地位置図	2
第3図 調査区位置図	3
第4図 大町遺跡（アミ部）周辺遺跡分布図	4
第5図 06-1区平面図（平成18年度）	8
第6図 06-1区北壁土層断面図（西半部）	9
第7図 06-1区旧耕土層中出土遺物実測図	9
第8図 06-2区平面図（平成18年度）	10
第9図 06-2区北壁断面図	11
第10図 06-2区溝01（2～5）、土坑15（6）、土坑26（7）出土遺物実測図	12
第11図 06-2区土坑32出土遺物実測図（8～15）	13
第12図 06-2区土坑32出土遺物実測図（16～20）	14
第13図 06-2区土坑32出土遺物実測図（21～24）	15
第14図 06-2区土器だまり45平面図（1/20）	16

第15図	06-2区土器だまり45出土遺物実測図(25~41)	17
第16図	06-2区土器だまり45出土遺物実測図(42~47)	18
第17図	06-2区土器だまり45出土遺物実測図(48~55)	19
第18図	06-2区土器だまり45出土遺物実測図(56~61)	20
第19図	06-2区木組井戸47上面平面図・立面図(1/20)	21
第20図	06-2区木組井戸47立面図(1/15)	22
第21図	06-2区木組井戸47立面図(断ち割り断面1/15)	22
第22図	06-2区木組井戸47出土遺物実測図(62~70)	23
第23図	06-2区木組井戸47出土曲物椀実測図(71~73)	24
第24図	06-2区木組井戸47出土曲物椀実測図(74~80)	25
第25図	06-2区石組井戸48上面平面図(上)・立面図(下)(1/15)	26
第26図	06-2区石組井戸48出土遺物実測図(81~90)	27
第27図	06-2区石組井戸48出土瓦実測図(91~94)	28
第28図	06-2区石組井戸48出土瓦実測図(95~101)	29
第29図	06-2区石組井戸48出土木製井桁実測図(102~105)	30
第30図	06-2区包含層出土遺物実測図(106~128)	31
第31図	06-2区包含層出土遺物実測図(129~138)	32
第32図	06-2区包含層出土遺物実測図(139~156)	33
第33図	06-2区包含層出土瓦実測図(157~160)	34
第34図	06-2区包含層出土瓦実測図(161~165)	35
第35図	06-3区平面図(平成18年度)	37
第36図	06-3区河川(166)、溝50(167~169)、側溝(170・171)、石組井戸53(172~192)出土遺物実測図	38
第37図	06-3区石組井戸53平面図(上)・立面図(下)(1/15)	39
第38図	06-3区石組井戸53出土桶椀実測図(193~207)	40
第39図	07-1区平面図(平成19年度)	42
第40図	07-1区溝16出土瓦器椀実測図(267~277)	44
第41図	07-1区溝16出土遺物実測図(278~301)	45
第42図	07-1区溝16出土遺物実測図(302~330)	46
第43図	07-1区溝16出土遺物実測図(331~341)	47
第44図	07-1区土坑1(上)・土坑2平面図(1/20)	48
第45図	07-1区土坑1出土遺物実測図(208~218)	49
第46図	07-1区土坑1出土瓦実測図(219~223)	50
第47図	07-1区土坑2出土遺物実測図(224~235)	51

第48図	07-1区石列5平面図	52
第49図	07-1区石列8平面図	53
第50図	07-1区石列8出土遺物実測図(236~257)	54
第51図	07-1区石組井戸15平面図(上)・立面図(下)(1/20)	55
第52図	07-1区石組井戸15出土遺物実測図(259~265)	56
第53図	07-1区包含層出土遺物実測図(342~373)	58
第54図	07-1区包含層出土遺物実測図(374~390)	59
第55図	07-1区包含層出土瓦実測図(391~397)	60
第56図	07-1区包含層出土瓦実測図(398~405)	61
第57図	07-2区平面図(平成19年度)	63
第58図	07-2区樋口状遺構平面図・断面図	64
第59図	07-2区自然木検出状況	64
第60図	07-2区落ち込み・包含層出土遺物実測図(406~417)	65

表 目 次

第1表	大町遺跡調査一覧表	3
-----	-----------	---

図 版 目 次

図版1	大町遺跡全景	a, 07-2区を望む。(北東から)手前は金池。左上は久米田池。 b, 07-2区を望む。(南西から)
図版2	06-1区遺構	a, 06-1区全景(北西から) b, 06-1区全景(南西から) c, 06-1区全景(東半部)(南東から) d, 06-1区西壁断面(北東から)
図版3	06-2区遺構	a, 06-2区全景斜め写真(東南から) b, 06-2区全景(東半部)(南西から) c, 06-2区全景(西半部)(南東から) d, 06-2区全景(中央部)(南東から)
図版4	06-2区遺構	a, 06-2区土器だまり45全景(南東から)右上が石組井戸48 b, 06-2区土器だまり45全景(南から) c, 06-2区土器だまり45検出状況(北から)
図版5	06-2区遺構	a, 06-2区土坑32東壁断面(西南から) b, 06-2区木組井戸47検出状況(西南から) c, 06-2区木組井戸47上面(北から)
図版6	06-2区遺構	a, 06-2区木組井戸47全景(西から) b, 06-2区木組井戸47立面(西から)
図版7	06-2区遺構	a, 06-2区石組井戸48上面(南から) b, 06-2区石組井戸48立面(南東から)
図版8	06-3区遺構	a, 06-2区・3区空中写真(下が3区。東南から) b, 06-3区空中写真(北東から)
図版9	06-3区遺構	a, 06-3区西半部全景(東から)

- b, 06-3区中央部全景（南東から） c, 06-3区東半部全景（南東から） 右下が溝50
- 図版10 06-3区遺構 a, 06-3区溝50断面（北西から）
- b, 06-3区弥生時代後期甕出土状況（南から） c, 06-3区加工木出土状況
- 図版11 06-3区遺構 a, 06-3区自然木出土状況
- b, 06-3区集石96出土状況 c, 06-3区石組井戸53検出状況（北東から）
- 図版12 06-3区遺構 a, 06-3区石組井戸53内部（南から）
- b, 06-3区石組井戸53遺物出土状況（南から） c, 06-3区石組井戸53立面（南から）
- 図版13 06-3区遺構 a, 06-3区下層確認トレンチ全景（南西から）
- b, 06-3区下層確認トレンチ弥生土器出土状況（北西から）
- c, 06-3区下層確認トレンチ自然木出土状況
- 図版14 07-1区遺構 a, 07-1区全景斜め写真（北西から） b, 07-1区全景斜め写真（北東から）
- 図版15 07-1区遺構 a, 07-1区調査区全景（南東から）
- b, 07-1区調査区中央部全景（北東から） c, 07-1区調査区南端部全景（北西から）
- 図版16 07-1区遺構 a, 07-1区石列4検出状況 b, 07-1区石列5検出状況 c, 07-1区石列7検出状況
- 図版17 07-1区遺構 a, 07-1区土坑1・土坑2検出状況（南から）
- b, 07-1区土坑1検出状況（北東から） c, 07-1区土坑2検出状況（南から）
- 図版18 07-1区遺構 a, 07-1区土坑1・土坑2掘削完了（南から）
- b, 07-1区石列8付近土釜出土状況（東から）
- c, 07-1区溝16土器だまり状況（北東から）
- 図版19 07-1区遺構 a, 07-1区石組井戸15検出状況（南から）
- b, 07-1区石組井戸15立面（南西から） c, 07-1区下層自然木出土状況
- 図版20 07-2区遺構 a, 07-2区東半部空中写真（北西から） b, 07-2区西半部空中写真（北西から）
- 図版21 07-2区遺構 a, 07-2区西半部全景（北東から）
- b, 07-2区西半部中央全景（北西から） c, 07-2区西半部自然木出土状況（北西から）
- 図版22 07-2区遺構 a, 07-2区西半部下層確認トレンチ（北東から）
- b, 07-2区西半部下層確認トレンチ南壁縄文土器出土状況
- c, 07-2区西半部下層確認トレンチ南壁断面
- 図版23 07-2区遺構 a, 07-2区東半部全景（南西から） b, 07-2区東半部全景（北西から）
- c, 07-2区東半部導水施設状況細部（東から）
- 図版24 06-2区土坑32遺物 a, 蓮華文軒丸瓦 b, 巴文軒丸瓦 c, 巴文軒丸瓦
- 図版25 06-2区土坑32遺物 a, 玉縁式丸瓦・丸瓦・平瓦 b, 瓦質土釜・土師器土釜・瓦質甕
- 図版26 06-2区土器だまり45遺物 a, 瓦器椀、土師器椀 b, 土師器土釜
- 図版27 06-2区土器だまり45・木組井戸47遺物 a, 土器だまり45出土土師器土釜
- b, 土器だまり45出土土師器土釜（紀伊型）

c, 木組井戸47出土瓦器椀・小皿、土師器小皿

d, 木組井戸47出土土師器土釜 e, 木組井戸47出土青磁碗

図版28 06-2区木組井戸47・石組井戸48遺物 a, 木組井戸47曲物椀 b, 石組井戸48木製井桁

図版29 06-2区石組井戸48遺物 a, 唐草文軒平瓦 b, 軒平瓦 c, 丸瓦 d, 雁振瓦
e, 熨斗瓦(表・裏) f, 土師器皿 g, 瓦質羽釜 h, 瓦質羽釜
i, 瓦質すり鉢(外面) j, 瓦質すり鉢(内面)

図版30 06-2区包含層遺物 a, 弥生土器壺 b, 弥生土器高杯(外面・円盤充填) c, 弥生土器壺・鉢・甕
d, 瓦器椀 e, 小型瓦器椀、土師器小皿、土錘、鉄器 f, 須恵器甕、常滑焼甕
g, 東播ねり鉢、瓦質すり鉢

図版31 06-3区遺物 a, 河川出土弥生土器甕 b, 調査区南西部側溝出土サヌカイト剥片
c, 溝50出土弥生土器小型甕 d, 溝50出土弥生土器壺 e, 溝50出土弥生土器甕
f, 石組井戸53出土桶椀

図版32 06-3区石組井戸53遺物 a, 石組井戸53出土瓦器椀、土師器小皿(灯明皿)

図版33 06-3区石組井戸53遺物 a, 石組井戸53出土土師器小皿

図版34 07-1区土坑1遺物 a, 蓮華文軒丸瓦 b, 文字軒丸瓦「□日寺如□」

図版35 07-1区土坑1遺物 a, 巴文軒丸瓦 b, 唐草文軒平瓦 c, 唐草文軒平瓦 d, 丸瓦
e, 京焼鉢、湊焼すり鉢

図版36 07-1区土坑2・石列8遺物 a, 土坑2出土玉縁式丸瓦 b, 土坑2出土土師器小皿
c, 土坑2出土瓦器椀 d, 土坑2出土瓦質羽釜
e, 石列8出土玉縁式平瓦 f, 石列8出土青磁壺(外・内面)
g, 石列8出土瓦器椀 h, 石列8出土土師器小皿

図版37 07-1区石列8・石組井戸15遺物 a, 石列8出土土師器土釜 b, 石組井戸15出土備前焼壺
c, 石組井戸15出土土師器土釜 d, 石組井戸15出土平瓦・丸瓦
e, 石組井戸15出土木臼

図版38 07-1区溝16遺物 a, 瓦器椀 b, 瓦器小皿

図版39 07-1区溝16遺物 a, 瓦器小皿 b, 土師器皿

図版40 07-1区溝16遺物 a, 土師器・瓦質土釜 b, 須恵器壺 c, 常滑焼壺 d, 常滑焼甕
e, 土師器マダコ壺 f, 須恵器イイダコ壺

図版41 07-1区包含層遺物 a, サヌカイト製石椀 b, 土師器小皿 c, 土師器土釜 d, 土師器マダコ壺
e, 須恵器ねり鉢 f, 瀬戸焼鉢 g, 土坑2出土瀬戸焼片口鉢
h, 蓮華文軒丸瓦

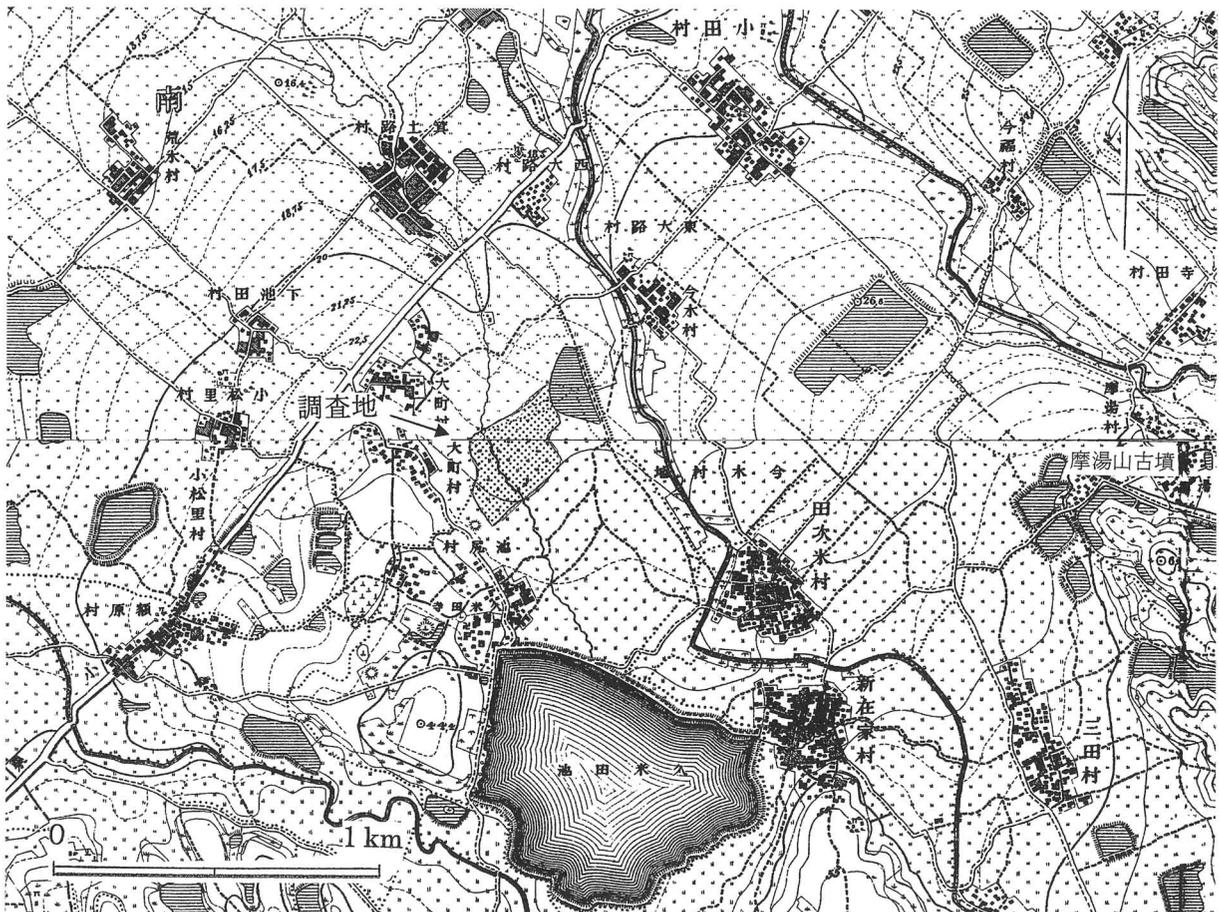
図版42 07-1区包含層遺物 a, 文字軒丸瓦「大日寺如来」 b, 唐草文軒平瓦

図版43 07-2区落ち込み・包含層遺物 a, 縄文土器(宮滝式) b, 縄文土器(宮滝式)
c, サヌカイト製削器 d, サヌカイト製石鏃 e, 弥生土器甕

第1章 調査に至る経過

大町遺跡は、平成13年度に府営久米田第2住宅建替えに伴う試掘調査によって大幅に範囲拡大された遺跡である（第1表）。本遺跡は、JR阪和線久米田駅の東約800mの地に位置しており、同駅の北約400mに位置する府営久米田第1住宅（下池田遺跡）と共に、府営住宅としては交通至便のところにある。

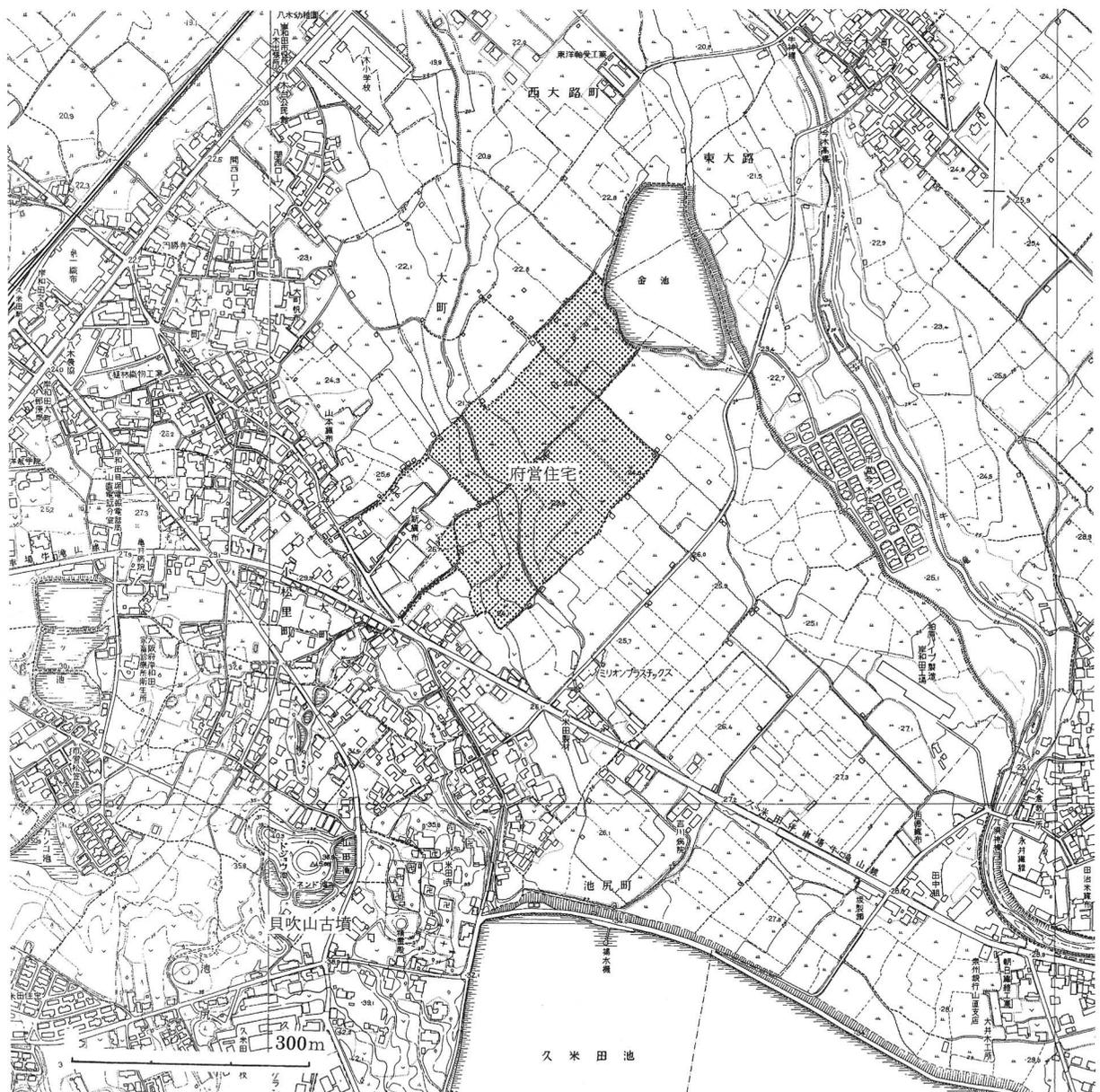
本遺跡の本格的な発掘調査は、平成15～16年度に、第I期の住宅建替え工事に伴うものとして実施された（『大町遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告2006-2）。この調査は、遺跡範囲の東南部を対象としていた。主要な調査成果としては、「古天ノ川」ともいべき弥生中期中葉～後期末葉（庄内式古段階）の大規模な自然河川が検出されている。その流路方向は東南から西北に向かい、地形の高低に沿っている。なお、泉州地域の海岸線は真北から東へ45度振っており（第1・2図）、地形の高低はそのラインと直交している。また、条里も海岸線に沿って施行されており、南河内地域などとは異なっている。例えば、南北方向の地割が検出されたとすると、それは条里制施行以前のより古いものと推定することができる。なお、天ノ川は本遺跡の東南約800mに位置する久米田池から流下している。久米田池^①は、奈良時代の高僧行基の開鑿によるとの伝承をもち、隣接して建立されている久米田寺は行基三十六院の一つに数えられている。特に本遺跡周



第1図 明治18年仮製地形図による調査地位置図

辺は、近世以前は和泉国南郡八木郷に属しており、秋祭りには八木郷の地車は郷社である夜疑神社に宮入りする。それとは別に、地車は久米田寺にも集結する。これを地元では「行基参り」と呼び、久米田寺は尊崇の対象となっている。

今回、本書で報告する調査結果は、第Ⅱ期の住宅建替え工事と、府営住宅内を貫通する新設道路部分が対象となる。平成18年度は、この新設道路部分(天ノ川の西が06-1区、東が06-2区)と、遺跡の南端にあたる住宅部分(東西棟、06-3区)に分かれる。調査面積の合計は1,826㎡をはかる。調査期間は、平成18年10月から平成19年2月末日の約5ヶ月間である。次に、平成19年度は06-3区のすぐ西側にあたる住宅部分(南北棟、07-1区)と、遺跡範囲の東北端にあたる住宅部分(東西棟、07-2区)に分かれる(第3図)。調査面積は2,470㎡をはかる。調査期間は、平成19年6月から12月までの約6ヶ月間である。



第2図 昭和36年大阪府作製地形図による調査地位置図

	種別	調査番号	調査面積 (㎡)	調査期間	調査地区	出土遺物 (コンテナ)	主な遺構	主な遺物	報告書	備考
①	試掘調査	01022	20	H13.7.26～ H13.7.30		1		弥生土器・瓦器	『大町遺跡』 2007年	遺跡範囲を拡大
②	発掘調査	03013	3,287	H15.9.9～ H16.3.1	住棟部2箇所・ 集会所	50	自然河道・不定形土坑・ 溝	弥生土器・土師器	『大町遺跡』 2007年	
③	発掘調査	04013	1,519	H16.6.10～ H16.11.11	住棟部・電気 室・受水槽	40	竪穴状遺構・土坑群・溝・ 自然河道・粘土採掘坑	弥生土器・土師器	『大町遺跡』 2007年	
④	試掘調査	04037	10	H16.9.21～ H16.9.22		1	遺物包含層・旧河道	弥生土器・石器・瓦	『大町遺跡』 2007年	
⑤	工事立会	06005	10	H18.4.14	道路	0	落ち込み	なし		ガス管工事
⑥	確認調査	06008	20	H18.5.22～ H18.5.25	道路	1	遺物包含層・旧河道	須恵器・土師器・瓦	本書	遺跡範囲を拡大
⑦	発掘調査	06031	1,826	H18.10.9～ H19.3.7	道路2箇所・住 棟部1箇所	40	河川・木組井戸・石組 井戸・土坑	弥生土器・瓦器・瓦	本書	
⑧	発掘調査	07015	2,470	H19.6.20～ H19.12.12	住棟部2箇所	35	落ち込み・石組井戸・ 石列群	縄文土器・石器・瓦	本書	
計			9,162			168				

第1表 大町遺跡調査一覧表

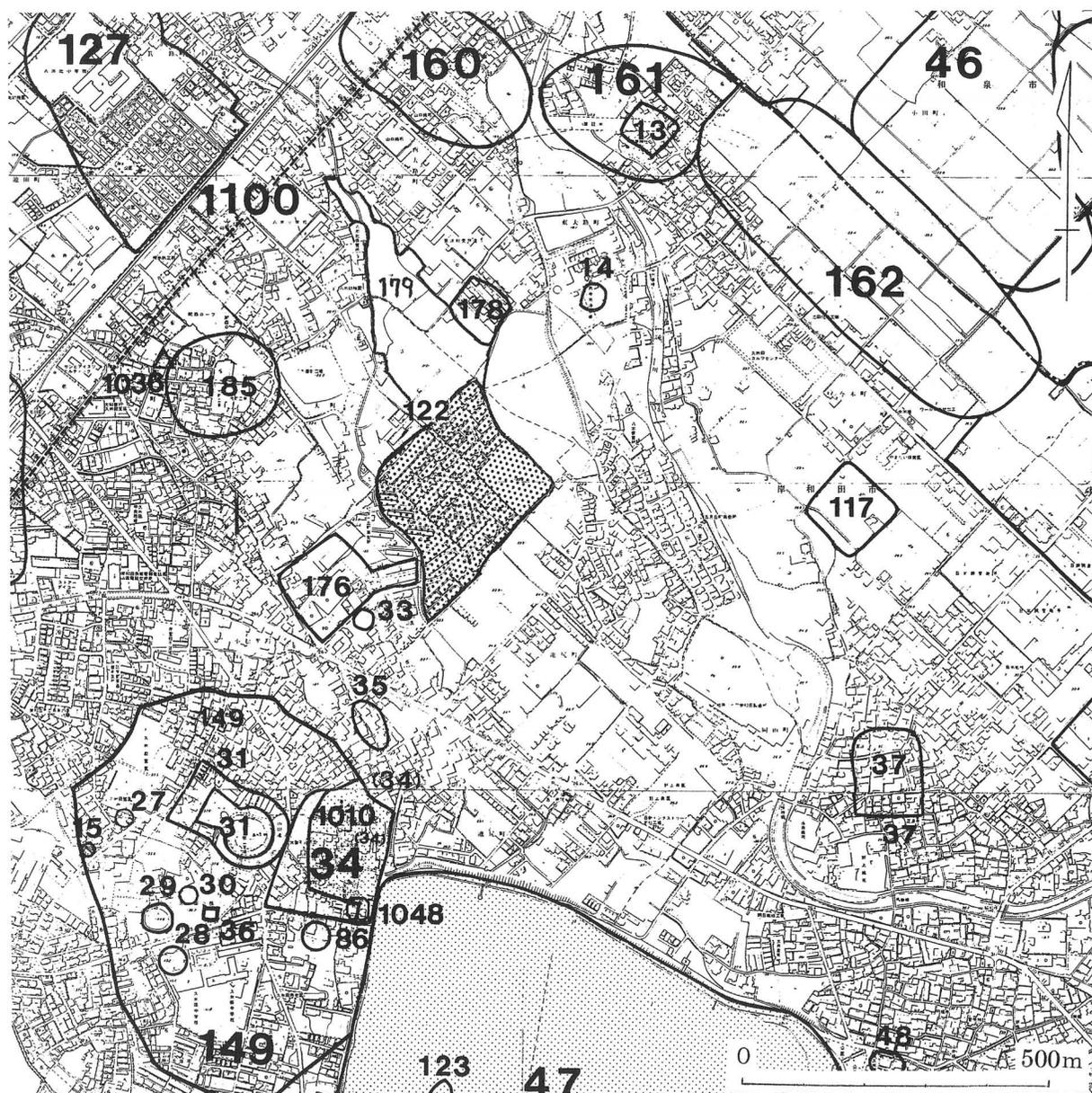


第3図 調査区位置図

第2章 大町遺跡周辺の歴史的環境

大町遺跡周辺は、従来から遺跡の発見が多く、早くから人々が住んでいた痕跡が各所で見受けられる（第4図）。本遺跡でも、縄文時代後期の土器を含んだ河川の一部が検出されている。出土した土器はほとんどローリングをうけておらず、近接したところに当該期の集落の存在を想定することができる。また、本遺跡の東北部に接した金池西遺跡でも縄文時代後期の土器や石器などが採集されている。

本遺跡の東方約1.7kmの丘陵上には、泉州地域最古の前方後円墳と考えられる摩湯山古墳が立地している。和泉山脈に源を発する松尾川や牛滝川が開析した東山丘陵の先端部に位置し、前方部を西北に向ける。いわゆる丘尾切断の立地であり、崇神陵古墳などにみられる階段式の周濠を備えている。そういった意味からも典型的な前期古墳といえる。墳丘規模は、全長200m、後円



第4図 大町遺跡（アミ部）周辺遺跡分布図

部径127m、前方部幅100mをはかる。また、墳丘表面は20cm内外の葺石で覆われ、鱗付円筒埴輪や土師器なども出土している。埋葬施設についてはよくわからない。ただ、後円部墳頂付近には、板石材が散乱し、竪穴式石室の存在が示唆されている。築造時期は4世紀中～後葉と考えられる。国史跡に指定されている。最近では、大阪市立大学や京都橘女子大学の学生を中心にして、墳丘測量図が作成されている。梅原末治以来の墳丘測量図として貴重であろう。

ところで、摩湯山古墳の後円部の西南に隣接して、陪塚といわれる馬子塚古墳が立地している。昭和33（1958）年の土取り工事で、埋葬施設(粘土槨か)が露出し、銅鏡や碧玉製管玉などが出土した。その後、平成17（2005）年度になって、岸和田市教育委員会が整備工事に伴って墳丘の発掘調査を実施した。その結果、墳丘の大部分が土取り工事で削平されたと考えられていたものが、墳丘斜面の葺石や墳丘周囲を廻る円筒埴輪列、それらが設置されたテラス状平坦面が一部で確認された。これらのことから、馬子塚古墳は墳丘周囲に80cm間隔で円筒埴輪列を廻らし、二段築成の墳丘をもつ一辺23mの方墳であることが判明した。築造時期は5世紀前葉であろう。

次に、本遺跡の東800mのところでは、関西新空港関連事業として整備された主要地方道岸和田牛滝山貝塚線（府道磯之上山直線）建設に伴う発掘調査が大規模に実施されている。北から、箕土路遺跡^②、西大路遺跡^③、今木遺跡^④、軽部池西遺跡^⑤、山ノ内遺跡などである。箕土路遺跡は、その立地から最も低い国道26号線付近にのみ縄文時代中期の遺物包含層が認められる。それら以外では弥生時代後期の遺物が広範囲に認められるが、住居などの明確な遺構はみられず、旧河川やその氾濫原の堆積土中から土器などが出土しているだけである。ただ、平安時代後期以降の瓦器や土釜、瓦などの遺物を伴った遺構が多く、この時期になって新たな集落が形成されるようである。特に、犬飼堂廃寺として周知されている地点では、ロストル式の瓦窯が2基確認されており、周辺に中世寺院の存在が想定される。また、鎌倉時代後期から室町時代にかけての集落が最盛期を迎えたと考えられ、石組井戸など様々な井戸が多数検出されている。そういった意味では、大町遺跡調査区で検出されている中世遺構と極めて近似しており、別の寺院の存在を暗示している。ちなみに、本調査区からは、軒丸瓦の瓦当に「大日寺」と印されたものが二点出土している。かつて調査が実施された吉井遺跡でも瓦当に梵字で「阿弥陀」と印された軒丸瓦が出土しており^⑥、中世になって阿弥陀信仰などが活発になっていたことがわかる。

次に、山之内遺跡では弥生後期末葉（庄内式古段階）の焼失家屋が数棟検出されている。一辺4m前後の方形住居であったが、土器や炭化した建築材が良好に遺存していた。それらの構築時期は、弥生後期末葉（庄内式古段階）と考えられ、西大路遺跡でも同時期の竪穴式住居が検出されている。これらのことから、本遺跡周辺では円形住居から方形住居への変化は、まさしくこの時期（弥生後期末葉・庄内式古段階）と考えられよう。

下池田遺跡は、岸和田市立八木北小学校の校庭を中心に広がる弥生時代中期～古墳時代にかけての集落跡である。竪穴式住居、溝、井戸、河川跡などが密集して検出され、同時に出土した多量の土器の中には吉備や紀伊などから搬入されたものもみられる。また、遺物では二連式の銅鏃

や石斧、石鏃、石庖丁など石器のほか、ドングリ、ウリ、モモの種やヒョウタンなどの自然遺物も発見されている。また、大阪府教育委員会による府営岸和田下池田住宅建替えに伴う発掘調査が行われており^⑦、集落の外郭をめぐる環濠が検出されている。さらに、最近では(財)大阪府文化財センターによって、府営岸和田下池田住宅建替えに伴う発掘調査が大規模(調査面積は7.100㎡)に実施されている。そこからは、弥生中期後葉から後期中葉にかけての竪穴式住居3棟、土器棺墓3基などが検出されている。さらに、弥生後期末葉(庄内式古段階)の多量の土器を含んだ溝が検出されており、その中からは銅鏃も出土している。こういった成果からも、下池田遺跡は弥生中期中葉から後期末葉(庄内式古段階)にかけて展開する環濠集落と考えられる。ただ、北4kmに位置する和泉市・泉大津市の池上曾根遺跡と比べると、集落の形成が中期中葉と遅いこと、その終焉についても後期末葉(庄内式古段階)と遅れることなどが指摘できる。これは、弥生前期から中期前葉にかけての集落が海浜部に存在し、そこから移り住んだのか、あるいはまた突如として、中期中葉に集落が形成されたのか、判然としない。

次に、遺跡の西方に目を転ずれば、西約1kmのJR阪和線久米田駅西側付近には小松里廃寺が位置する。周辺の道路は基本的には北から45度振っているが、一本だけ南北方向の道路が散見される。その付近は池田王子跡もあり、小松里廃寺と重なっている可能性があるという。

小松里廃寺は、飛鳥末～鎌倉時代の寺院跡である。ただ、その実態は明確ではなく、伽藍配置なども全くわからない。軒瓦などが出土しているだけである^⑧。

さらに、西南約600m付近では、岸和田市最大規模の久米田古墳群が展開している。久米田古墳群は、南から北へ伸びる独立丘陵上に立地している。現在、8基の古墳のみが確認されているが、本来は10数基存在していたことが古記録からも知られる。さらに、岸和田市による久米田公園の整備に伴って、貝吹山古墳^⑨、風吹山古墳^⑩、無名塚古墳の三基の古墳が岸和田市教育委員会と立命館大学の合同調査によって実施されている。その結果、貝吹山古墳は全長約130m、後円部径約75mをはかる大型前方後円墳であり、墳丘の周囲には周濠を備えている。また墳丘各段には円筒埴輪が圍繞し、葺石もみられる。後円部頂上の石棺内からは銅鏡、銅鏃、鉄製甲冑、石製腕飾類などの副葬品が出土している。本古墳の築造時期は4世紀後葉頃と考えられよう。風吹山古墳は、貝吹山古墳の西南に位置し、全長約71m、後円部径約59mの帆立貝式の前方後円墳であり、馬蹄形の周濠を備えている。墳丘には円筒埴輪が圍繞し、葺石もみられた。墳頂部では二基の埋葬施設(木棺直葬)が検出されている。副葬品としては、銅鏡、鉄刀、鉄剣、鉄製甲冑、玉類などがある。古墳の築造時期については、5世紀初頭頃と考えられ、貝吹山古墳に続く首長墓と想定される。

さて、府道から住宅内へ入ってくる進入路部分ではかつて池尻古墳(消滅)が存在したようである。それに関連して、池尻古墳の北側には現在マンションが建っているが、この部分の発掘調査が岸和田市教育委員会によって平成元年度に実施されている。調査面積は約1,300㎡をはかり、墳丘を削平された小規模な方墳(田鶴羽古墳群)が7基以上検出されている。これらの古墳の周

溝内からは、須恵器や円筒埴輪などがまとまって出土しており、5世紀後葉から6世紀前葉の築造が考えられる。ただ、この田鶴羽古墳群については、背後に控える久米田古墳群とは性格を異にするものであろう。まず立地である。久米田古墳群は独立丘陵上に、田鶴羽古墳群は丘陵から沖積地に向かう斜面上に立地している。墳丘については、久米田古墳群が70m以上の大型前方後円墳で構成されるのに対して、田鶴羽古墳群では10m以下の小規模方墳が密集しているだけである。次に、埋葬施設や副葬品についても久米田古墳群では石棺内から銅鏡や銅鏃、鉄刀、鉄剣、鉄製甲冑、石製腕飾類などが出土しているが、田鶴羽古墳群では削平されているとはいえ、全くそういった遺物はみられない。それから、築造時期についても、久米田古墳群が4世紀後葉から5世紀中葉なのに対して、田鶴羽古墳群では5世紀後葉から6世紀前葉になっており、時期的には並行していない。これをどうみるかだが、久米田古墳群の築造後に田鶴羽古墳群の築造に移行したとは考えられない。両者は異なる勢力の所産と考えたい。

註

- (1) 魚澄惣五郎「和泉久米田寺の隆替」『和泉久米田寺文書』『大阪府文化財調査報告』第9輯、昭和34年
岸和田市教育委員会『大阪府指定史跡・名勝久米田池』『岸和田市埋蔵文化財調査報告書』10、平成21年
- (2) (財)大阪府埋蔵文化財協会『箕土路遺跡』『(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第13輯、昭和62年
- (3) (財)大阪府埋蔵文化財協会『西大路遺跡』『(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第23輯、昭和63年
- (4) (財)大阪府埋蔵文化財協会『軽部池西遺跡』『(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第11輯、昭和62年
- (5) (財)大阪府埋蔵文化財協会『山ノ内遺跡』『(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第32輯、昭和63年
- (6) 大阪府教育委員会『吉井遺跡』『大阪府埋蔵文化財調査報告』2005-4、平成18年
- (7) 大谷女子大学資料館『下池田遺跡-第2次発掘調査報告-』『大谷女子大学資料館報告書』第17冊、昭和62年
大阪府教育委員会『下池田遺跡』『大阪府埋蔵文化財調査報告』2007-9、平成20年
(財)大阪府文化財センター『下池田遺跡』『(財)大阪府文化財センター調査報告書』第190集、平成21年
- (8) 藤澤一夫「撰河泉出土古瓦の研究」『考古学評論』第3輯、昭和16年
岸和田市史編さん委員会『市内出土遺物図録』『岸和田市史紀要』第2号、昭和51年
- (9) 岸和田市教育委員会『久米田貝吹山古墳-第1～4次調査概報-』『岸和田市文化財調査概要』25、平成11年
- (10) 岸和田市教育委員会『平成5年度発掘調査概要』『岸和田市文化財調査概要』19、平成6年

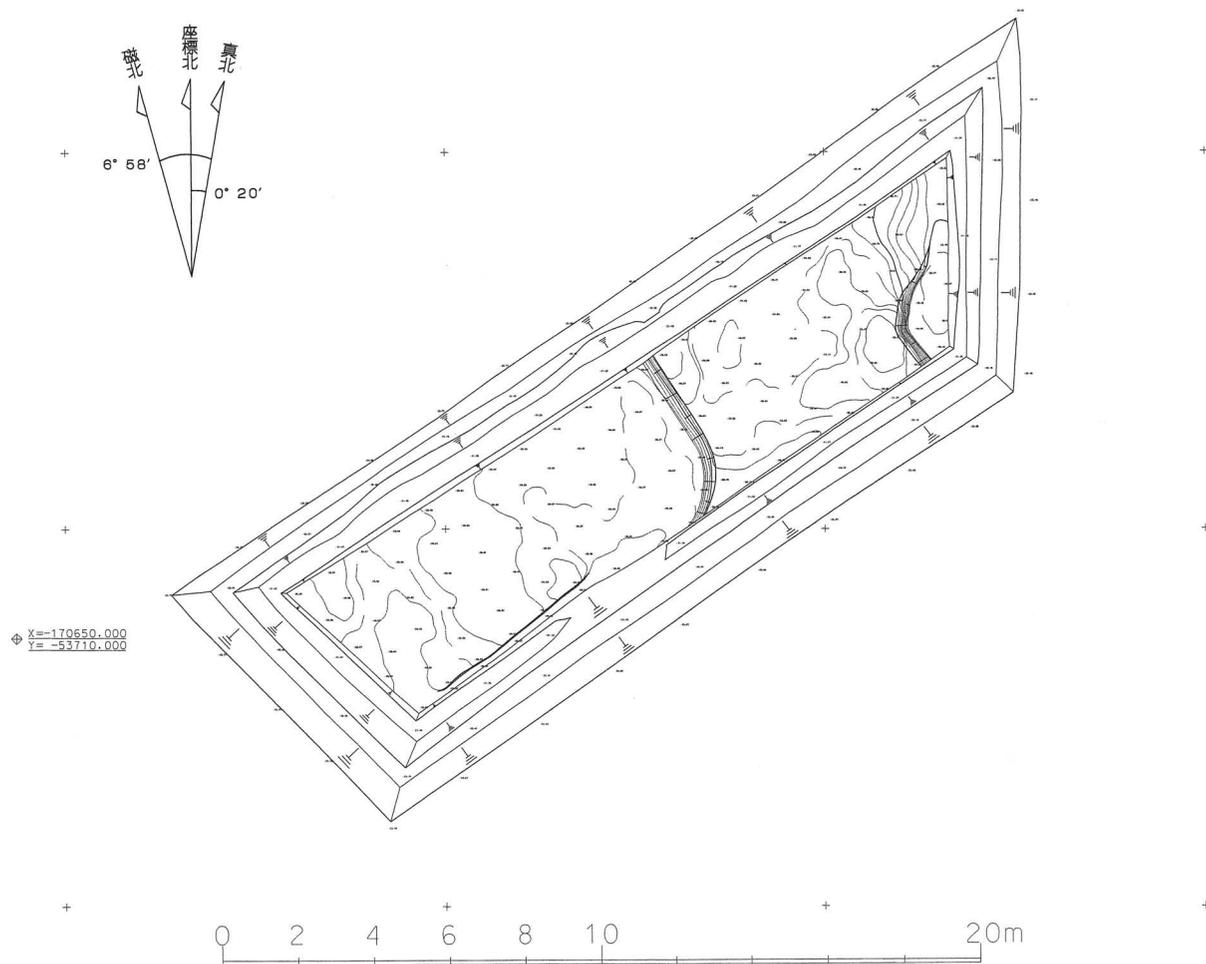
第3章 調査の成果

第1節 平成18年度の調査

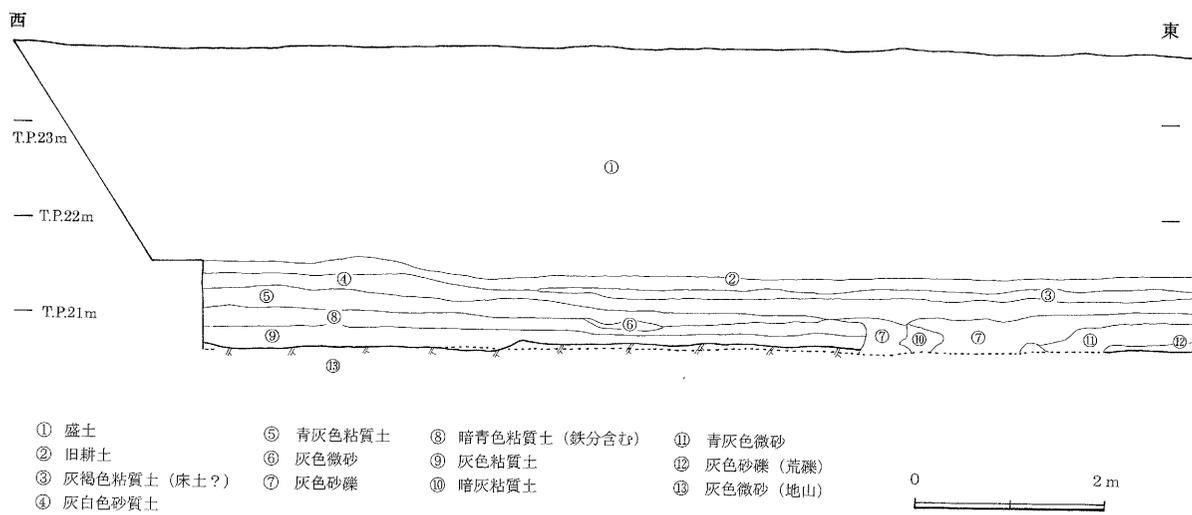
府営岸和田大町住宅の第Ⅱ期建替え工事に伴い発掘調査を実施した。住宅内を貫通する新設道路部分の調査区では、天ノ川の西側を06-1区、東側を06-2区として調査を進めた。また住棟部分では、遺跡の南端にあたる東西方向の調査区を06-3区とした。調査面積の合計は1,826㎡をはかる。調査期間は平成18年10月から平成19年2月までの5ヶ月間を要した。

第1項 06-1区

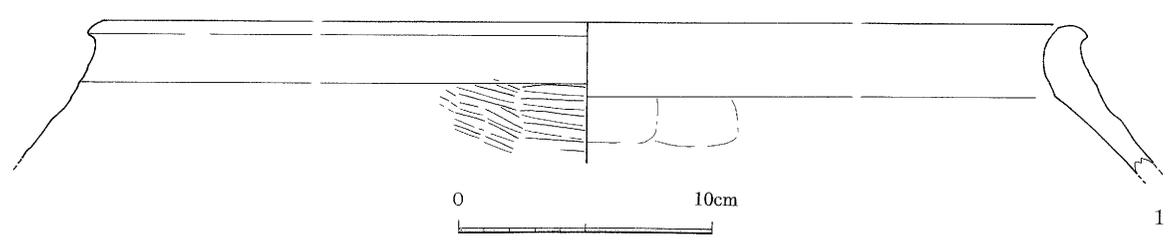
本調査区は、長さ約20m、幅約10mをはかる（第5図）。結果的には、調査区全体が太古の河川の内部にあたっていることから、遺物は全くみられない。北壁断面を参考にすると（第6図）、上から盛土（約2.2m）、旧耕土（約0.15m）、灰褐色砂質土（約0.1m）、灰白色砂質土（約0.15m）、青灰色粘質土（約0.15m）となり、暗青色粘質土、灰色粘質土、灰色微砂と続き、部分的に灰色砂礫がみられ、完全な地山の灰色微砂となる。おそらく、人間の活動が知られるのは青灰色粘質土面より上になろう。調査については、最大G.L.-2.8mの深さまで掘削して終了した。なお、旧耕土中より、混入品である鎌倉時代～南北朝にかけての瓦質甕の破片が出土している（第7図）。



第5図 06-1区平面図（平成18年度）



第6図 06-1区北壁土層断面図 (西半部)



第7図 06-1区旧耕土層内出土遺物実測図

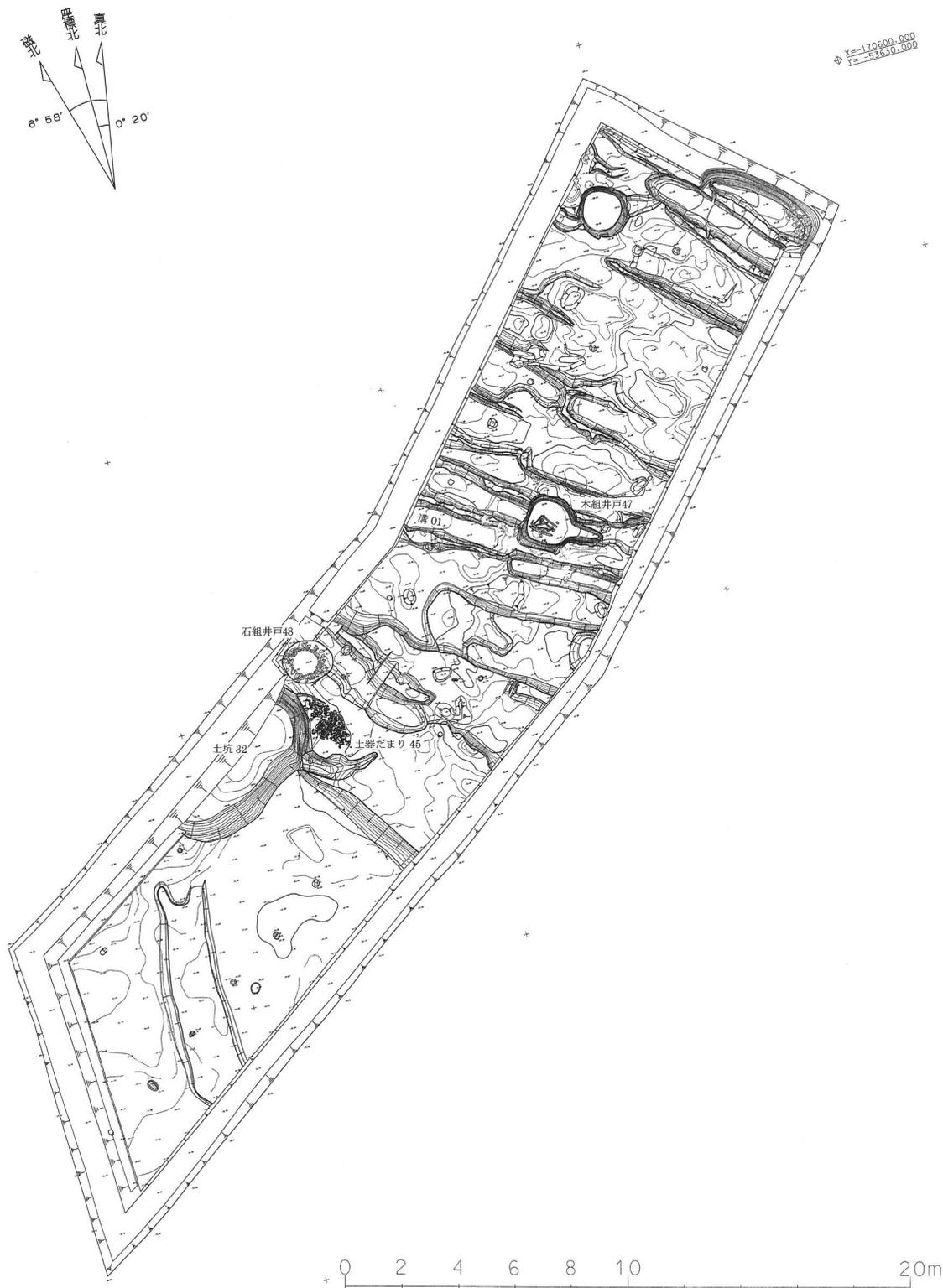
第2項 06-2区

本調査区は、長さ約45m、幅約10mをはかり、中央付近で「く」の字状に若干折れ曲がっている (第8図)。その細長い調査区にもかかわらず、中世の数多くの遺構や遺物が検出されている。この調査区は、大町遺跡の二ヶ年の調査で最も多くの遺構や遺物が集中した調査区であった。遺構では鎌倉～南北朝時代の土坑、土器溜まり、木組及び石組の井戸などが検出され、遺物では当該期の土釜・瓦・土師器・瓦器・木器などがあり、コンテナ30数箱が出土している。

層序 (第9図)

調査区中央やや西寄りの土器溜まり45を境にして、土層の様相が異なっている。北壁断面を参考にすると、東側では上から盛土 (約1.0m)、旧耕土 (約0.1m)、赤褐色砂礫 (約0.3m)、青灰色シルト (約0.06m) となり、黄色粘土の地山になる。当初、赤褐色砂礫を除去していくと、粘土面の凹凸が明瞭に現れてきて畑の畝ではないかと考えた。しかし、それらを全て露出させると、平面がきれいな畝状ではなく、不定形であることがわかってきた。すなわち、これらは畑の畝などではなく、粘土を採取するための筋掘りの穴であったが、規則性があった。地山であるきれいな黄色粘土が必要だったのであろう。ただ、この粘土採取が何時に行われたかはわからない。出土した磁器などから勘案すると、近世以降の所産と考えてよからう。

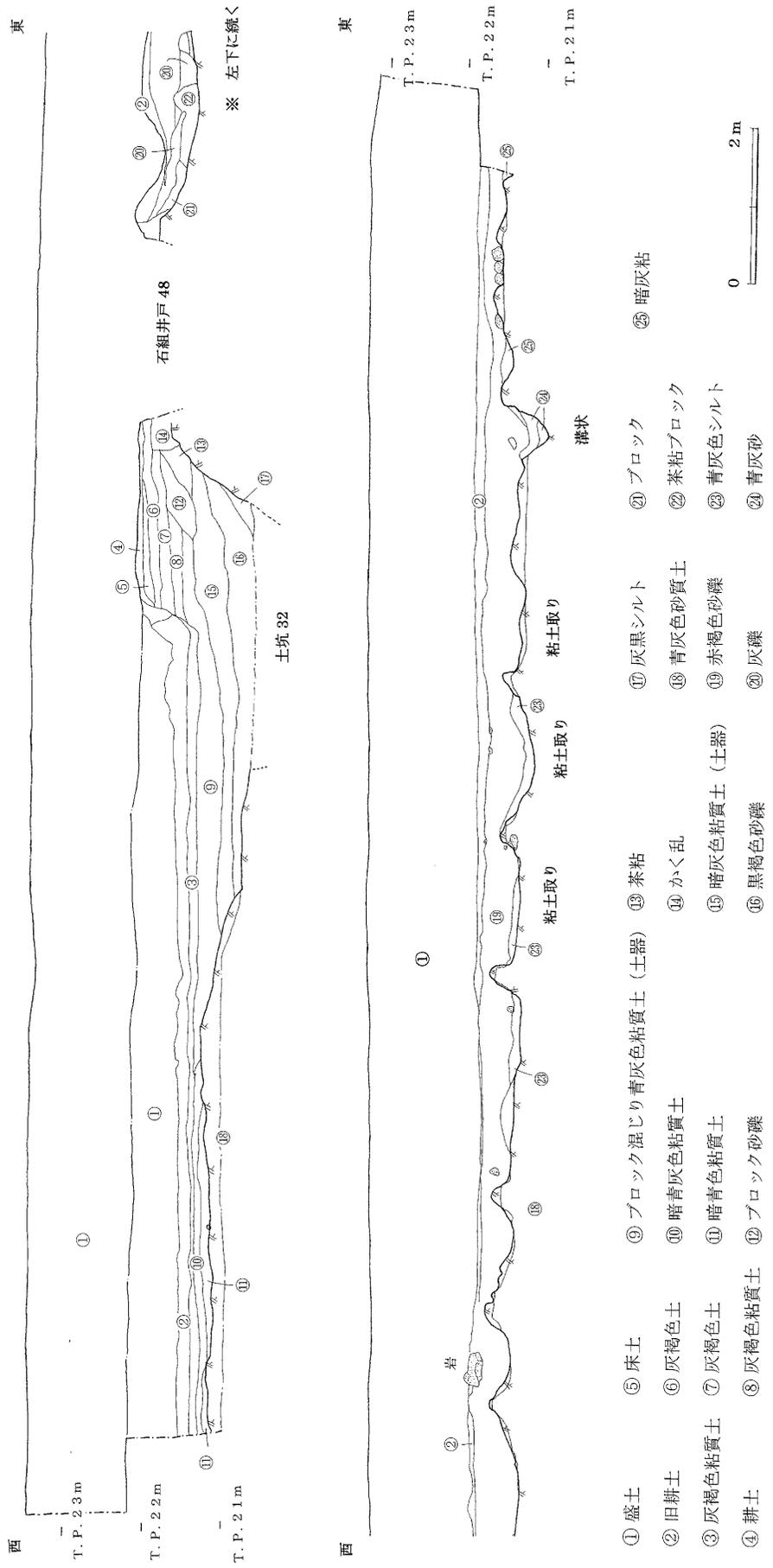
次に、西側では上から盛土（約2.0m）、旧耕土（約0.1m）、灰褐色砂質土（約0.1m）、暗青灰色粘質土（約0.12m）となる。ここでは、東側でみられた黄色粘土はみられない。おそらく、西側の層序は、天ノ川へ傾斜していく不安定な河川堆積なのであろう。ゆえに、粘土採取の穴はもう存在しない。



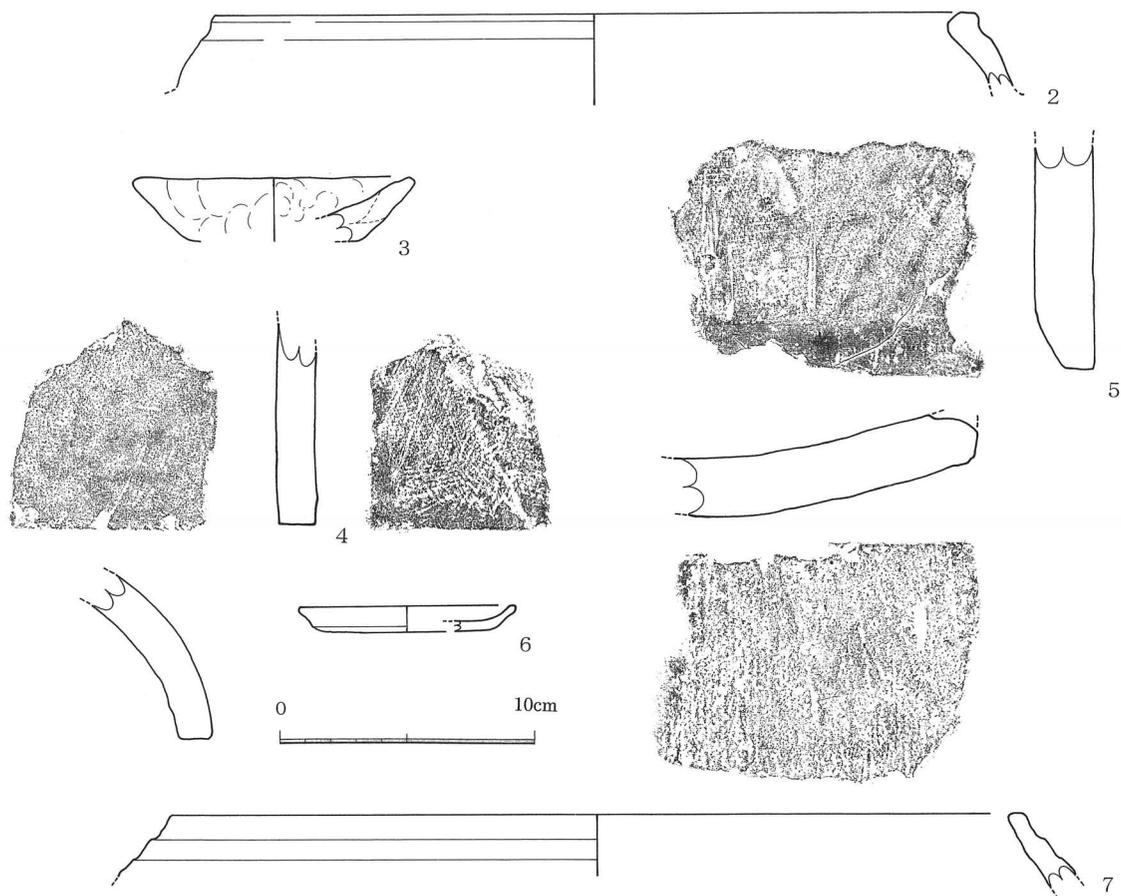
第8図 06-2区平面図（平成18年度）

検出遺構と遺物

土坑32（第8図）調査区西寄り、北壁際で検出された大規模な土坑である。土器溜まり45と一連の遺構と考えられる。その規模は長さ8m以上、幅2.5m以上、深さ1.2m以上をはかる。当初、自然河川と考えていたが、平面が逆台形状を呈することや、掘方が直に落ちていることから人為的なものと考えた。層序は上から、ブロック混じりの青灰色粘質土（約0.2m）、暗灰色粘質土（約0.12m）、黒灰色砂礫（約0.25m）となる。各層からは満遍なく遺物が出土している。別に、各層で遺物の時期差があるわけではない。埋土の堆積状況をみると、徐々に埋まったものではなく、一気に埋め立てられたような様相を呈していた。また、この土坑は掘方の部分が真っすぐ落ちているにもかかわらず、最下層の黒灰色砂礫や一部でみられる



第9図 06-2区北壁断面図

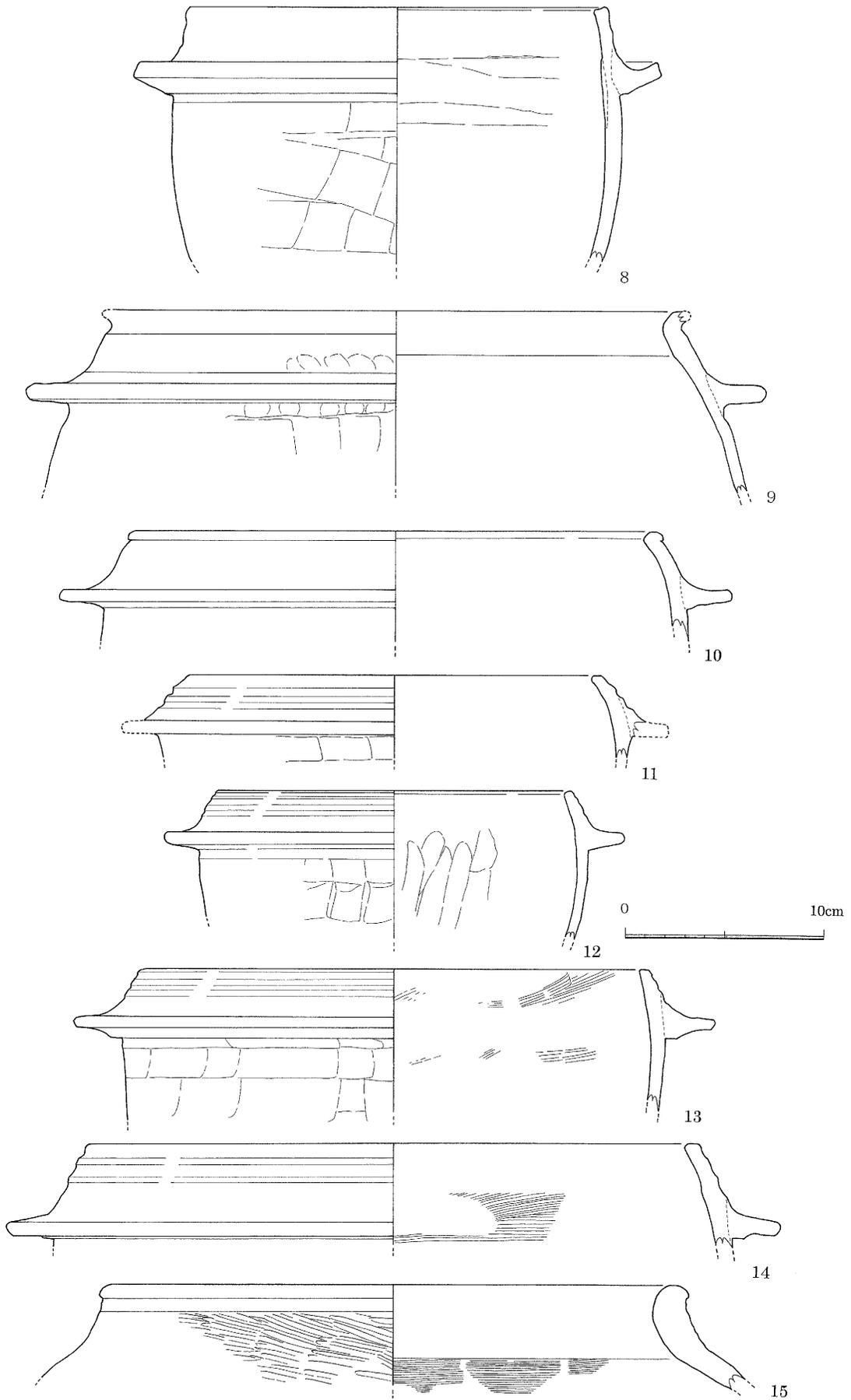


第10図 06-2区溝01 (2~5)、土坑15 (6)、土坑26 (7) 出土遺物実測図

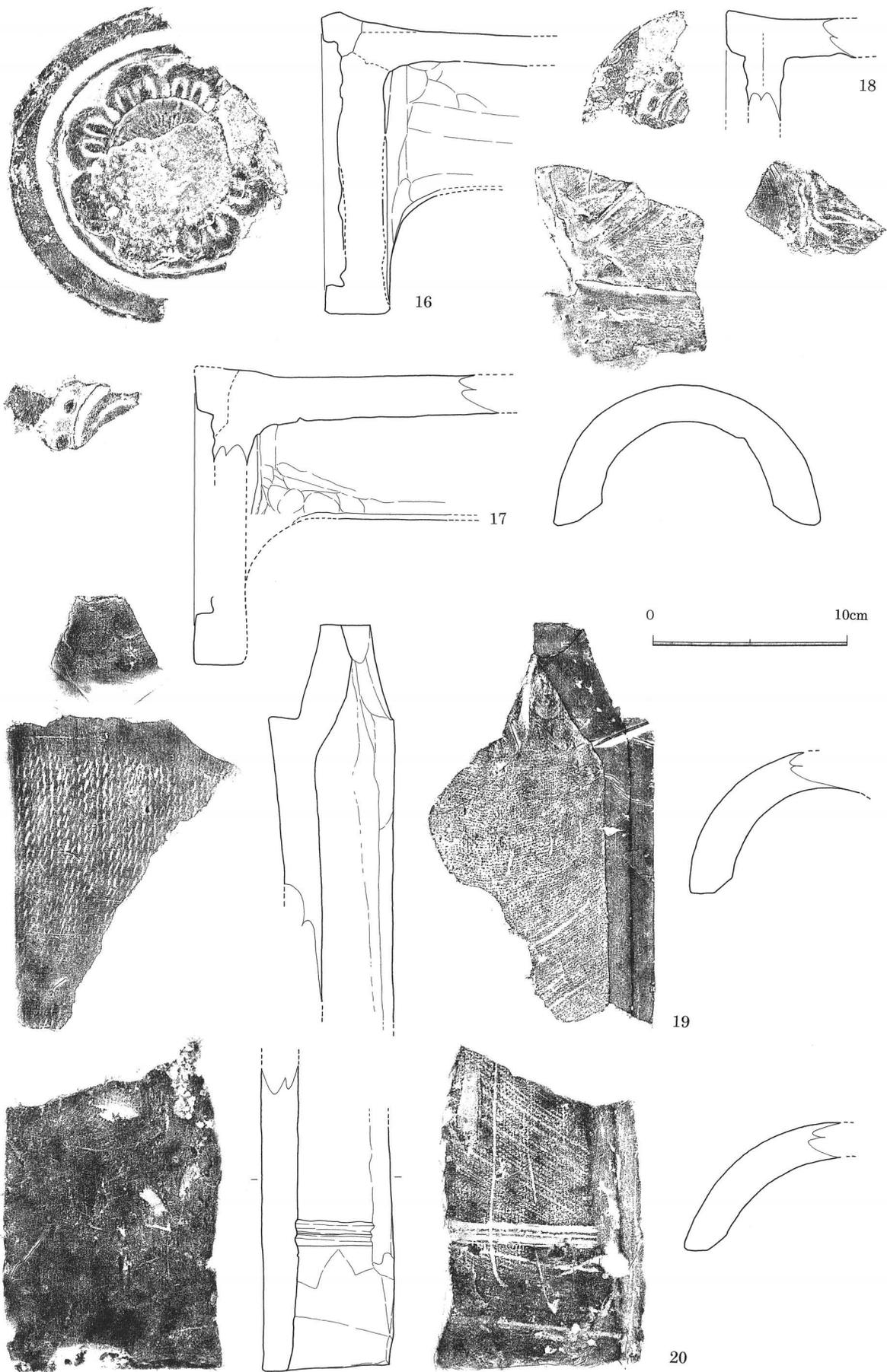
微砂層からすれば、水が緩やかに流れた形跡が認められる。となれば、四方が密閉された池のようなものではなく、片側が開けた河川のようなものの可能性が高い。今はその肩部分がたまたま検出されているにすぎない。要するに、東南の肩から遺物が投棄されたゴミ捨て場だったと考えられるのである。埋土からは、14世紀中葉の瓦、土師質土釜、瓦器、土師器、木切れなどが出土し、コンテナ30箱に及ぶ。瓦の中には、11~12世紀頃の蓮華文軒丸瓦(第12図16)の瓦当も出土しており、中世以前の遺構の存在も暗示させている。なお、この土坑を南方に延長していくと、07-1区の西北で検出されている大落ち込みに繋がっていく可能性が高い。そうなれば、かなり大規模な遺構といえよう。

土器溜まり45(第14図) 土坑32のすぐ東側で検出されたもので、一連のものと考えられる。別に、穴を掘って埋めたわけではなく、平坦面に土器などを集積したものと考えられる。どの土器をとっても、完全なものではなく、割れて使えなくなったものを集積した状態である。その範囲は、南北約2.2m、東西約1.1mであり、一部は二重三重になっており、山積みされていた模様である。集積された遺物の種類は、土師質土釜、土師器、瓦器、瓦、青磁、石などであり、その時期は13世紀前~中葉頃と考えられる。

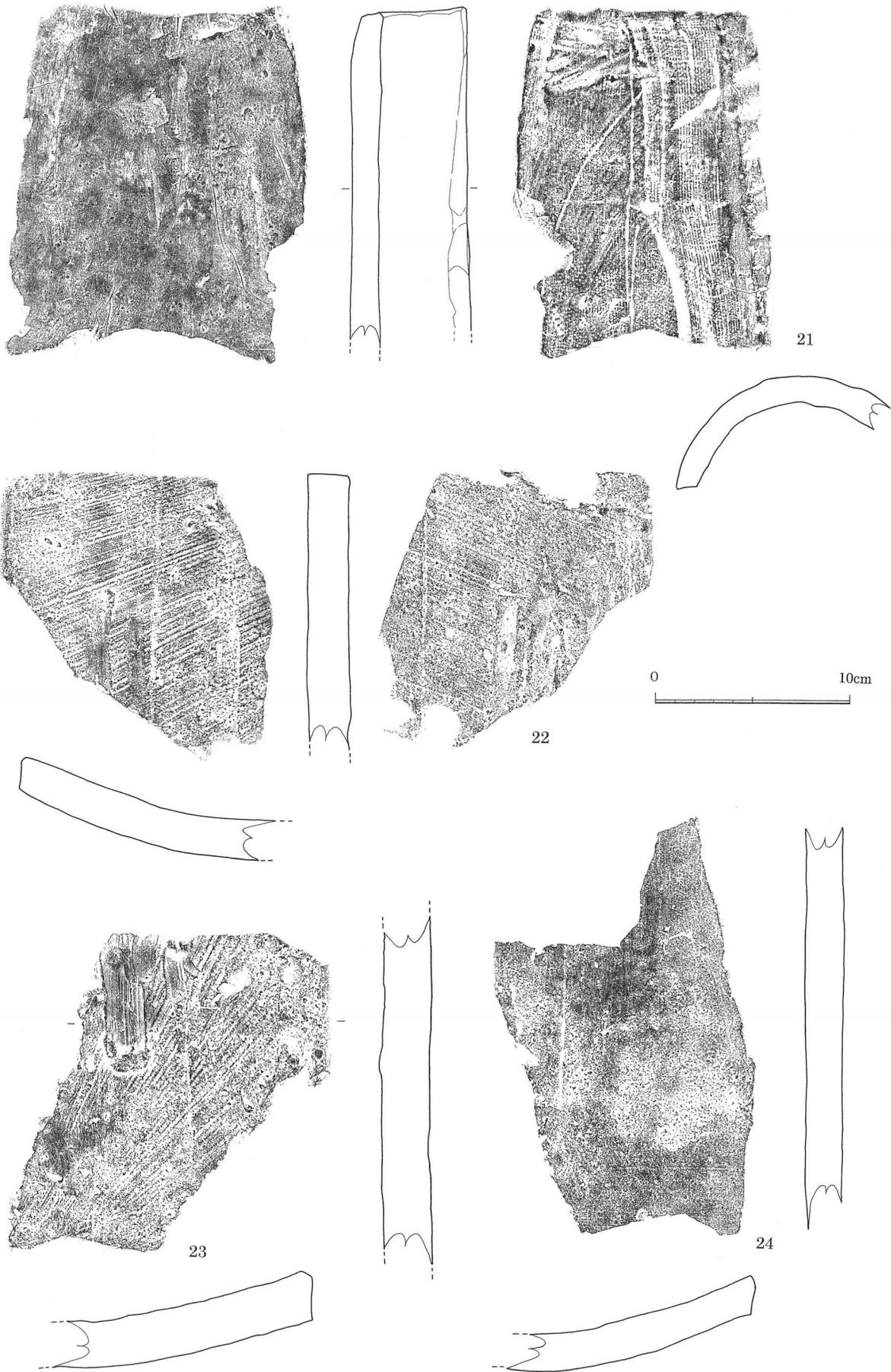
なお、この土器溜まり45出土土器中に、紀伊型の土釜が存在した(図版27b)。口縁部が、くの字状に外反し、口縁端部が上方に立ち上がり、肩部に低い突帯をもっている。この紀伊型の土



第11図 06-2区土坑32出土遺物実測図(8~15)

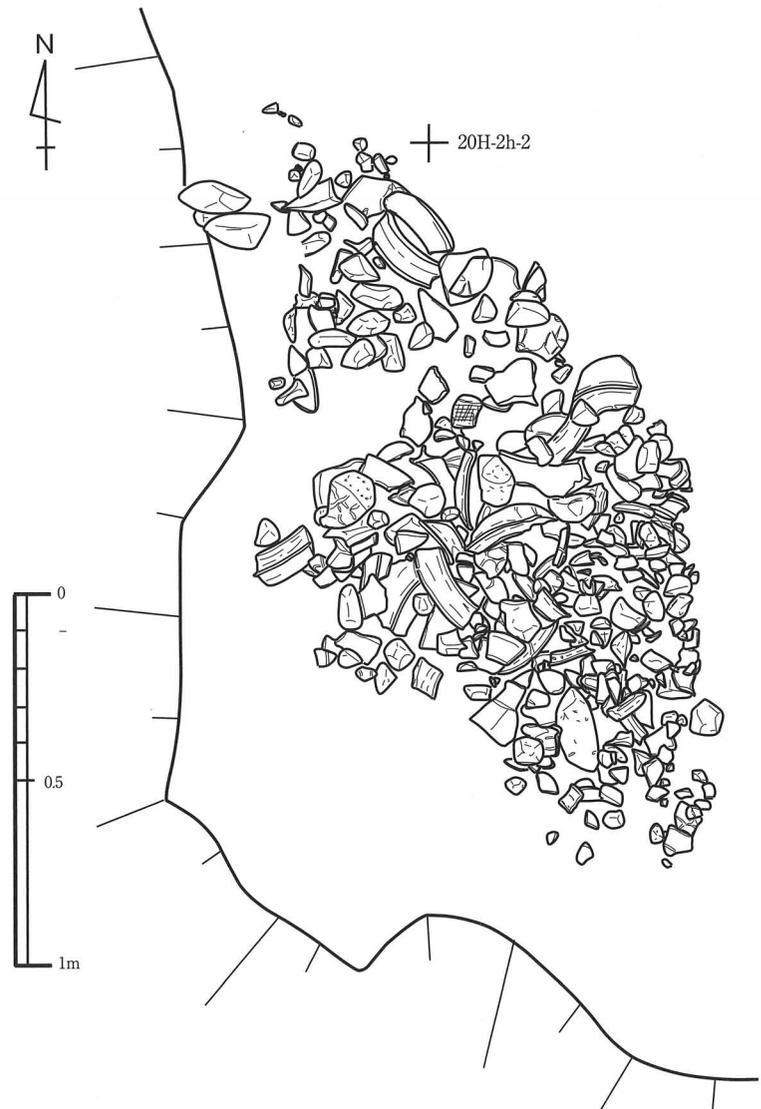


第12图 06-2区土坑32出土遺物実測図 (16~20)



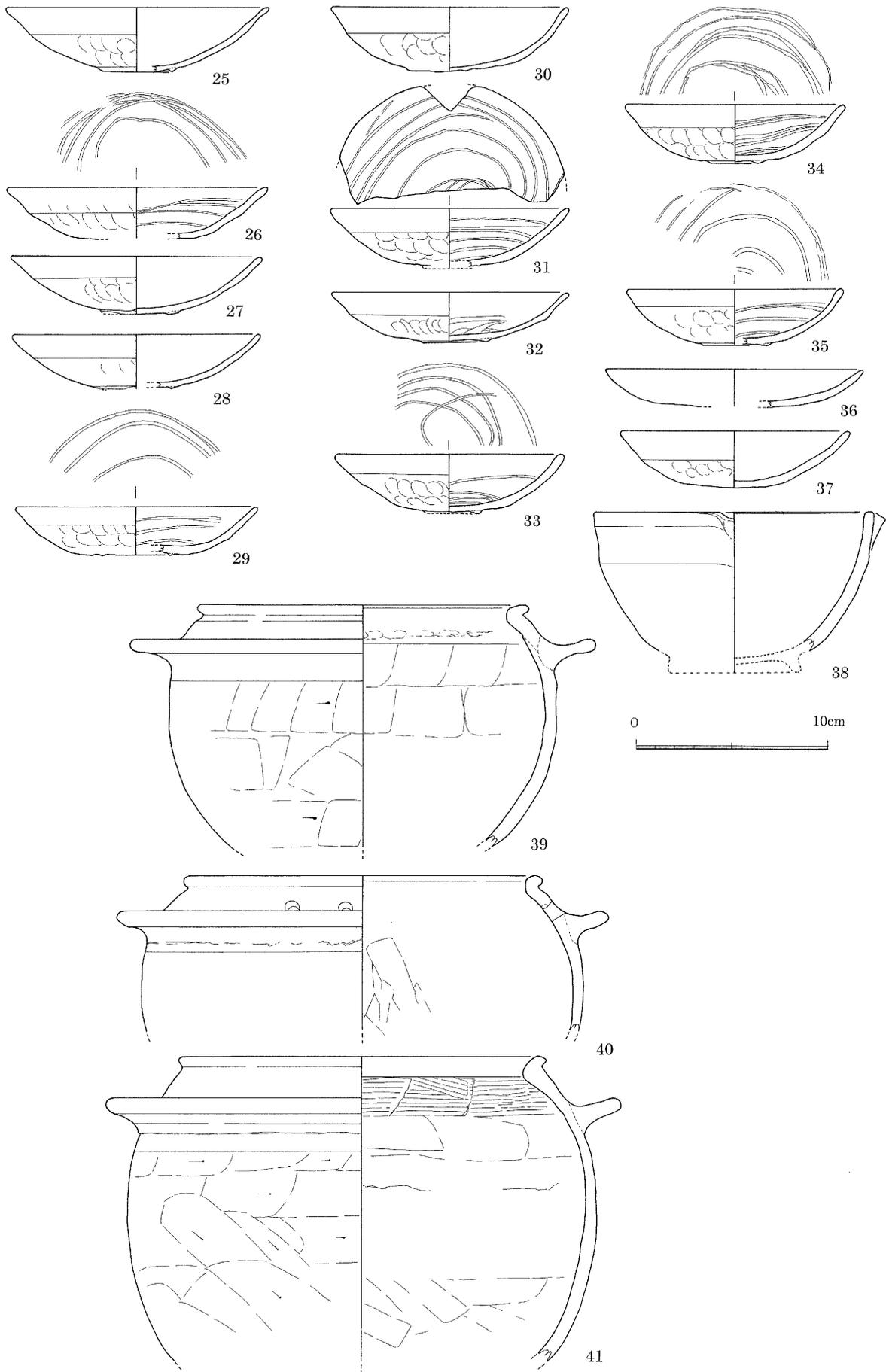
第13图 06-2区土坑32出土遺物実測図 (21~24)

釜は、かつて同じ岸和田市内の芝ノ垣外遺跡で、存在が指摘されていたもので（大阪府埋蔵文化財協会『芝ノ垣外遺跡Ⅱ』、平成5年）、遠隔地では、東大阪市西ノ辻遺跡で、元徳二年（1330）の紀年を持つ木簡と出土している（大阪府教育委員会『神並・西ノ辻・鬼虎川遺跡発掘調査整理概要・Ⅳ』、昭和62年）。岸和田市域では、吉井遺跡、下池田遺跡、神於寺跡などでも出土していることが分かってきた。13世紀中葉～14世紀中葉にかけて、紀伊との関連の強いことが分かってきた。形態のもう一つの特徴である器壁の薄さという点では、同時期の分厚い和泉型土釜と大いに異なり、煮炊きの際の消費燃料の量の差という点で、有用な道具として重宝された可能性が考えられた。

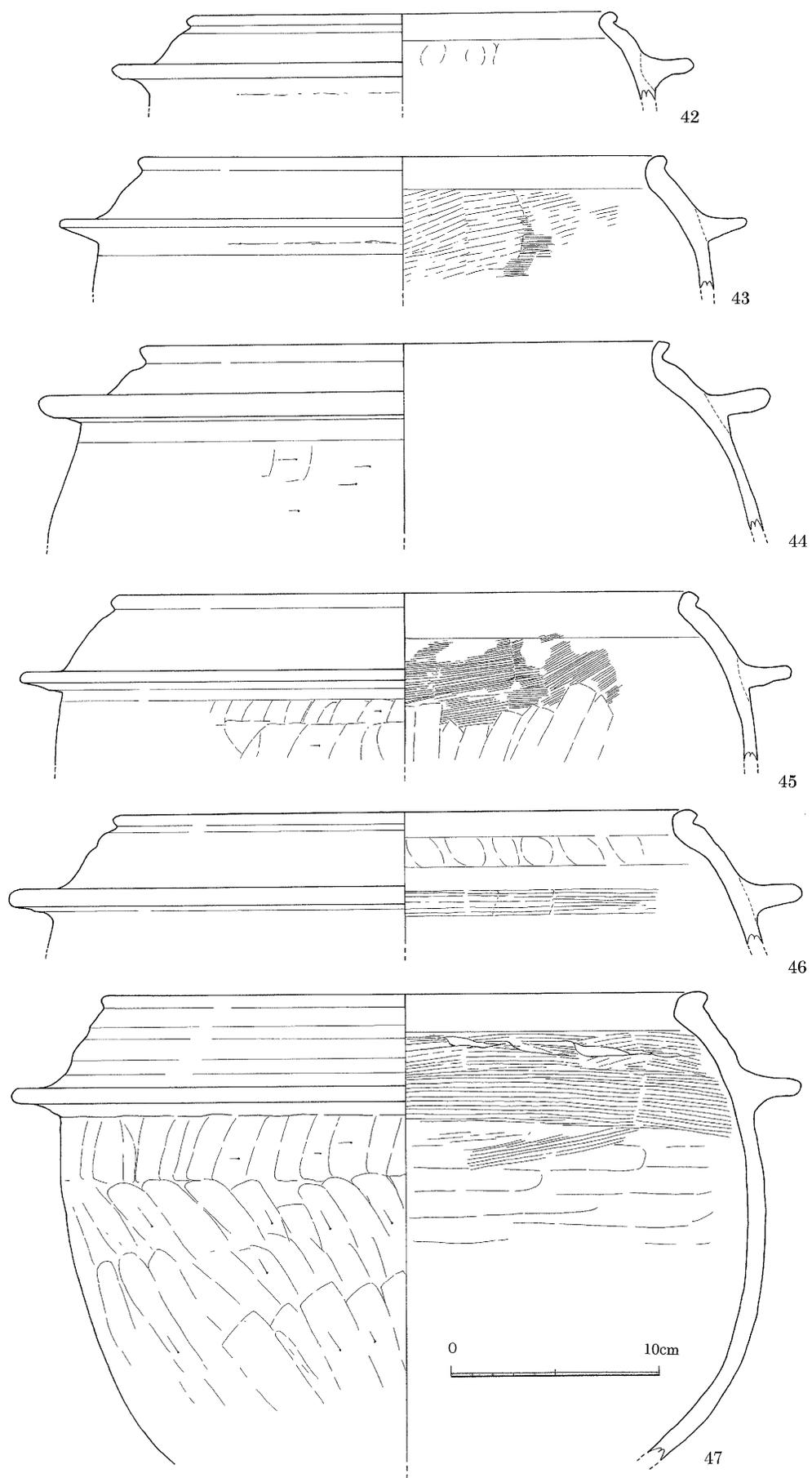


第14図 06-2区土器だまり45平面図（1/20）

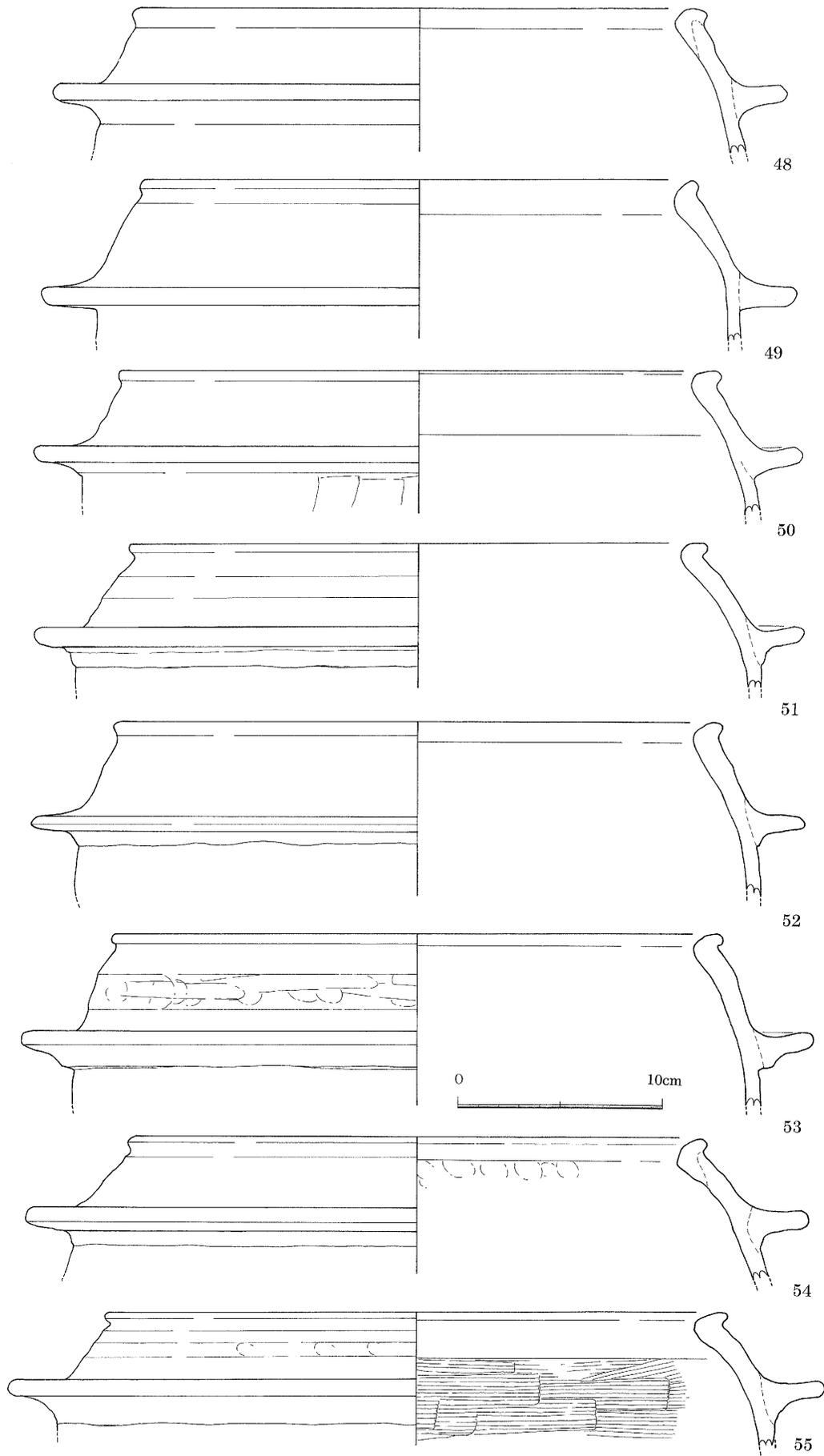
木組井戸47（第19～21図） 調査区中央やや東寄りで見出された。掘方は一辺約2mの隅丸方形を呈し、断面は逆台形状に掘削されている。東側は幅0.8mの溝になぜか繋がっている。掘方の西南寄りでは、幅15cm前後の板や杭を複数打ち込んで一辺約0.8mの方形枠をつくり、同様な板や杭を横木にして固定していた。それら木組みを除去して掘り進むと、きれいな20cm内外の平坦な石で周囲を固定した大型の檜製の曲物が現れた。この時点で湧水が激しく、掘り下げはポンプを浸けながら行った。井戸枠は、二つの底の無い曲物を入れ子状にしたもので、上が径約45cm、高さ約35cm、下が径約37cm、高さ約35cmをはかる。二枚の曲物の内側にはきれいな縦のスリットが入り入れられ、入念に折り曲げられたことがわかる。この二枚の曲物は、各々方孔を縦に四～五ヶ所ずつ穿って、桜の皮などで固定したものであった。さらに、その外側には径46～51cm、幅5～12cmの檜製薄板の曲物を六枚巻いて固定していた。これらの薄板も二ヶ所以上の方孔を穿って桜の皮で固定したものである。実際、調査前まで曲物は安定した状態であった。また曲物は、通有の水汲み桶などではなく、今でいう漬物樽の底を抜いたような形態に近い。何か、曲物桶を転用したというより、特別に作った可能性も考えられよう。なお、木組井戸底面の深さ



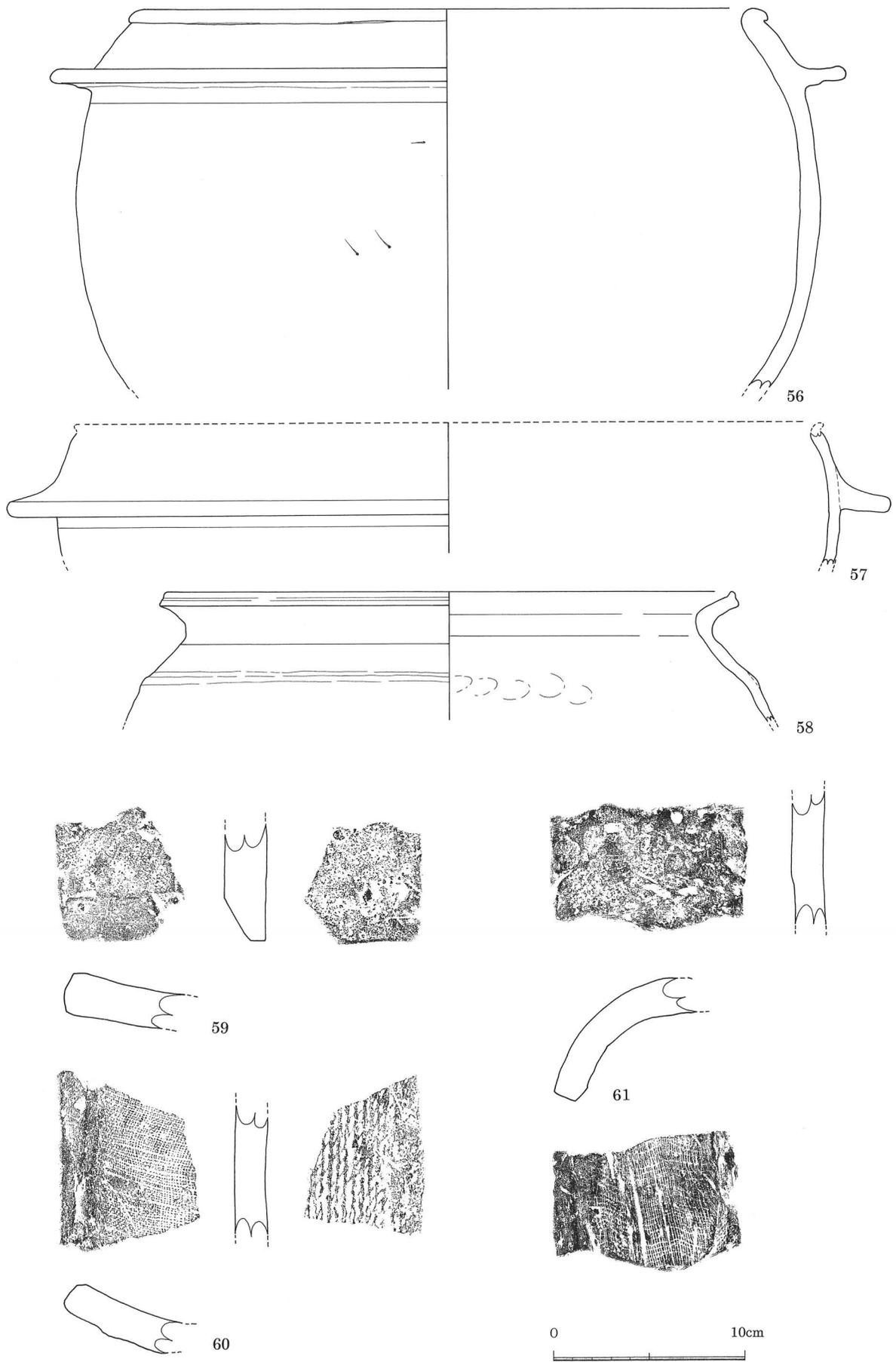
第15図 06-2区土器だまり45出土遺物実測図 (25~41)



第16図 06-2区土器だまり45出土遺物実測図(42~47)



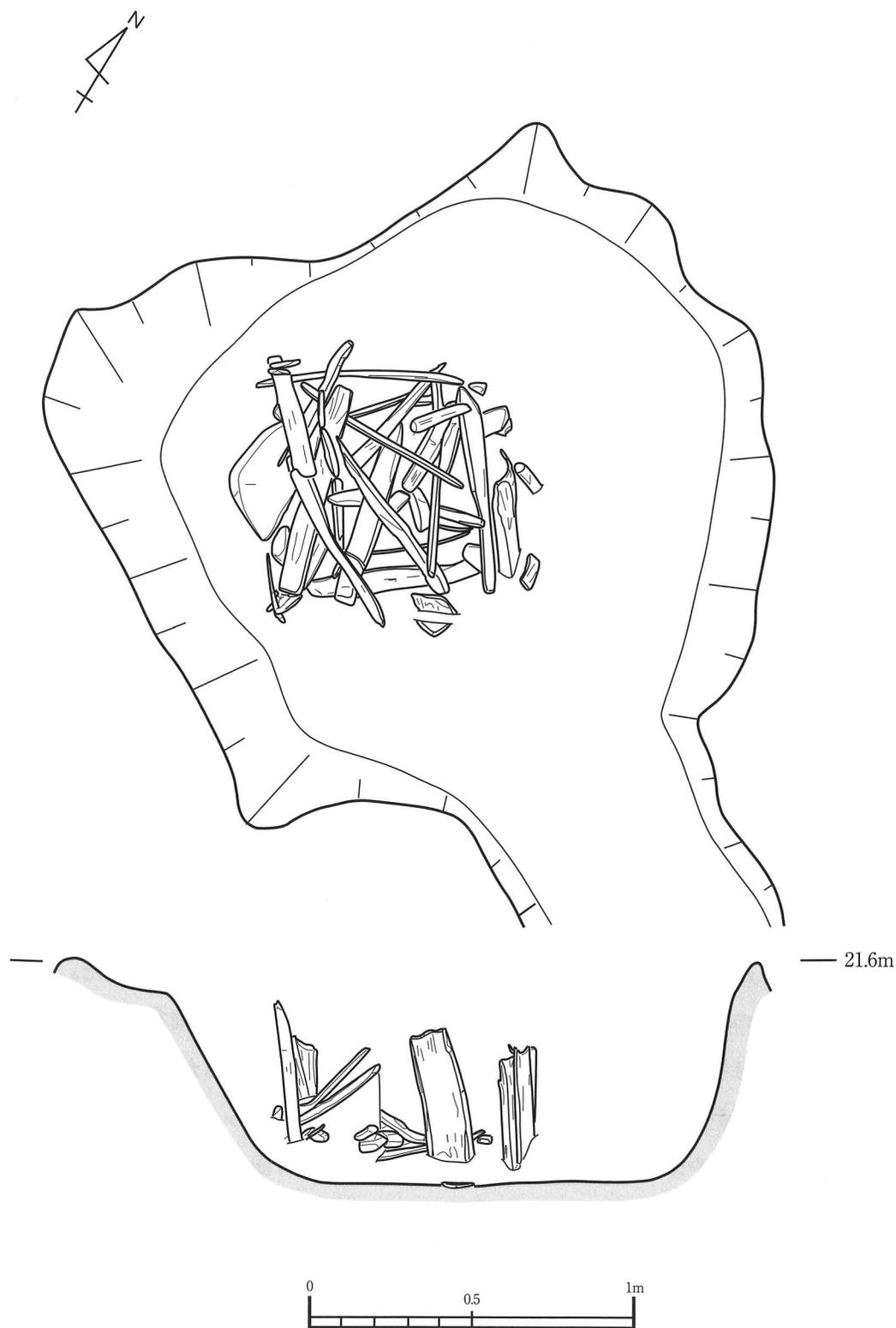
第17図 06-2区土器だまり45出土遺物実測図(48~55)



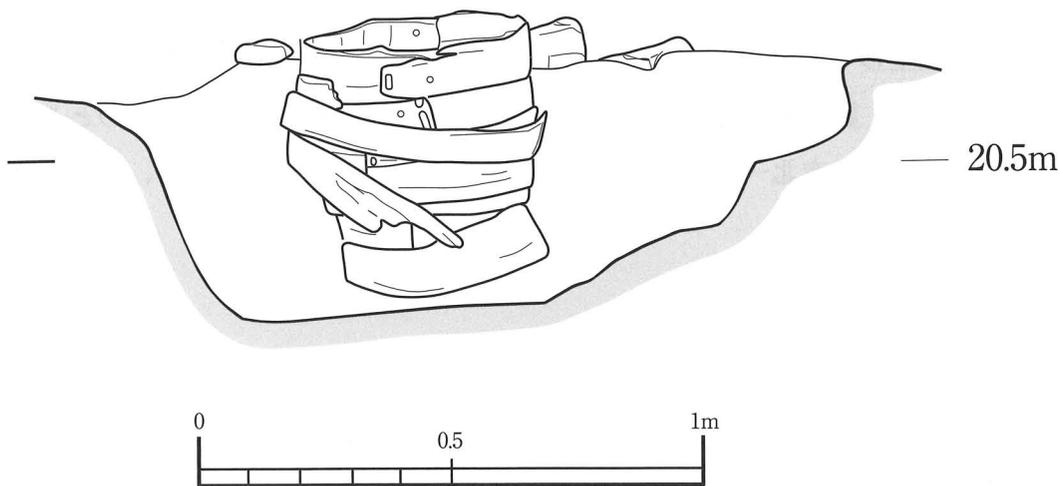
第18図 06-2区土器だまり45出土遺物実測図 (56~61)

は検出面から約1.4mであり、T.P.+20.2m前後をはかる。なお木組や曲物内部からは、瓦や瓦器、土師質土釜などが出土しており、本井戸の廃絶時期はそれらから13世紀中葉と考えられる。

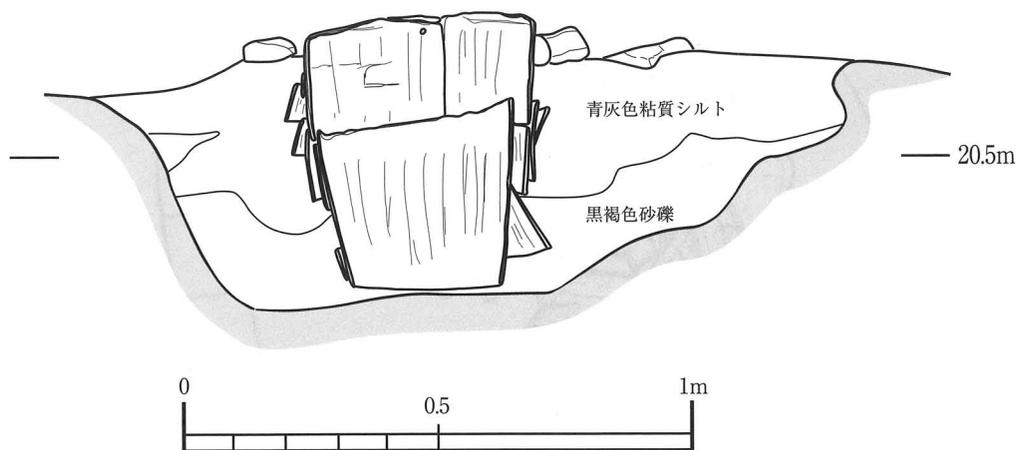
石組井戸48（第25図） 調査区中央やや西寄りの北壁際、木組井戸47から西へ10mのところ検出された。井戸の掘方は、南北一辺約1.65m、東西一辺約1.5mの隅丸方形を呈し、その断面は逆



第19図 06-2区木組井戸47上面平面図・立面図（1/20）



第20図 06-2区木組井戸47立面図 (1/15)

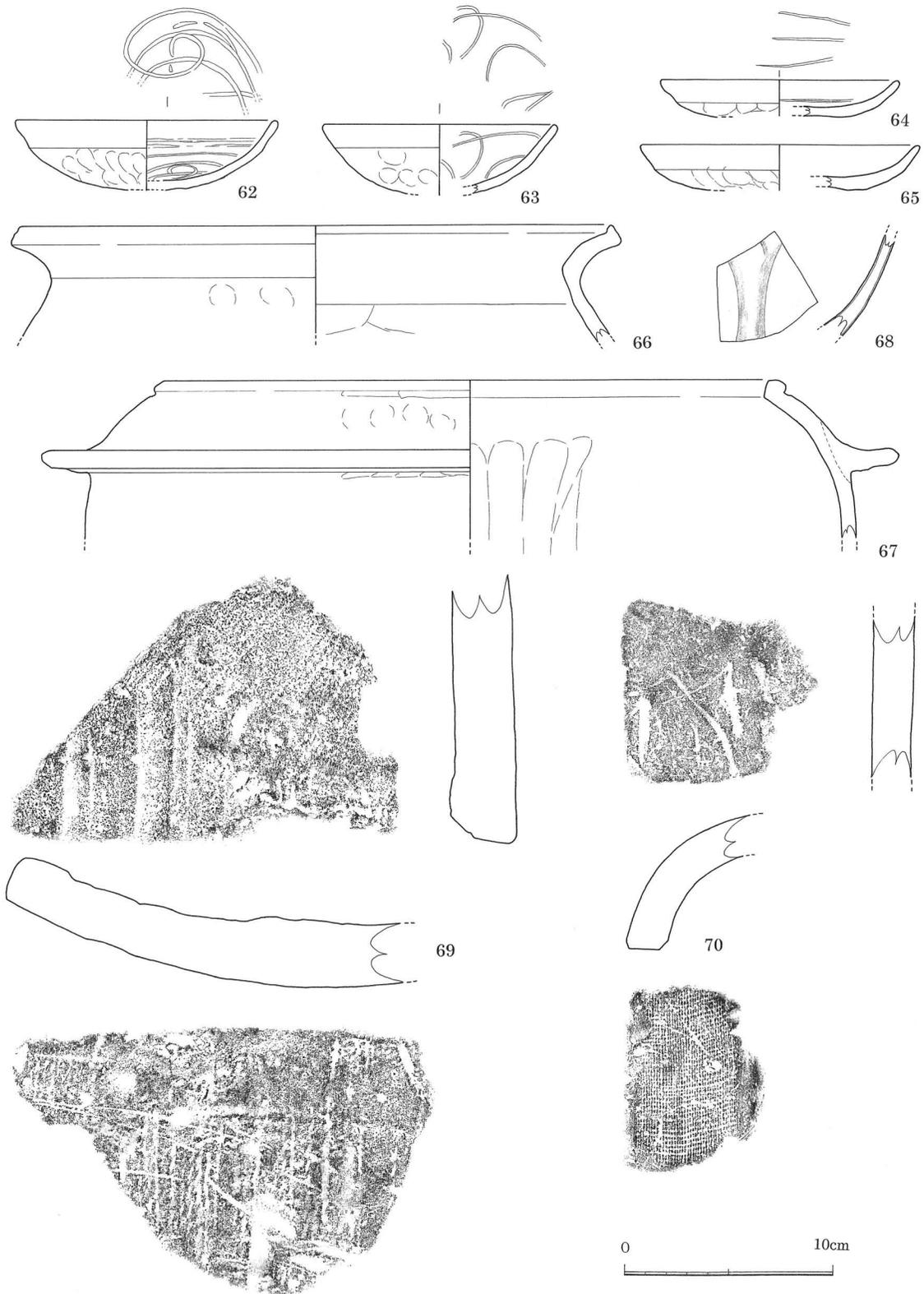


第21図 06-2区木組井戸47立面図 (断ち割り断面 1/15)

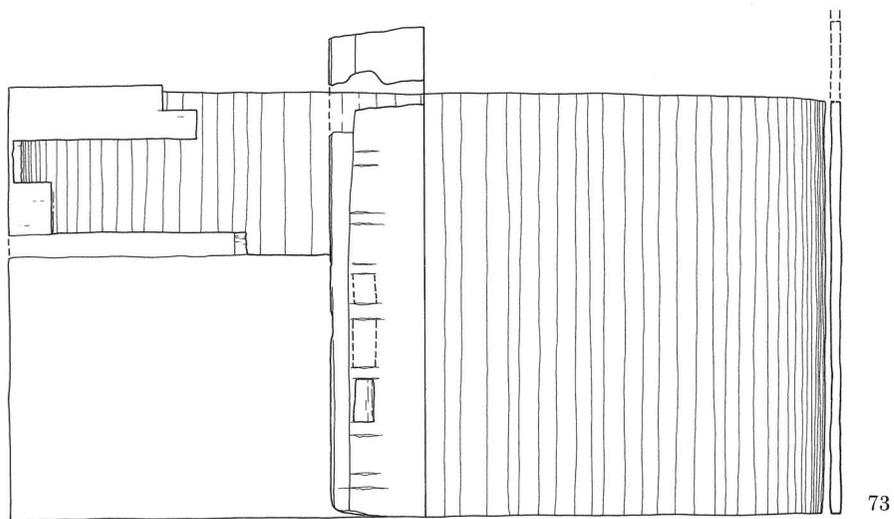
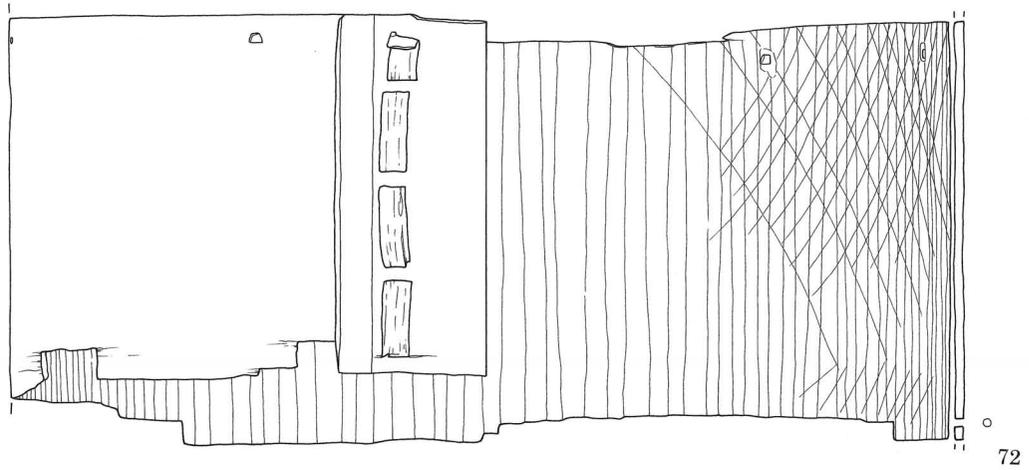
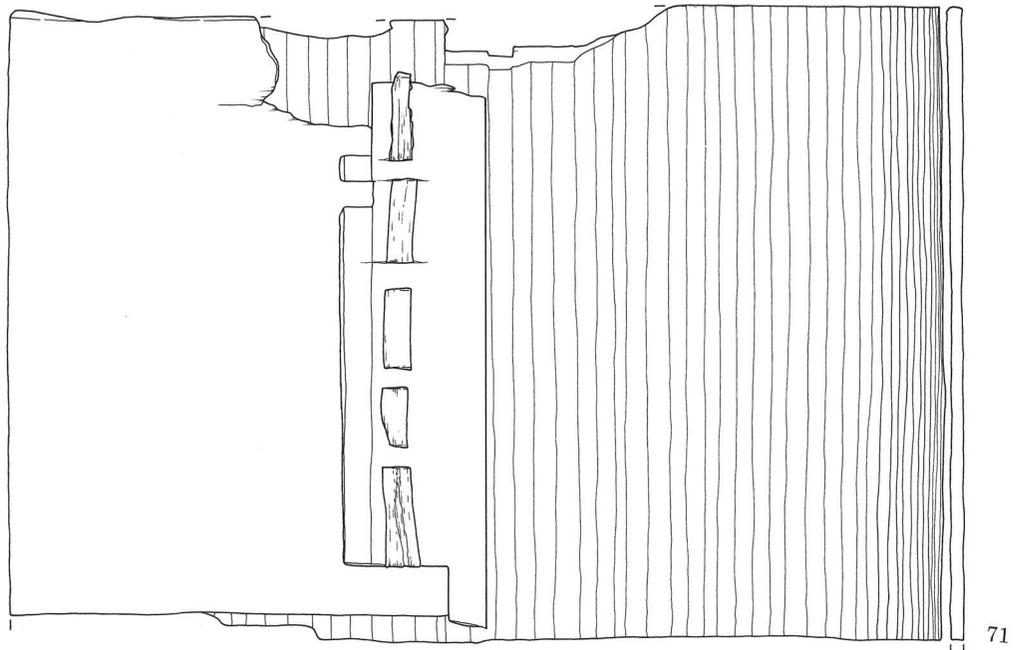
台形に1.7m前後まで掘削されている。掘方の内側には、検出面から1.3mの深さまで、人頭大や拳大の花崗岩製の河原石を巧みに貼り付けて石組を構築していた。石組は控え積みが無く、一重である。石組の下部には、長辺60cm前後の長方形板を正方形に組んで井戸枠としていた。方形板の短辺中央には、刀子で凹凸を削りだしてホゾとし、それらを組み合わせていた。なお、このヒノキ製の長方形板の寸法は、長さ60cm前後、幅30cm前後、厚さ3cm前後であり、各々二尺、一尺、一寸と定型に切り揃えられている。ただ基本的には長方形であるが、一部辺が真っ直ぐでない部分や、板の表面が欠損している部分もみられる。そのことから、本来は井戸枠用に切り出されたものではなく、扉や床などの廃材を利用して加工された可能性が高い。なお、井戸内部の内法が狭く、かつ湧水が激しいため、人が中に入って自由に動ける層位的な発掘はできなかった。ただ埋土内より、釣瓶に使用したと考えられる径約18cm、高さ約5cmのヒノキ製薄板が二枚出土している。なお、井戸底面の高さはT.P.+20.5mであり、木組井戸47より30cmも高い。井戸内からは漆器椀、瓦質土釜、瓦器、土師器、青磁などが出土している。それらから、本井戸の廃絶時期は、14世紀中葉と考えられる。

さて、上述した四つの遺構の先後関係について考えなければならない。出土遺物からすれば、土器溜まり45と木組井戸47はほぼ同時期である。そして、それらから約100年遅れて、土坑32や石組井戸48が廃絶されたものと考えられる。井戸の立地としては、木組井戸47の方がよい。

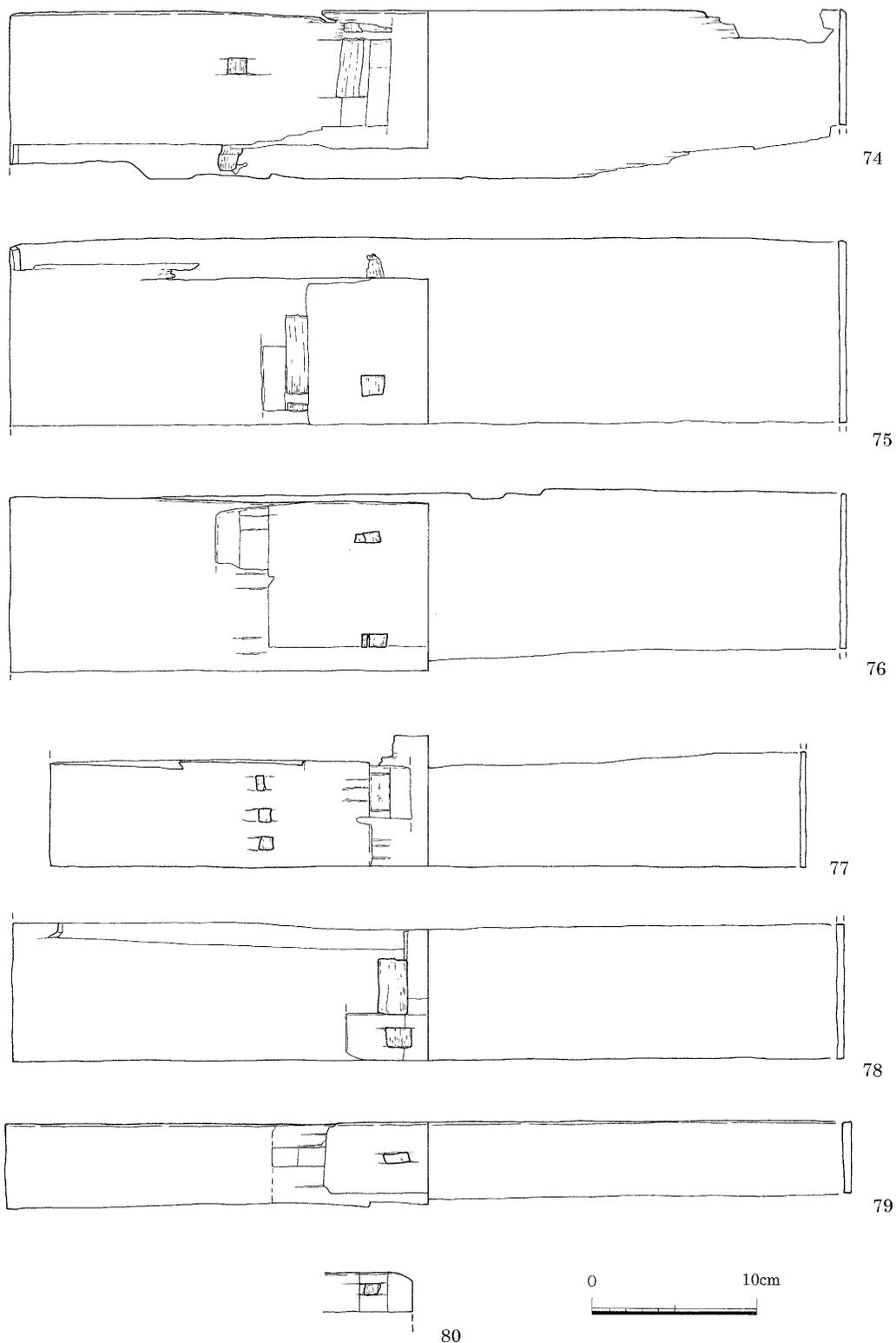
ところで、この細長い調査区にもかかわらず、近世井戸を含め三基の井戸が検出されているが、



第22図 06-2区木組井戸47出土遺物実測図 (62~70)

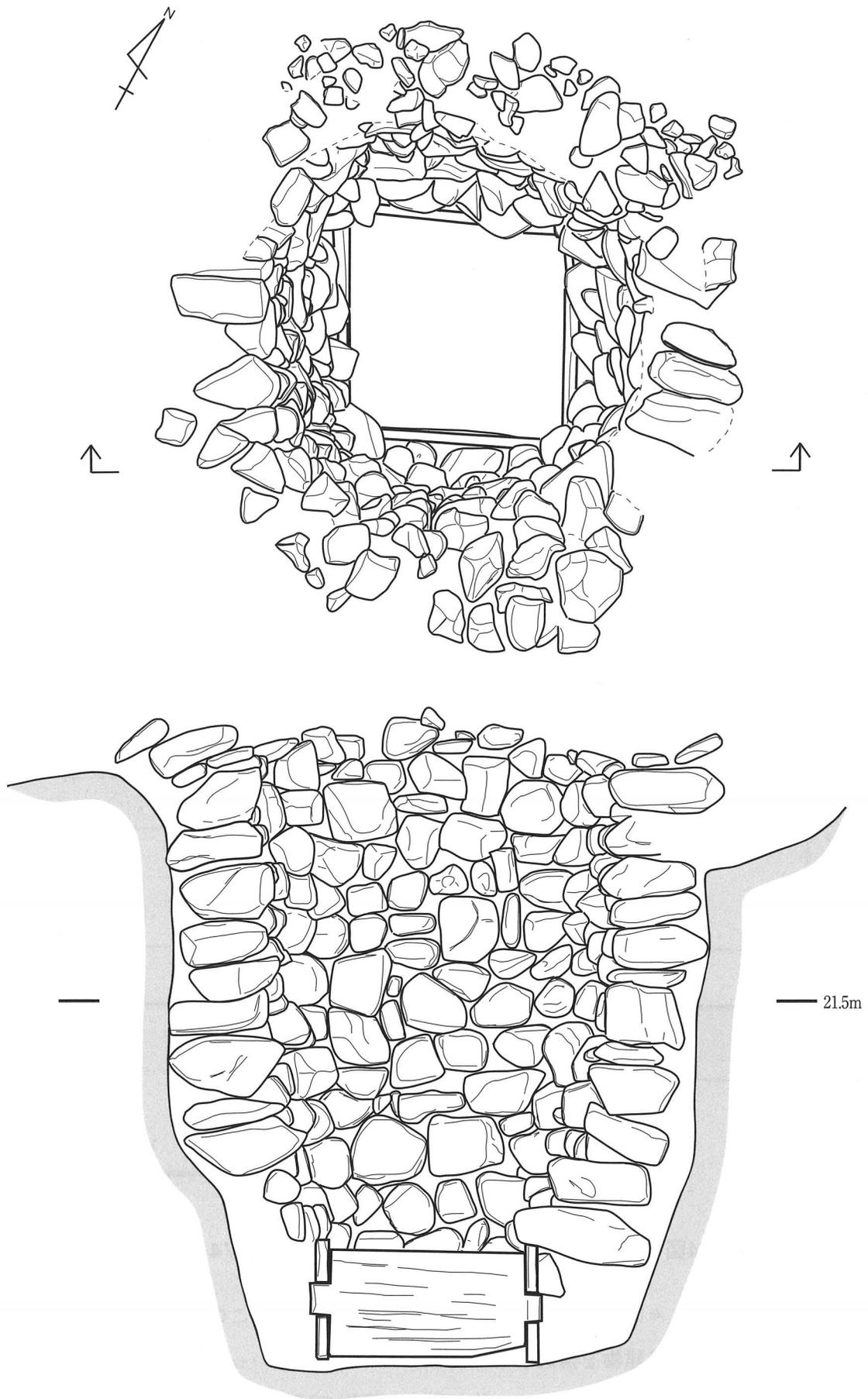


第23図 06-2区木組井戸47出土曲物粹実測図 (71~73)

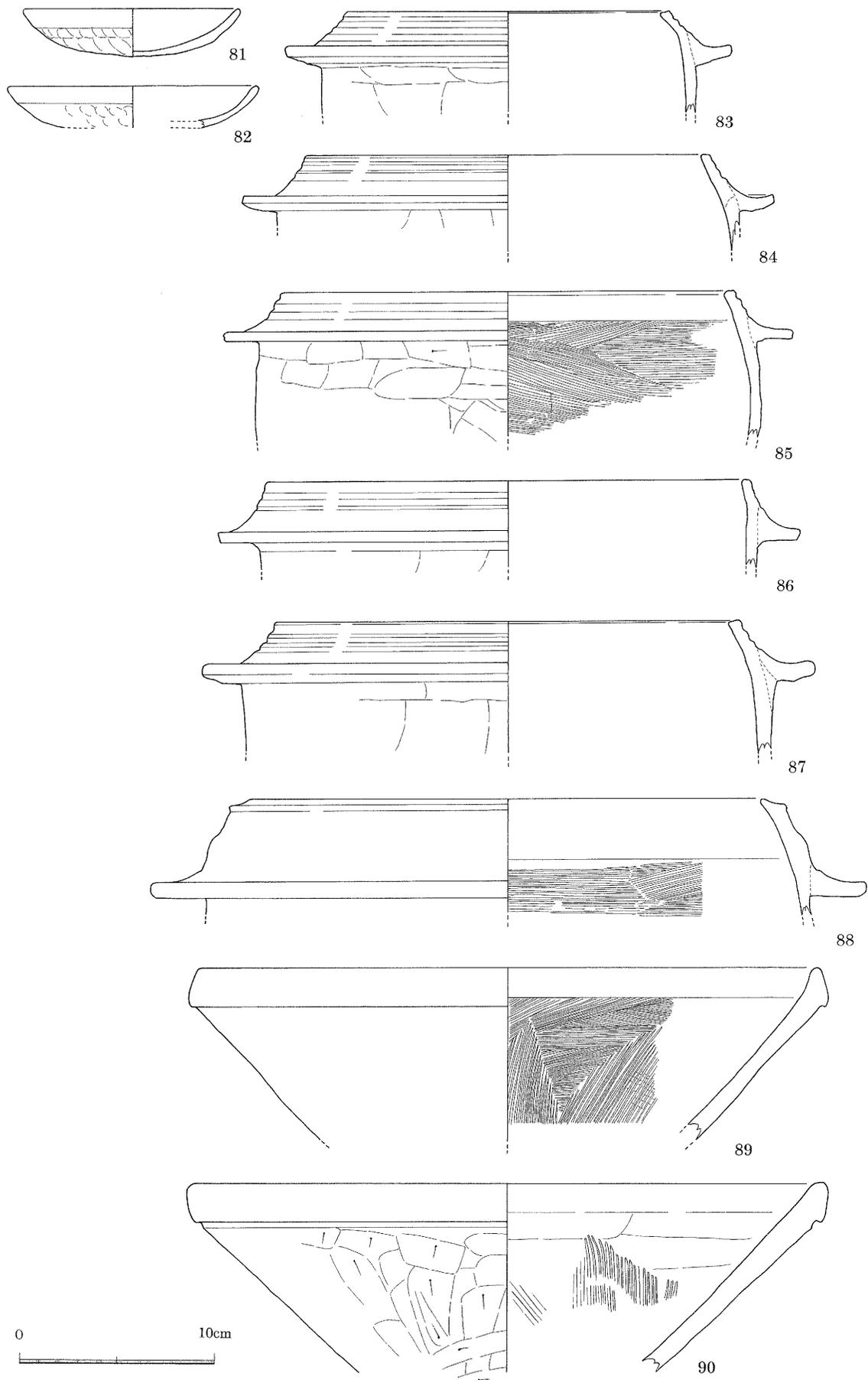


第24図 06-2区木組井戸47出土曲物粹実測図(74~80)

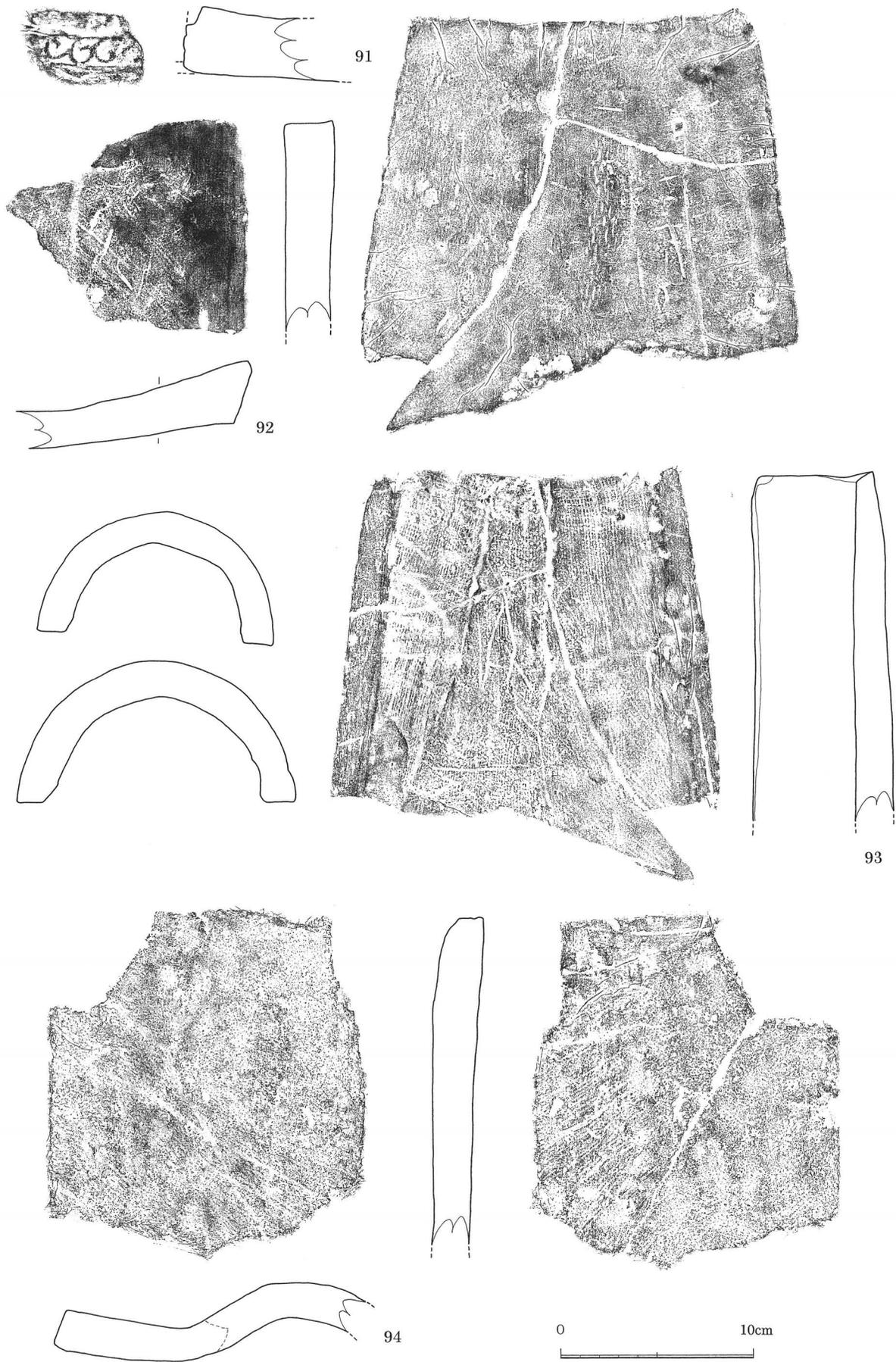
それらを日々使用する人々の住まう建物が全くみられない。通常、この時期の建物は掘立柱建物であるが、この調査区では建物を構成するようなピットは全くといっていいほど検出されていない。ということは、掘立柱建物ではなく、他の形態の建物の可能性、たとえば屋根に瓦を葺くような礎石立ちの建物だった可能性が高い。ただ、この時期で礎石立ちの建物となると、一般的な



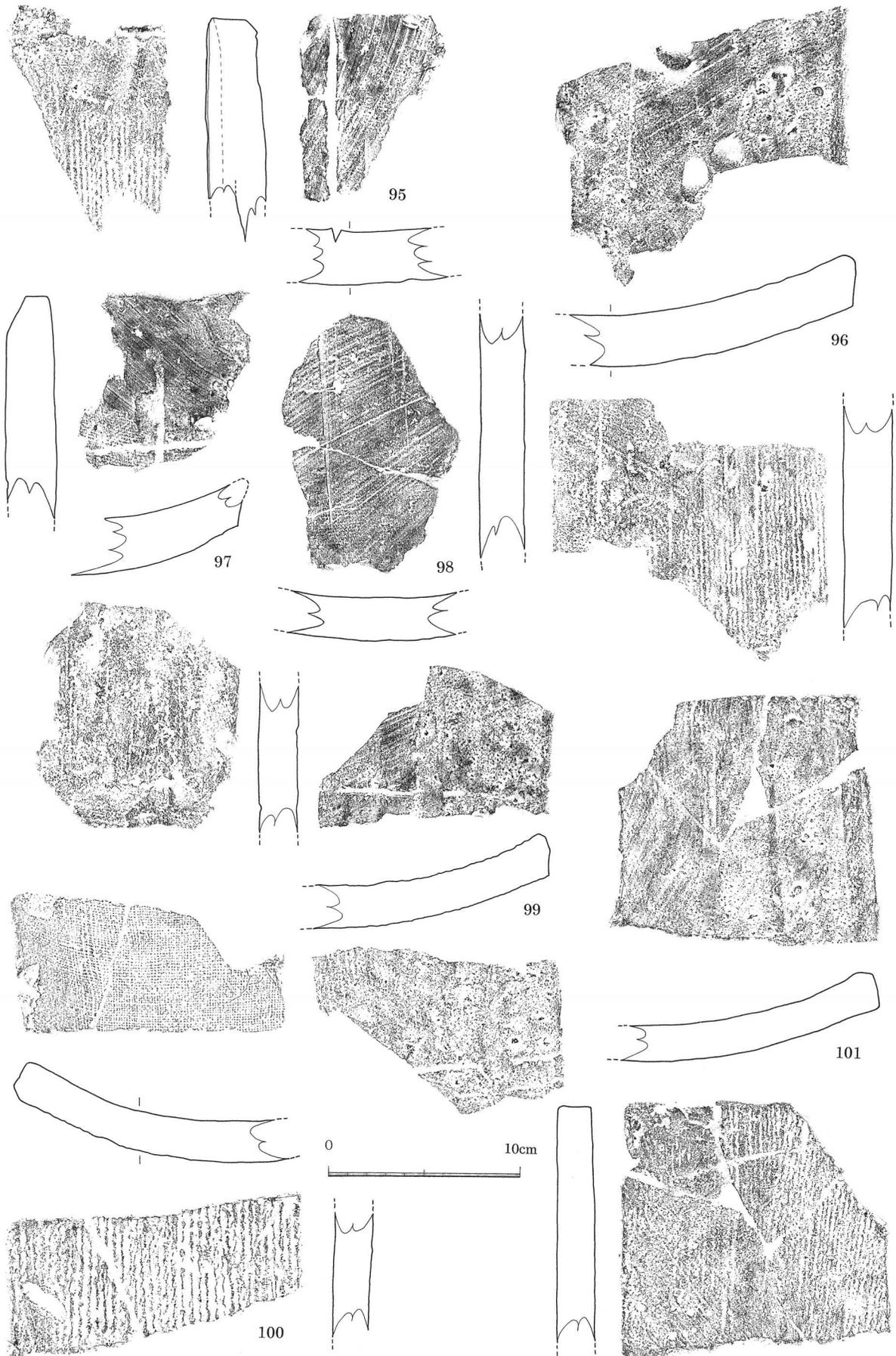
第25図 06-2区石組井戸48上面平面図（上）、立面図（下）（1/15）



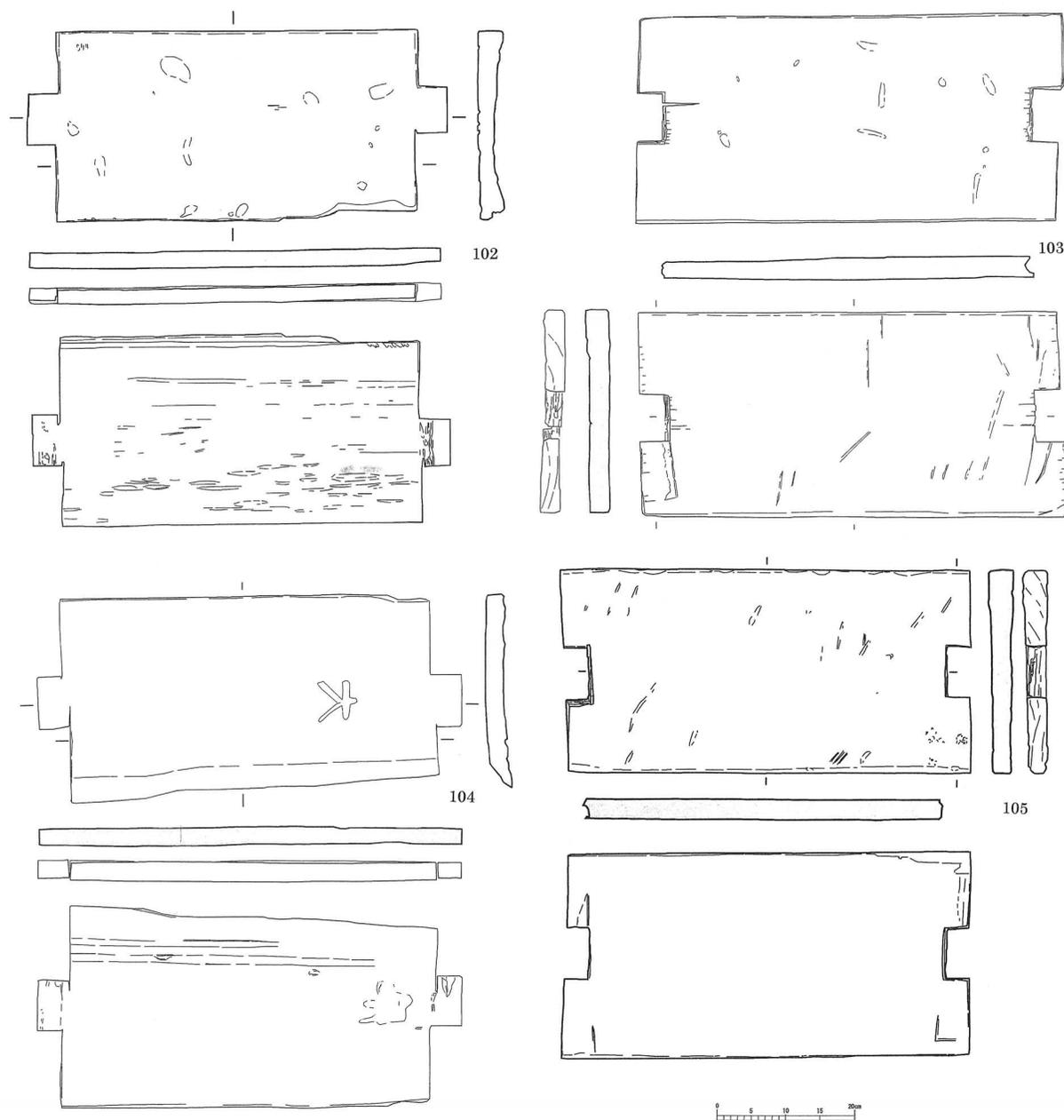
第26図 06-2区石組井戸48出土遺物実測図 (81~90)



第27図 06-2区石組井戸48出土瓦実測図(91~94)



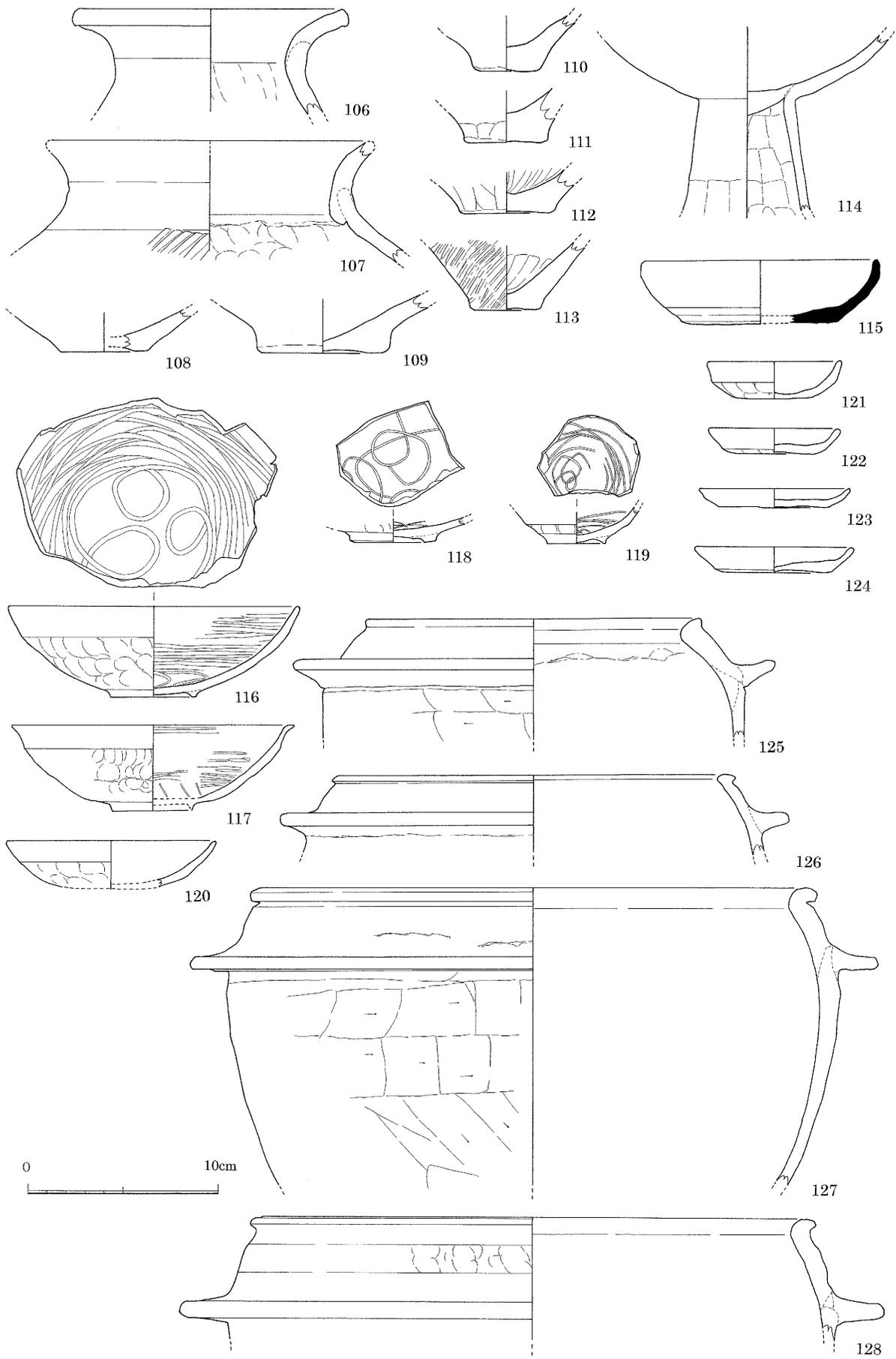
第28図 06-2区石組井戸48出土瓦実測図 (95~101)



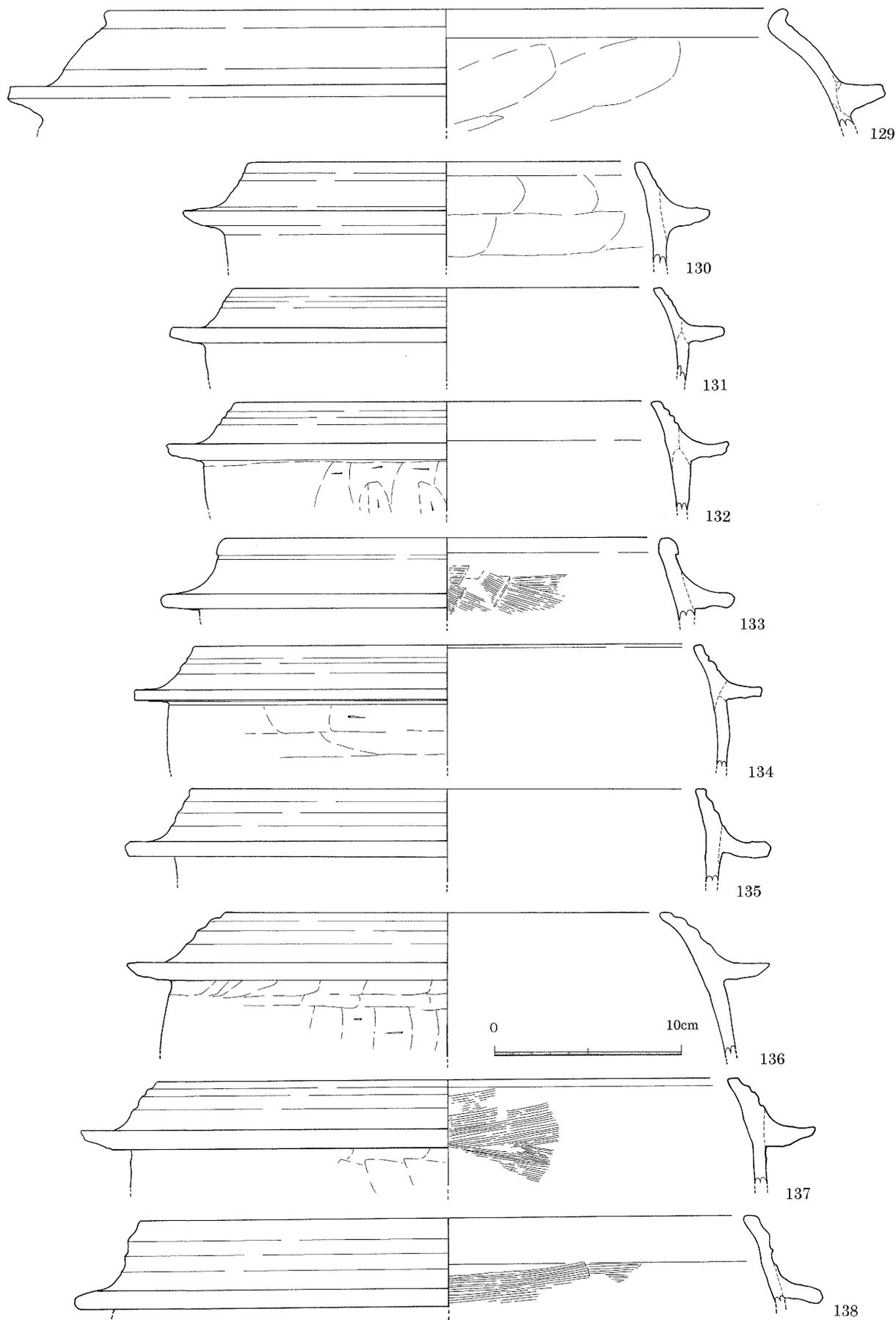
第29図 06-2区石組井戸48出土木製井桁実測図(102~105)

集落の建物ではない。すなわち、寺院の一部であった可能性が高い。それは、入念な井戸の作り、多量の瓦の出土、青磁碗などの奢侈品の出土などからも首肯しうる。その傍証として、「大日寺如来」と印された軒丸瓦が二点出土している。ただ、その場合でも、金堂や講堂といった大規模伽藍の一部ではなく、僧坊などといった生活臭のある小規模な建物と考えられよう。

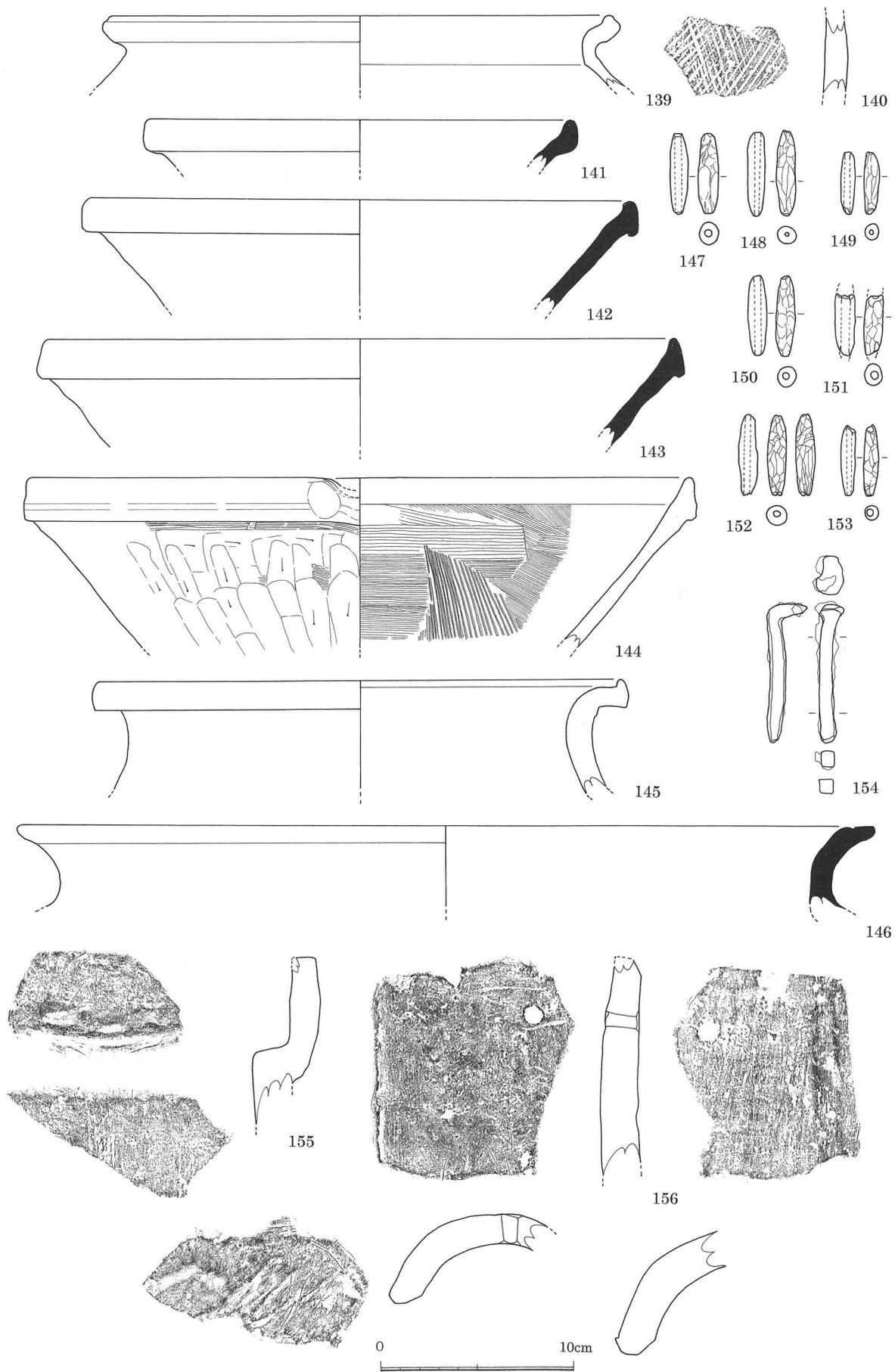
06-2区包含層(第30~34図) 06-2区の遺構からの出土ではない遺物を包含層遺物として取り扱う。弥生時代後期の壺・叩き目のある甕・円盤充填の高杯、古墳時代後期の須恵器杯身、12世紀後半の瓦器椀、土師器中皿・小皿、土師器土釜(和泉型・紀伊型)、瓦質土釜、須恵器甕、東播ねり鉢、瓦質すり鉢、常滑焼大甕、土鍾、頭部を直角に折り曲げた断面方形の鉄釘、丸瓦、平瓦などがある。時代としては、弥生時代後期に始まり、途中、古墳時代の遺物もあるが、極めて少ない。主なものは、平安~南北朝にかけてのもので、鎌倉時代のものが中心である。



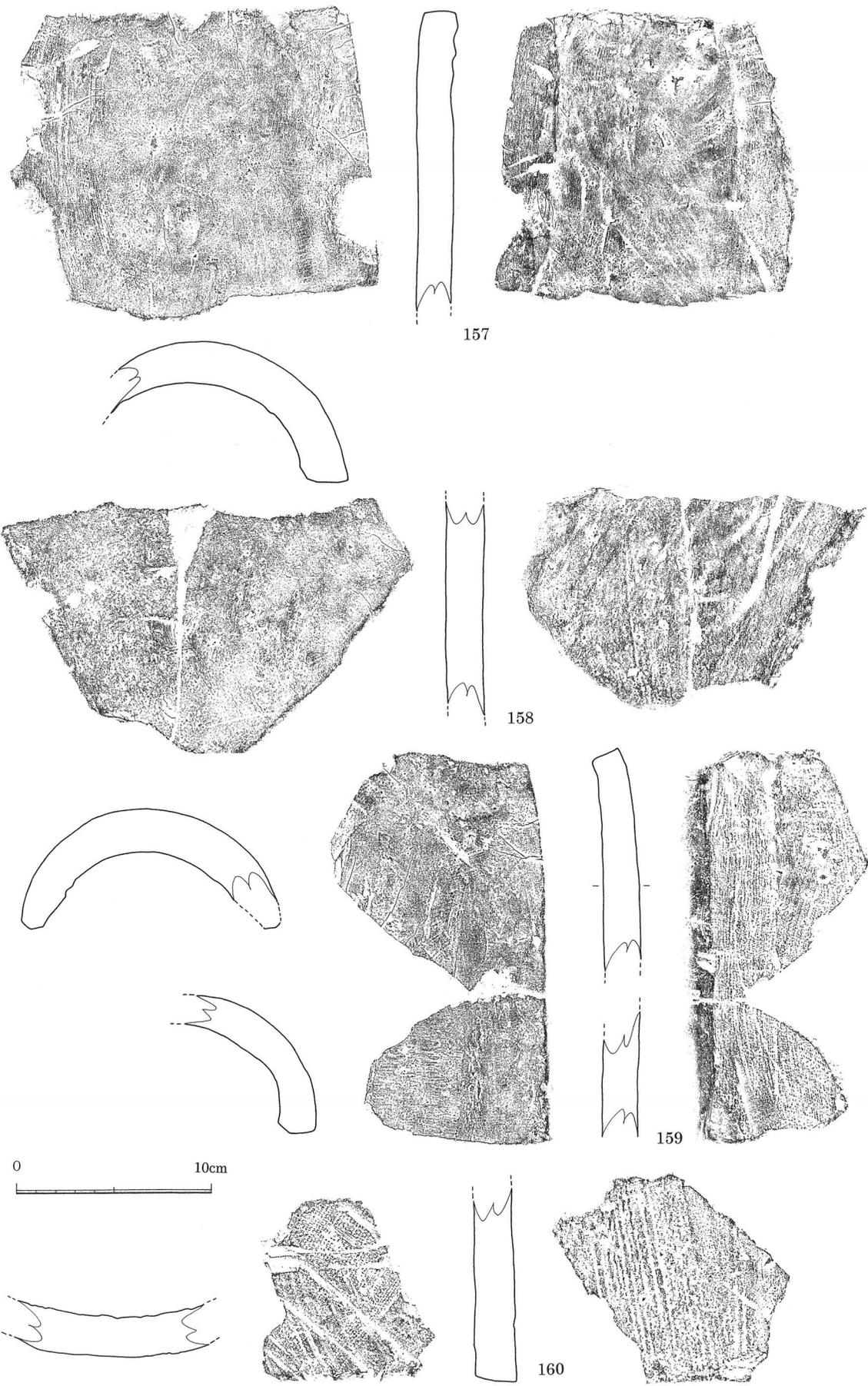
第30图 06-2区包含層出土遺物実測図 (106~128)



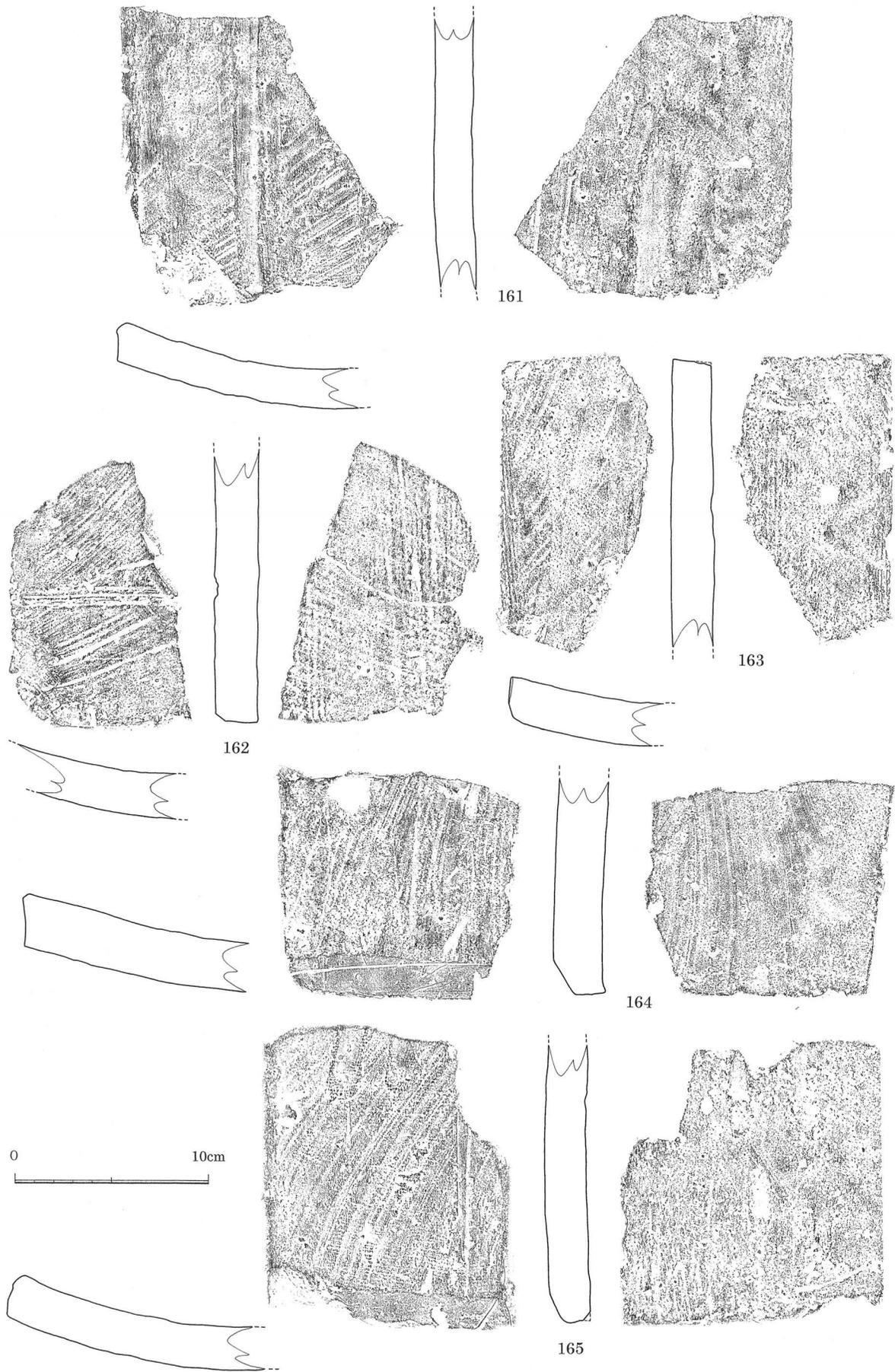
第31图 06-2区包含層出土遺物実測図 (129~138)



第32图 06-2区包含層出土遺物実測図 (139~156)



第33图 06-2区包含層出土瓦実測図 (157~160)



第34图 06-2区包含層出土瓦実測図 (161~165)

第3項 06-3区

本調査区は、遺跡の南端に位置している。その規模は長さ約60m、幅約20mの東西方向の長方形で、今年度調査区で最も広い。その広い調査区にもかかわらず、遺構密度は希薄である。何か、遺跡の端という感が強い。検出された遺構としては、弥生時代のものの中世のものに大別され、同じ遺構面で検出した。なお、不定形な落ち込みなども多く、性格のわかる遺構は少ない。層位的には、盛土（約1m）の下は旧耕土（約0.25m）、床土（約0.05m）、青灰色系粘質土（約0.3m）であり、比較的土の堆積は少なかった。

検出遺構と遺物

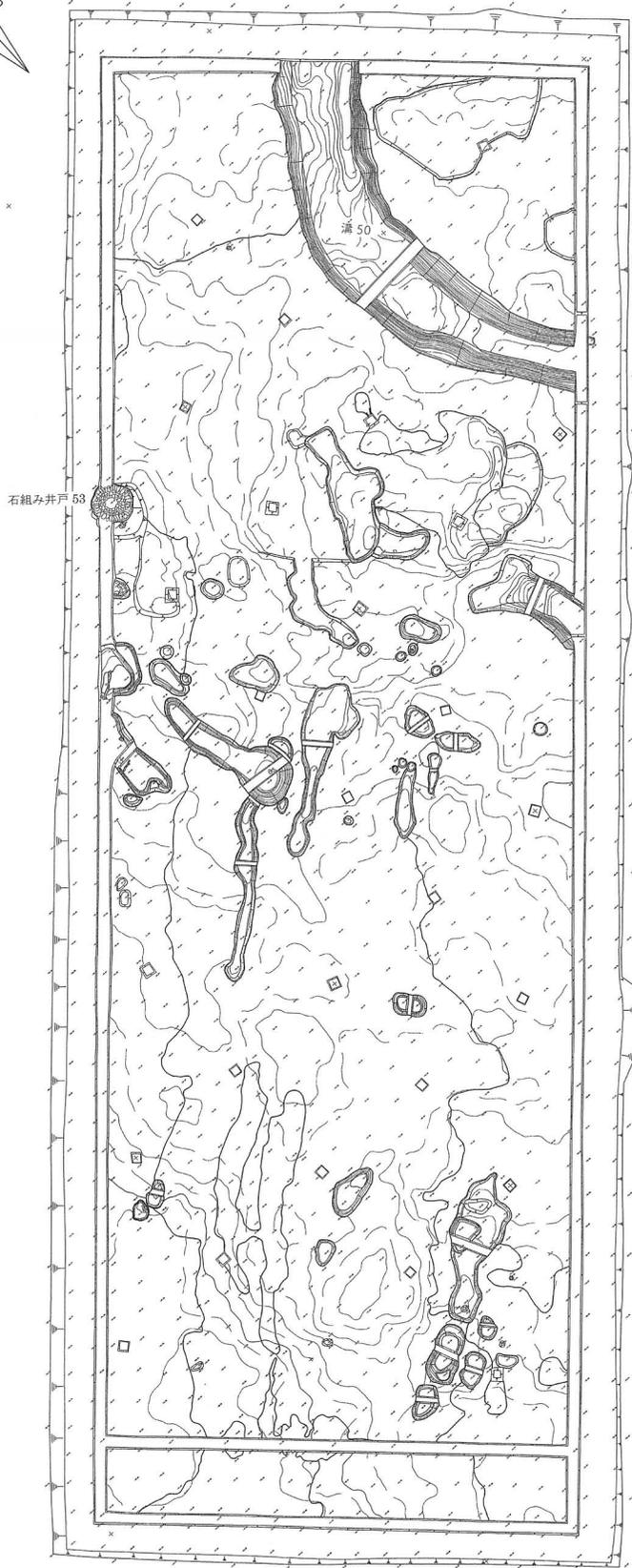
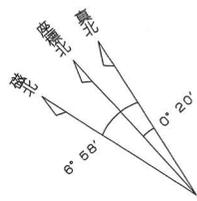
溝50（第35図） 調査区東端で検出された弥生時代後期末頃に埋まった大溝である。平面的には、西南から東北へ弧状にめぐっている。その規模は、長さ20m以上、幅約5m、深さ約0.7mをはかり、その断面は浅い逆台形を呈している。埋土は黄粘混じりの暗青灰色粘質土である。出土遺物は概ね少ないが、弥生時代後期末の叩きをもつ小型甕や加工された木製品（梯子状や丸太状）などが上面で出土している。溝の断面を見ると、粘質土系であり、一気に水が流れた形跡は認められない。

さて、弥生時代後期遺構面の空測終了後、調査区中央に長さ約35m、幅約3m、深さ約0.7mのトレンチを設定し、下層の堆積状況を調べた。その結果、約0.6m下で弥生中期中葉頃（Ⅲ様式）の土器や自然木を含む河川堆積層の一部を確認した。ベース面は完全な砂礫層である。これらの状況から、弥生時代後期末葉の溝の直下に、その規模はわからないが、さらに大規模な河川の存在が推定されることになった。おそらく、その河川こそ本調査区の東側に位置する平成16年度1区の河道3に接続するものと考えられる。

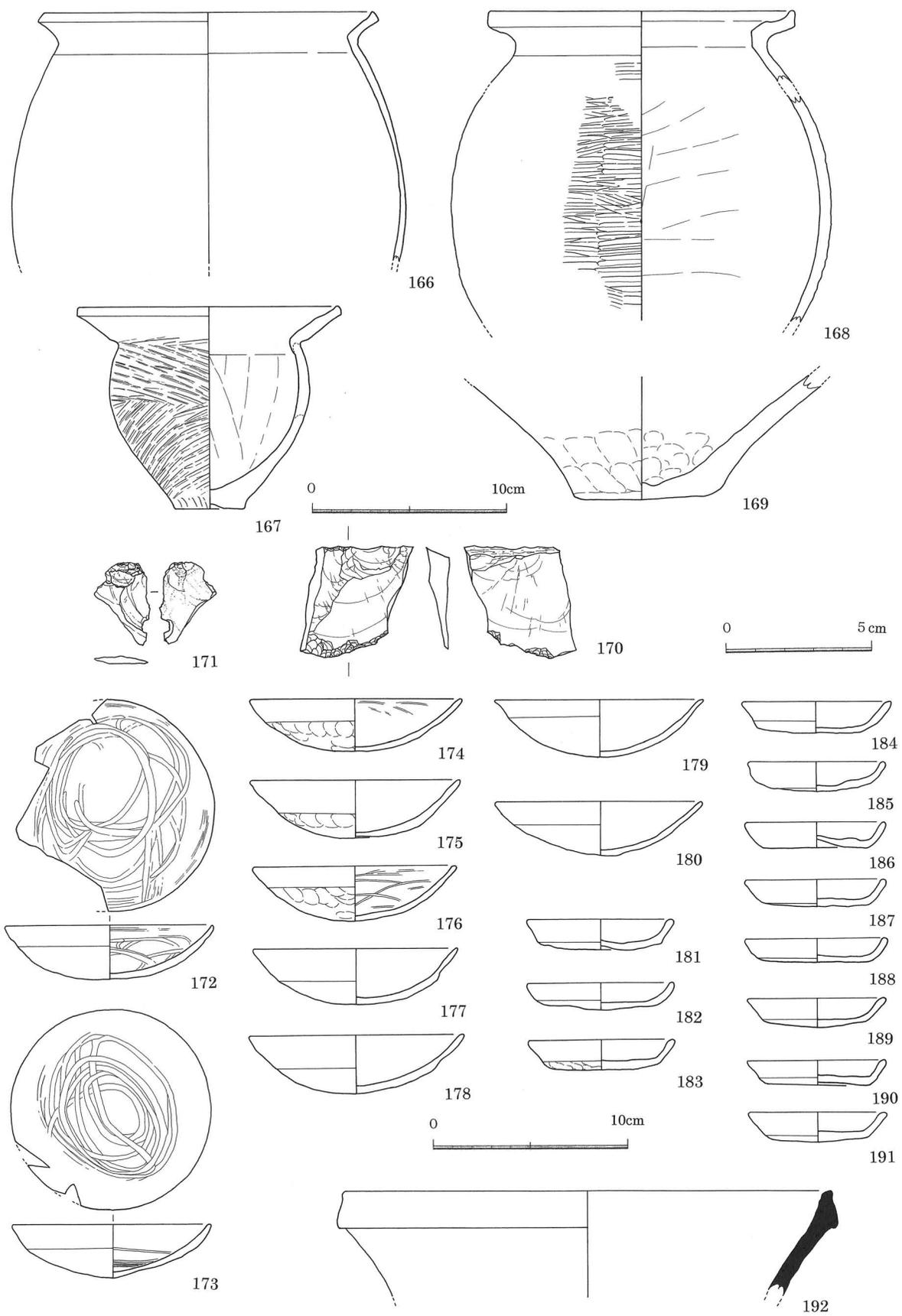
石組井戸53（第37図） 調査区中央のやや東寄り、北側側溝に石組が引っ掛かって発見された。そのため、掘方の一部は欠損している。

井戸の掘方は、平面的には隅丸方形で一辺約1.55m、深さ1.3m以上をはかる。ただ断面をみると、二段に掘削されている。すなわち、検出面から0.9mの深さまで石組は続くが、その高さまでは断面逆台形状に掘削している。問題はその下の井戸枠を入れる部分である。本井戸には、径0.42m、高さ0.5mの井戸枠を入れているが、その穴がぎりぎりの大きさ（周囲の余裕は2～3cm）で掘削しているのだ。何か落とし込むという感じなのである。ゆえに、その部分は断面筒状を呈している。

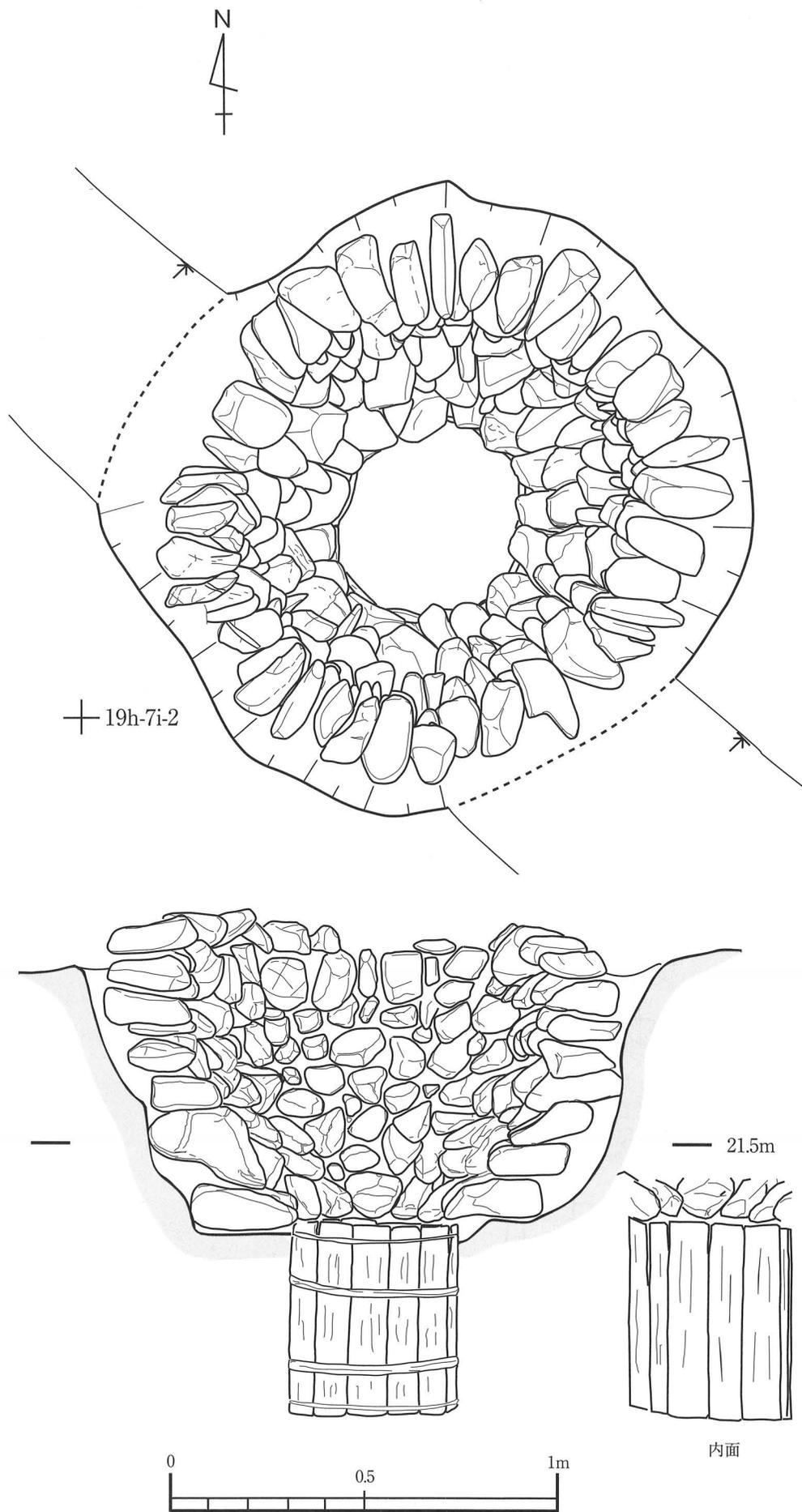
次に石組であるが、粒の揃った人頭大ほどの花崗岩製河原石を横方向に巧みに積んで、決して縦面をみせない。まるで、古墳の葺石でも葺くかのごとくなのである。この井戸の石組も06-2区石組井戸48同様、控え積み無く一重であるが、両者の石組を比べるとかなり雰囲気異なる。井戸掘り工人の個性もあるだろうが、こちらの方がより進んだ井戸造りを思わせる。省エネというか、無駄がないというか、そういう感じをうける。前述したが、石組の下には径0.42m、高さ0.5mの井戸枠を入れていたが、それはまるで底を抜いた酒樽や漬物樽の様相だった。13枚の切り揃えた短冊形の杉板を丸く束ね、外側を割竹で振じって上下で固定したものであった。中央に近い二段は太い振り竹を、端に近い二段は細い振り竹で固定していた。また短冊形の杉板は、長



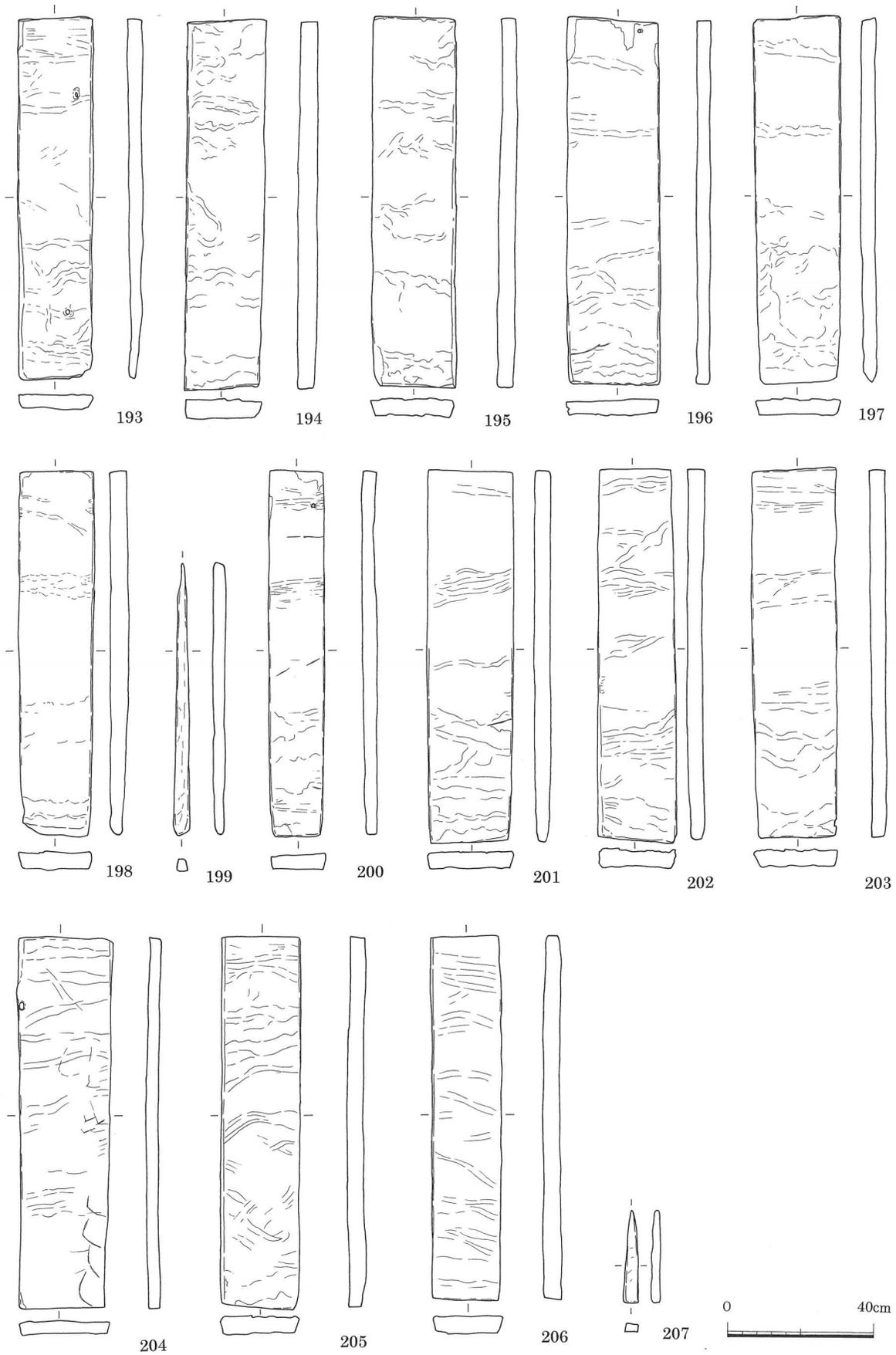
第35図 06-3区平面図 (平成18年度)



第36図 06-3区河川 (166)、溝50 (167~169)、側溝 (170・171)、石組井戸53
 (172~192) 出土遺物実測図



第37図 06-3区石組井戸53平面図(上)、立面図(下) (1/15)



第38図 06-3区石組井戸53出土桶杵実測図 (193~207)

辺の両端を斜めに削って、それらをつなぐと丸くなるように工夫していた。

なお短冊板の寸法は、長さ48.9～51.4cm、幅7.9～13.2cm、厚さ1.9～2.6cmと均一ではないが、13枚の短冊板を丸く束ねるために、一枚ずつ調節してカットしていった結果であろう。それでも隙間のできる部分には細長い木製楔を三本ほど差し込んでいた。そういった意味からすると、転用品かもしれない。なぜなら、井戸枠だけの使用だったら、若干の水漏れは気にならない。ところが、それが樽として使用されていたなら、水漏れは禁物であろう。

さて、本井戸で興味深かったのは、それを埋めていく過程であった。発掘は当時の埋めていく動作と逆の動作になる。すなわち、井戸枠の上面付近で14枚の土器が並べられていた。その内訳は土師器小皿九枚と瓦器皿五枚であった。そのうち、瓦器皿は四枚重ねだった。すべて完形品であった。本井戸は他の井戸と比べ湧水が少なく、ジワッと滲みる程度であった。井戸底面の標高もT.P.+20.8mであり、06-2区石組井戸48と比べると30cmも高い。井戸を埋めていく細かい作法はよくわからなかったが、井戸を埋める最終段階に土器を供えることがわかったと思う。井戸を埋める最終段階に関係者が集合し、儀式を行った可能性が考えられよう。また、井戸を埋める際に、井戸が息をできるようにと、井戸を埋めていく過程で節のない長い竹筒を井戸中央に突き刺すことは現代でもよく耳にする現象である。古人には、井戸は埋めても井戸神は生きていたと思われていたのであろう。

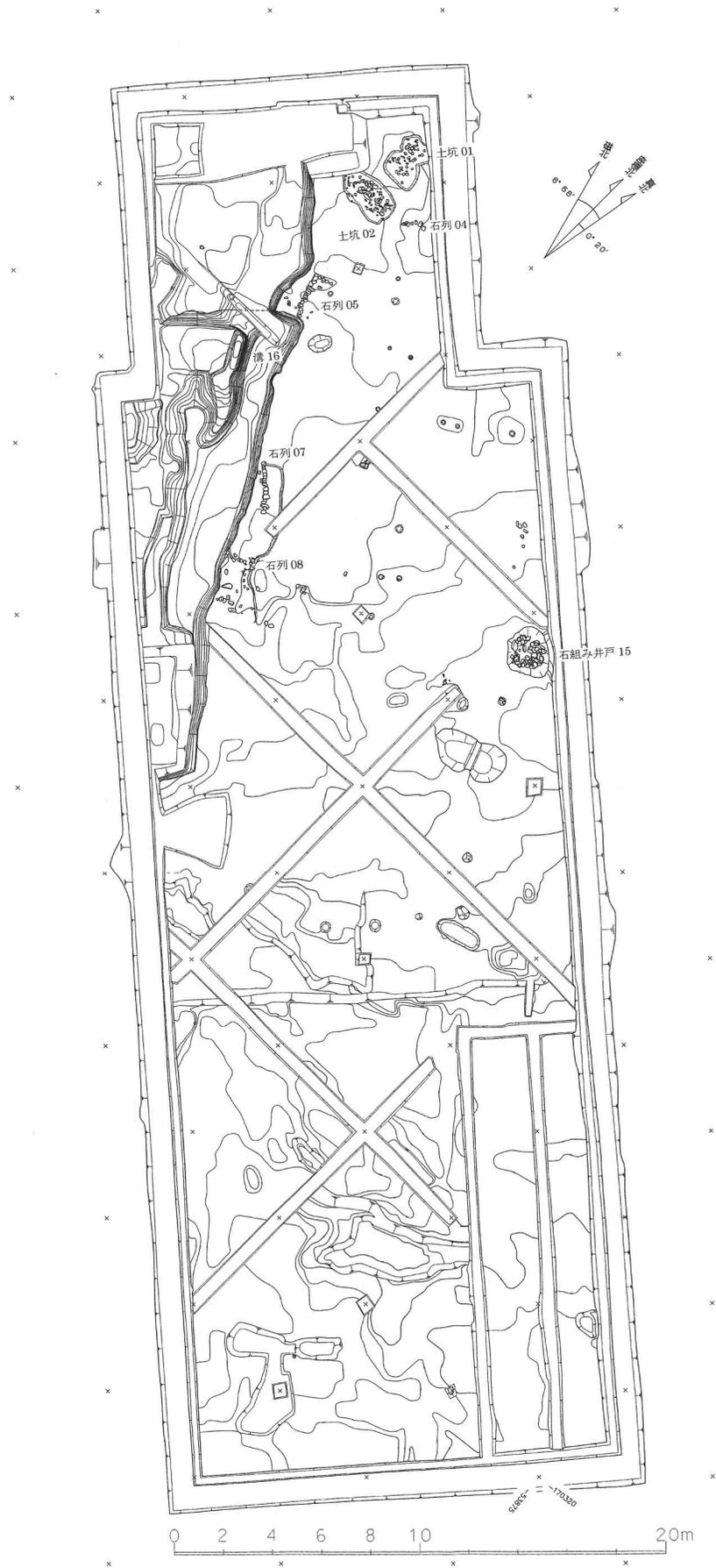
なお、本井戸の廃絶時期は、高台の全くない瓦器碗などから14世紀中葉と考えられた。

第2節 平成19年度の調査

昨年度に引き続き、府宮岸和田大町住宅の第Ⅱ期建替え工事に伴う発掘調査を実施した。今年度の調査区は二ヶ所である。一つは昨年度発掘した06-3区のすぐ西側の南北方向であり、両者を合わせるとL字型の住棟になる。この調査区を07-1区と呼ぶ。さらに、この調査区の東北方約300mのところに金池という細長い溜池があるが、その西側の対象地に東西方向の調査区を設定した。この調査区を07-2区と呼ぶ。ただ、この調査区は土置き場が少なかったため、東西に半分ずつ反転して調査を進め、この調査区のみ、空測は二回実施した。二つの調査区の面積合計は2,470㎡をはかる。調査期間は平成19年6月から12月までの約6ヶ月間であった。

第1項 07-1区

本調査区は、前述したように、06-3区のすぐ西側、長さ約60m、幅約20mをはかる南北方向の調査区である。検出された遺構は、中世のものが大部分で、大落ち込み、溝、土坑、石列群、石組井戸、不定形な落ち込みなどがある。遺物では、当該期の土釜・瓦・土師器・瓦器・木器を中心にコンテナ30箱近くが出土している。層序は、基本的には、06-3区と同一であり、遺構面の高さも近似している。地山面は青灰色粘質土である。



第39図 07-1区平面図 (平成19年度)

検出遺構と遺物

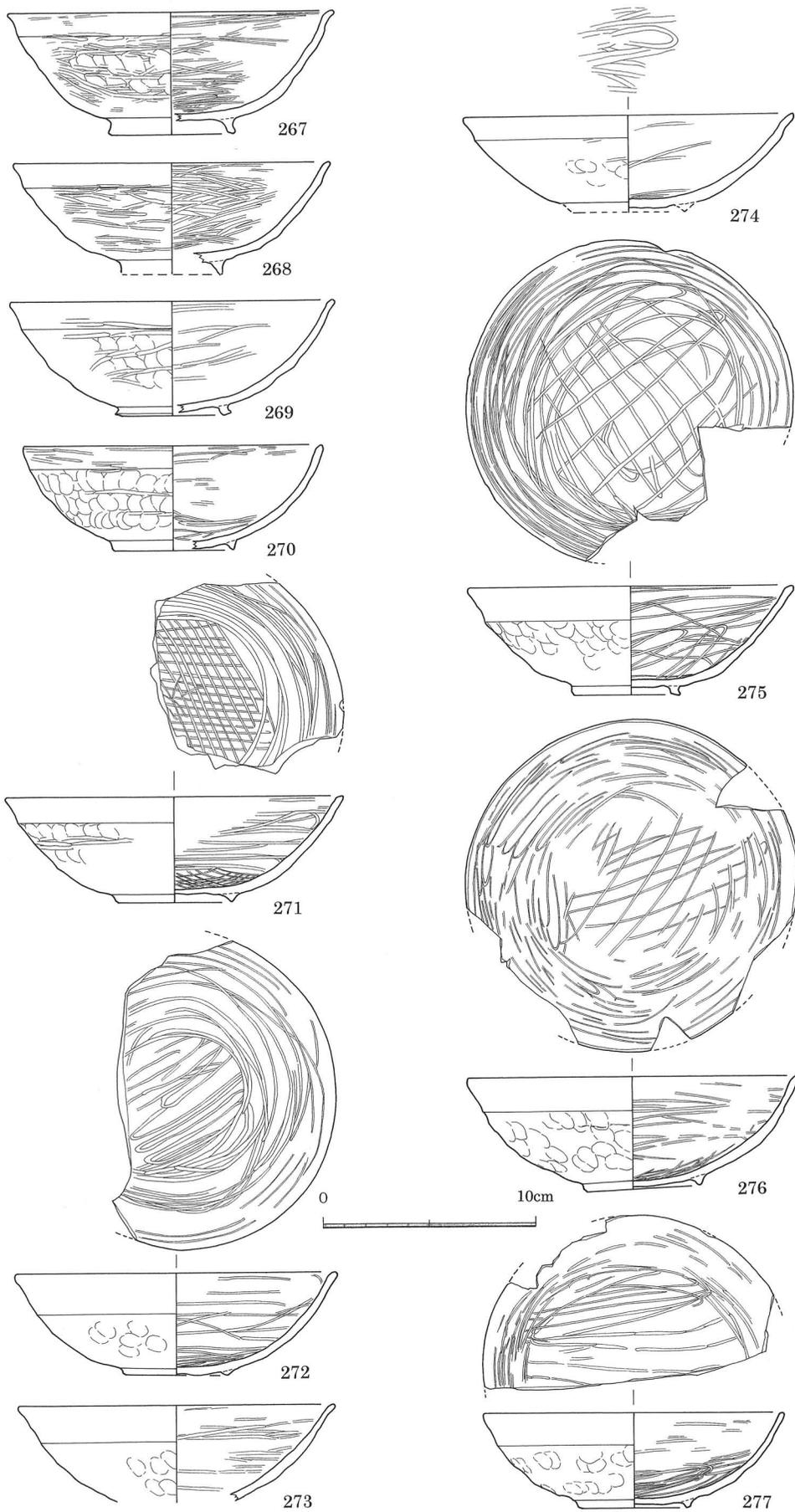
大落ち込み（第39図） 前節でも述べたように、調査区西壁沿いに大規模な落ち込みが検出されている。ただ、調査区を貫通するようなものではなく、平面的には細長い「コ」の字形を呈し、地形の高低と平行している。現存する規模は、南北19.5m、東西6m以上、深さ1m以上をはかる。なお、底面は平坦なものではなく、溝状（溝16）になっているところもみられる。この落ち込みは砂層まで掘りぬかれているため、下に行くほど湧水が激しい。埋土は、上層がブロック混じりの灰褐色粘質土、下層が暗灰色粘質土であり、遺物は上層から多く出土している。それらには瓦、瓦器、土師器などがあり、出土量はコンテナ15箱以上を数える。なお、この大落ち込みの南端付近の上層で南北方向に土器の集積がみられた。これは肩から適当に投棄された状況ではなく、人為的にまとめて置かれたという状況を呈していた。実際、その下を掘り進むと、南北方向に溝16が新たに検出された。

なお大落ち込みは、土坑32同様、徐々に埋まったものではなく、一気に埋め立てられたような様相を呈している。また、この落ち込みは肩の部分が真っすぐ落ちているにもかかわらず、最下層の黒灰色砂礫や一部でみられる微砂層や溝16の存在からすれば、水が流れた形跡が認められる。そうならば、四方が密閉された池のようなものではなく、片側が開け河川へ続いていくような遺構と考えられる。おそらく、その河川は旧の天ノ川であろう。

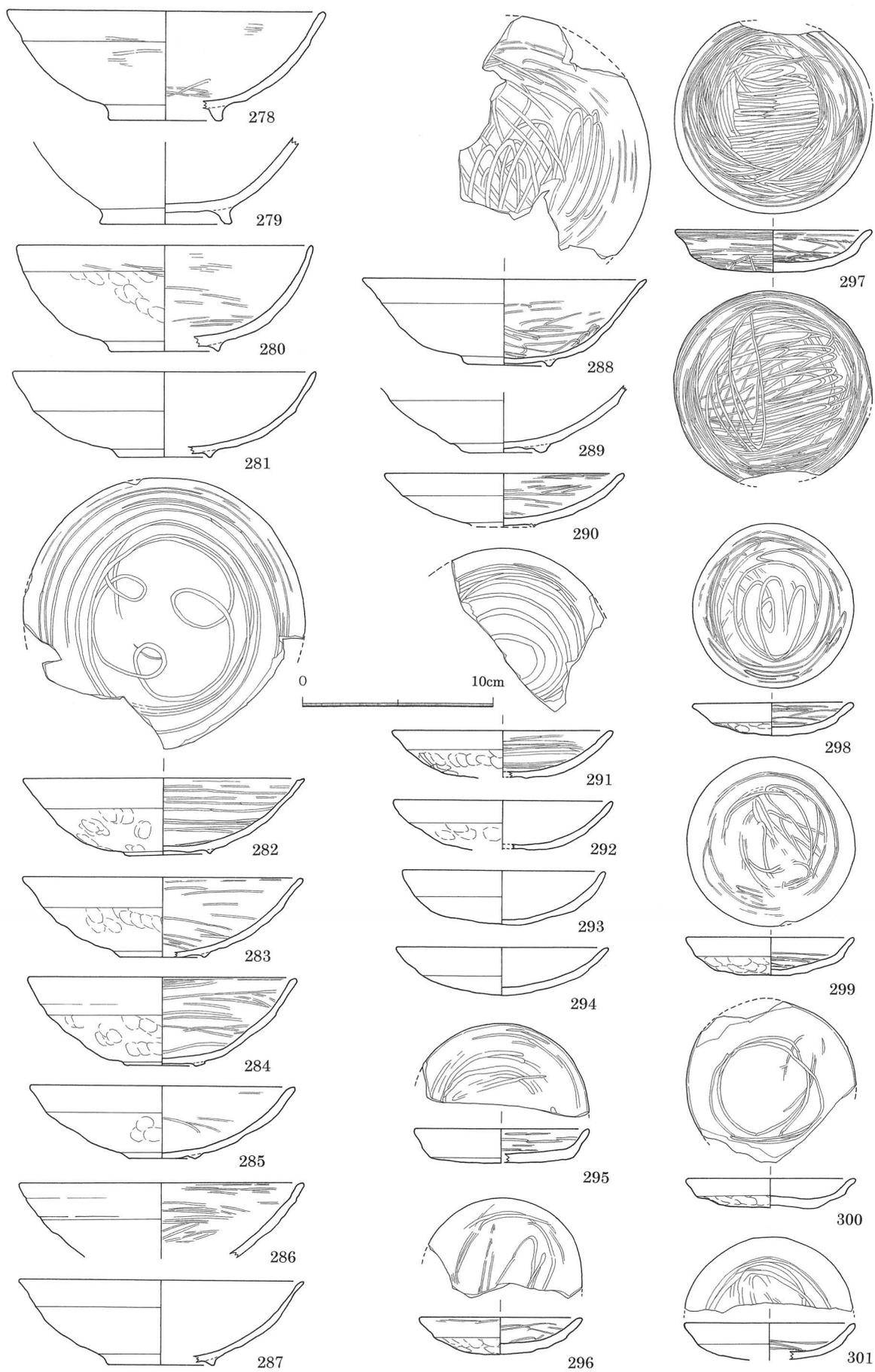
溝16（第39図） 本溝の断面は、綺麗なU字形を呈し、丁寧に掘削されたことがわかる。ただ、この溝は調査区外へは貫通しない。大落ち込み内で納まっているのだ。ということは、大落ち込みが形成され、その内部の通水を良くするために再掘削された可能性が高い。そしてその溝を埋める過程でまとめて土器が列状に置かれたと理解したい。ただ、我々はそれにも気付くことなく、無造作に土器群を取り上げてしまったのだが。なお、土器の種類は瓦器、瓦、瓦質土釜、土師質小皿などであり、全体的に残りがよい。それら土器群の時期は、12世紀中葉～14世紀中葉と幅がある。土師器マダコ壺やイイダコ壺の出土が珍しい。14世紀には、大落ち込みも完全に埋まっている。

土坑1（第44図上） 調査区東北端で検出された。北側を側溝で切られているが、南北方向で平面瓢状に掘削されている。その規模は、南北2m前後、東西約1.6mをはかる浅い皿形の土坑である。内部からは拳大ほどの河原石や平安～鎌倉時代の瓦片や土器片などが乱雑に出土している。遺構底面をみると、フラットであり、ゴミ穴のようなものではない。おそらく、細長いこと、底面がフラットという特徴からいえば、墓の可能性もあろう。本土坑からは、軒瓦が多く出土している。平安時代後期の蓮華文軒丸瓦、「日寺如」と裏文字で描かれた軒丸瓦、巴文軒丸瓦、唐草文軒平瓦などである。すぐ近くに寺院の存在したことが推定された。ただ、内部から、僅かではあるが、近世の京焼・湊焼片も出土しているので、本土坑の掘削時期は新しくなる可能性もある。

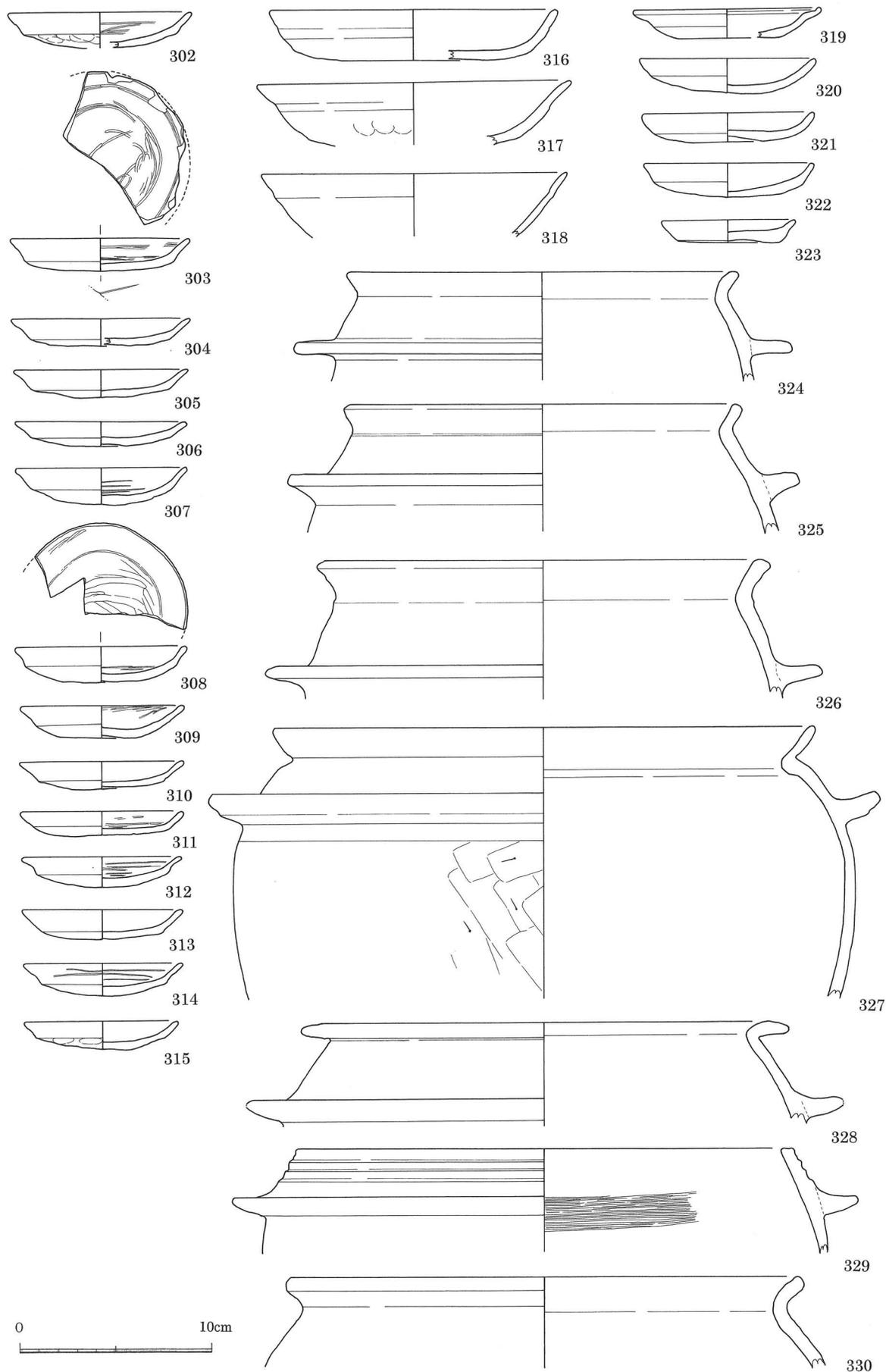
土坑2（第44図下） 土坑1から北へ数m離れたところで検出された。こちらの方は東西方向の細長い土坑である。西端は大落ち込みによって切られている。平面は隅丸長形状に掘削され、



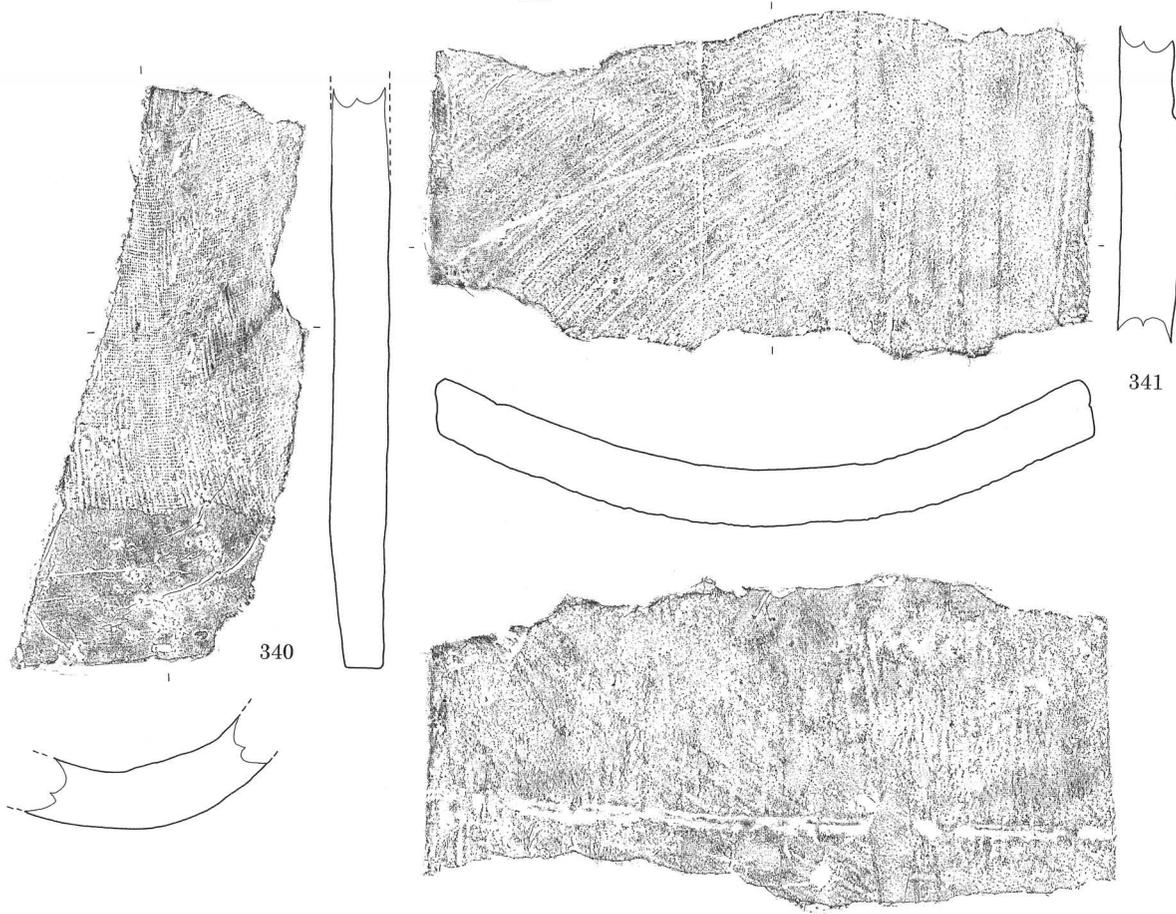
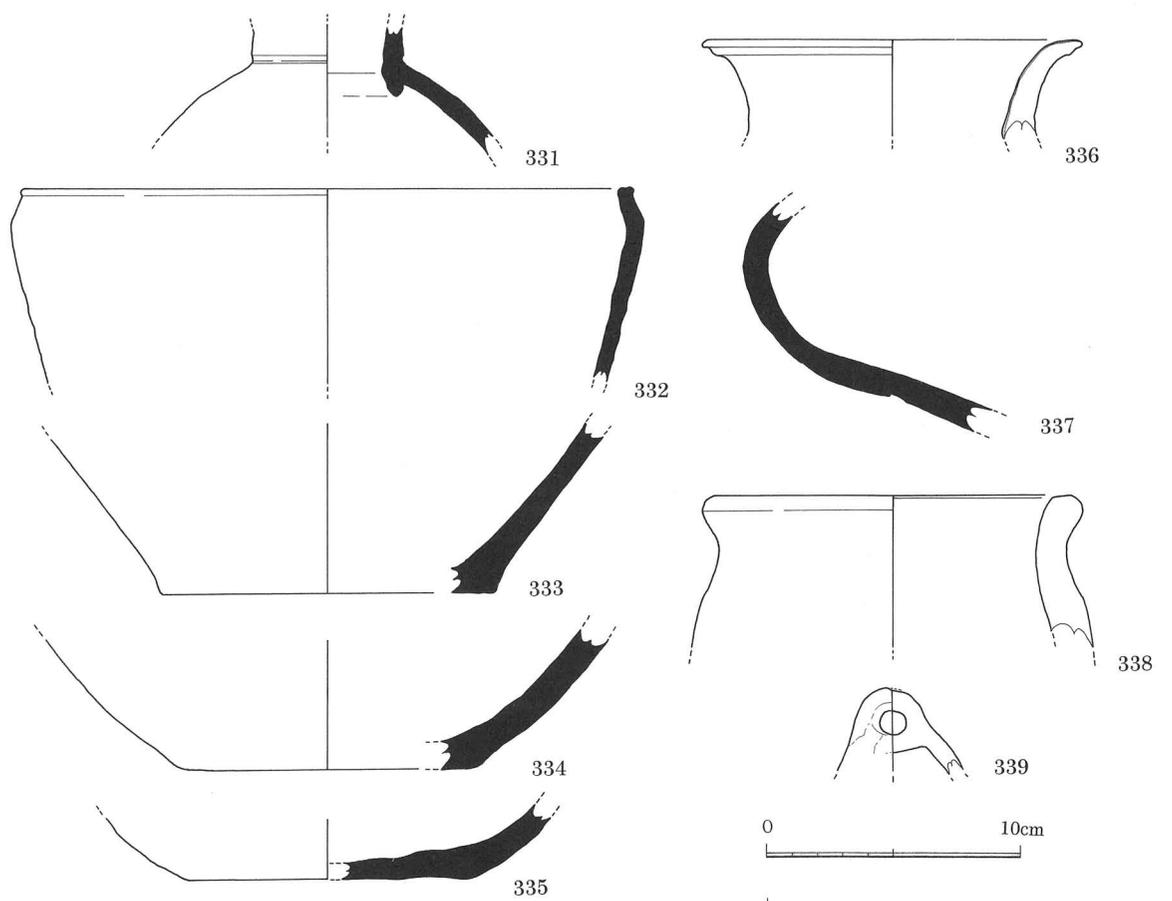
第40图 07-1区溝16出土瓦器碗実測図(267~277)



第41図 07-1区溝16出土遺物実測図 (278~301)



第42図 07-1区溝16出土遺物実測図 (302~330)



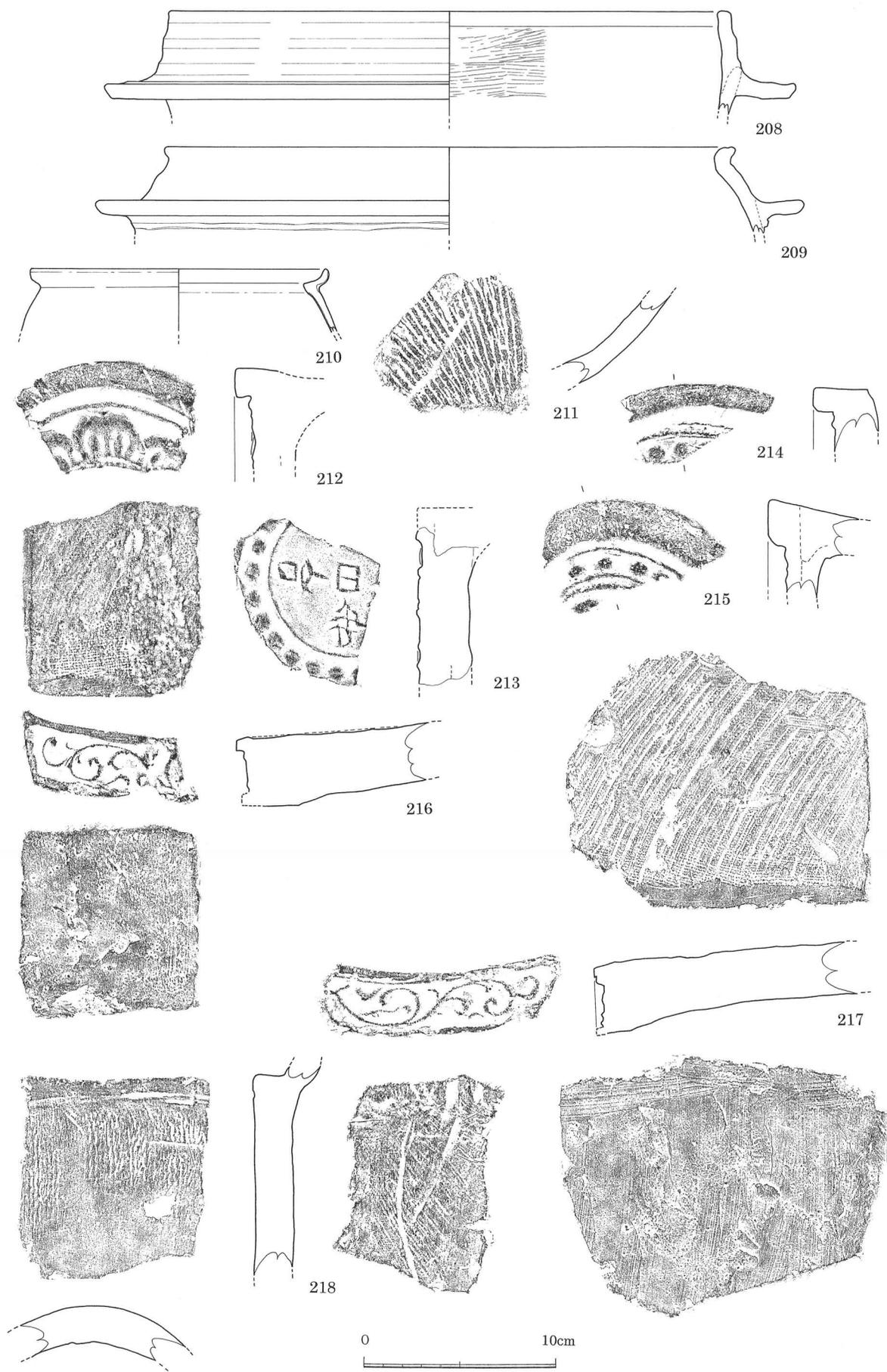
第43图 07-1区溝16出土遺物実測図(331~341)



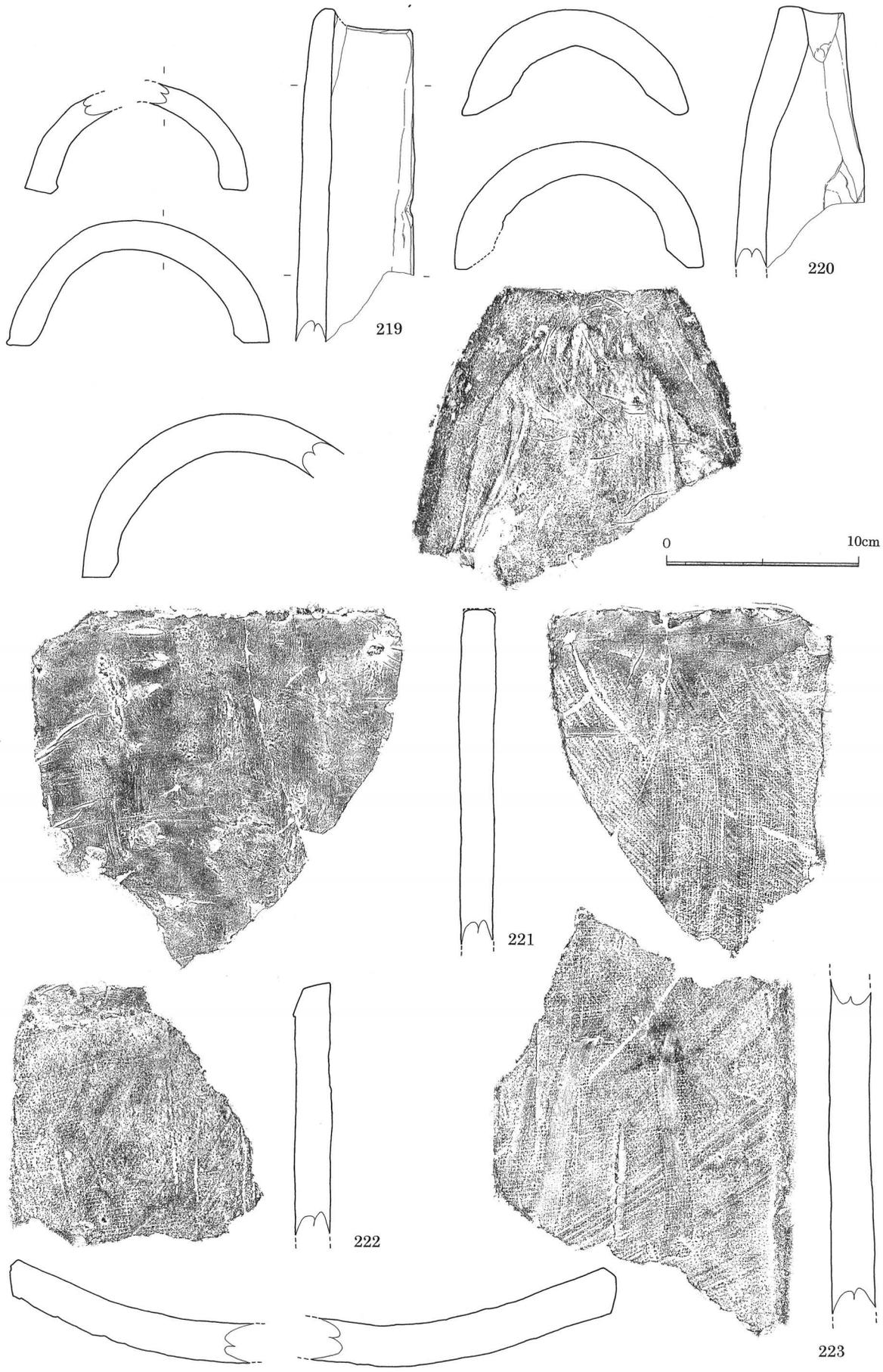
H20:2IV
+



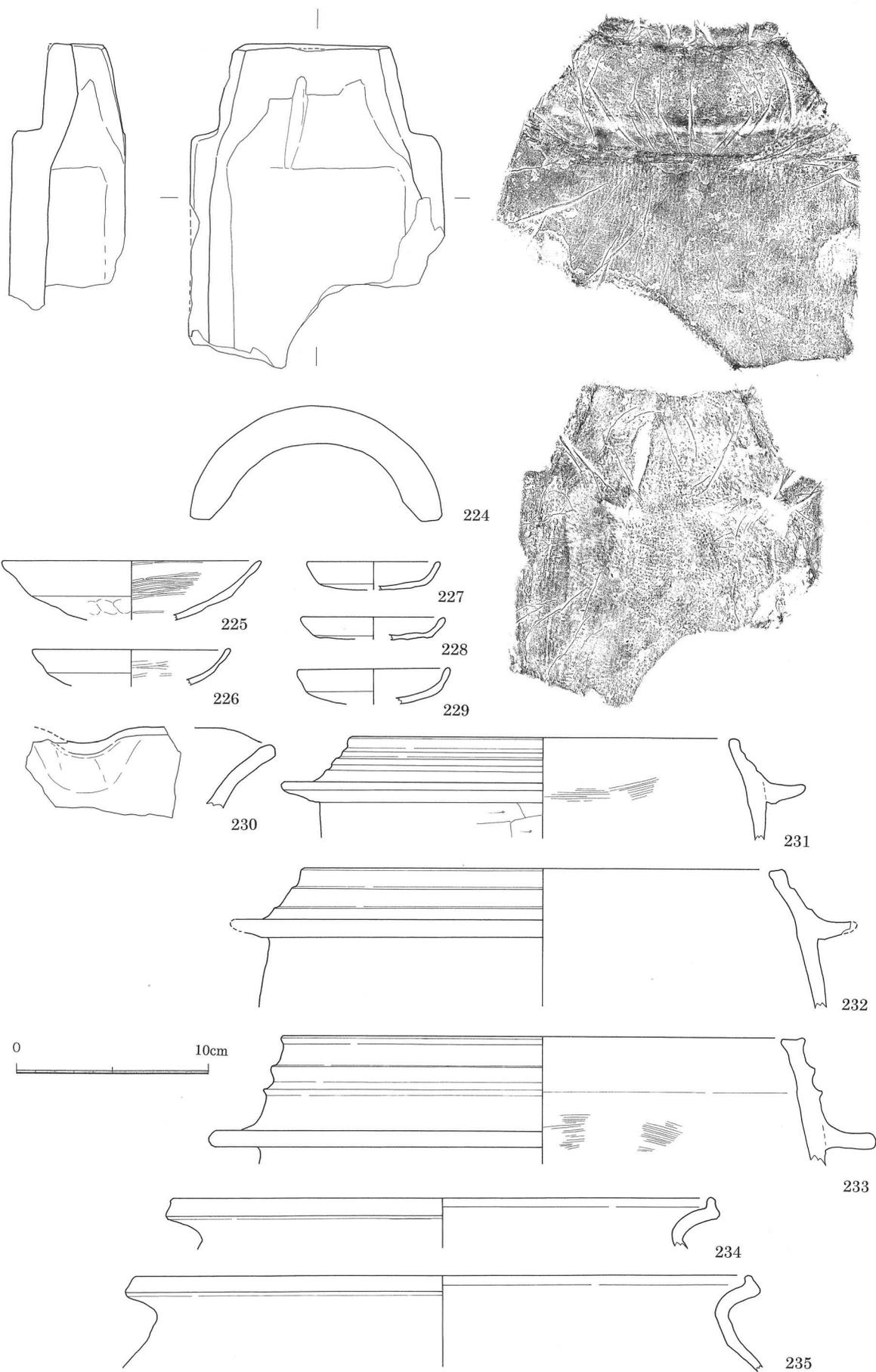
第44图 07-1区土坑1(上)、土坑2平面图(1/20)



第45图 07-1区土坑1出土遺物実測図(208~218)



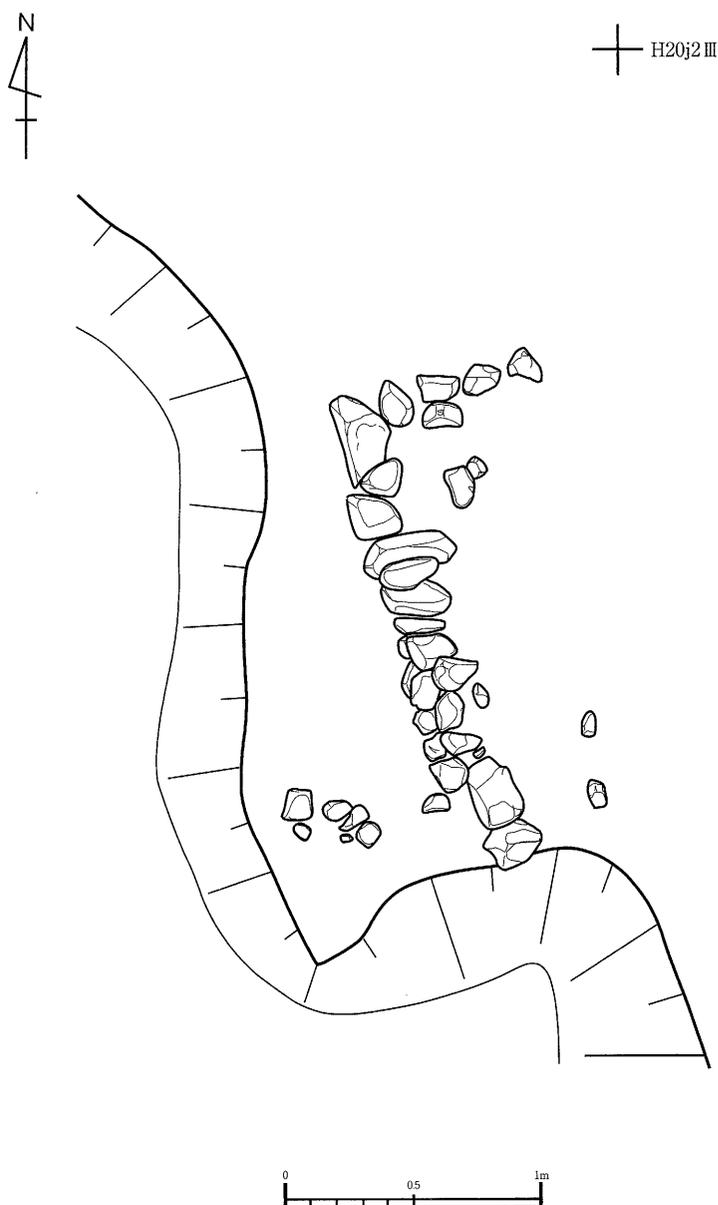
第46图 07-1区土坑1出土瓦实测图 (219~223)



第47图 07-1区土坑2出土遺物実測図(224~235)

その規模は東西2.5m以上、南北約1.4mをはかる。内部からは多くの拳大ほどの河原石や土器片などが出土している。この土坑も底面をみると、フラットであり、ゴミ穴のようなものではない。やはり、状況からみると、墓の可能性はある。本土坑の構築時期は、14世紀中葉と考えられる。僧侶などの屋敷墓の一部なのかもしれない。

石列群 調査区西側の大落ち込み付近では、人頭大や拳大の河原石を直線状に敷き並べた石列群を2ヶ所以上で検出している。中でも石列5（第48図）は逆L字形に曲がるもので、大落ち込みの肩と平行していた。石列は南北に約2m伸びた後は東側へ直角に約0.8m伸びて欠失している。また石列は、各石の外面を辺状に揃え、一直線状にしている。おそらく、この石列



第48図 07-1区石列5平面図

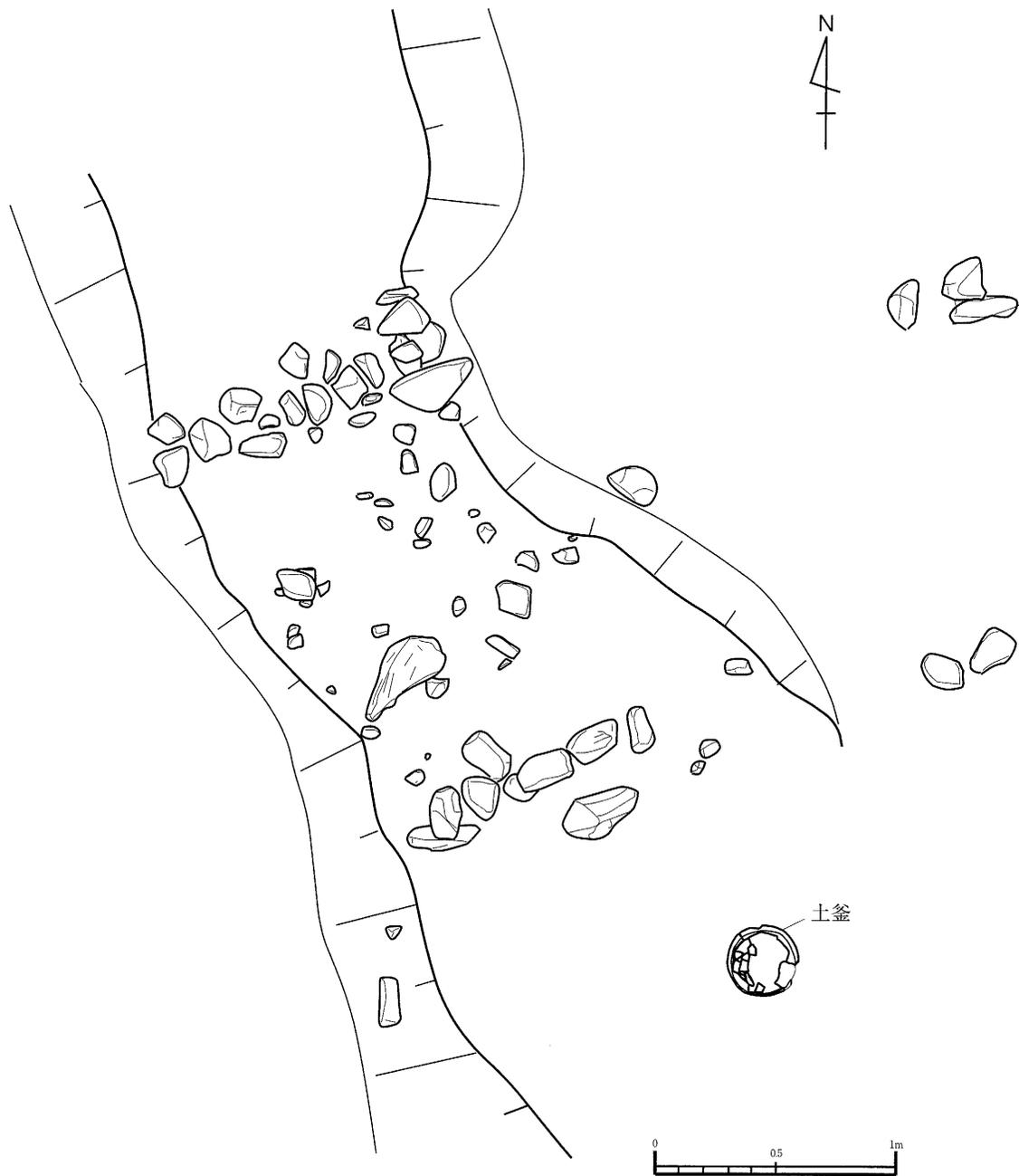
は大落ち込みに関連するものと考えられるが、どういう機能かよくはわからない。おそらく、建物の基礎に関わるものであろう。次に、石列8（第49図）は長さ約4.4m、幅約0.8mの堤状の高まりに直交する形で配置されるものである。二つの石列は約1.6mの間隔で平行するが、その方向は地形の傾斜と逆である。ゆえに、地形に左右されるものではない。また、南側（内側）の石列からさらに1mのところでは、口縁部を下にした完形の瓦質土釜一点が検出されている。瓦質土釜は、やや小振りのもので全体的にススが付着していた。また、土釜は水平に置かれていたのではなく、北側が約5cmも持ち上がっていた。何か、丸い石や木の棒などを咬ましていたのであろうか。そうすると、瓦質土釜の位置は露天ではなく、屋内の炊事場所付近と考えられなくもない。瓦質土釜の時期については、14世紀中葉と考えられる。他に、13世紀中葉の瓦器椀や優美な青磁壺片なども出土している。

さて、これら石列群の性格について考えなければならないであろう。石列は平坦面に据えられ

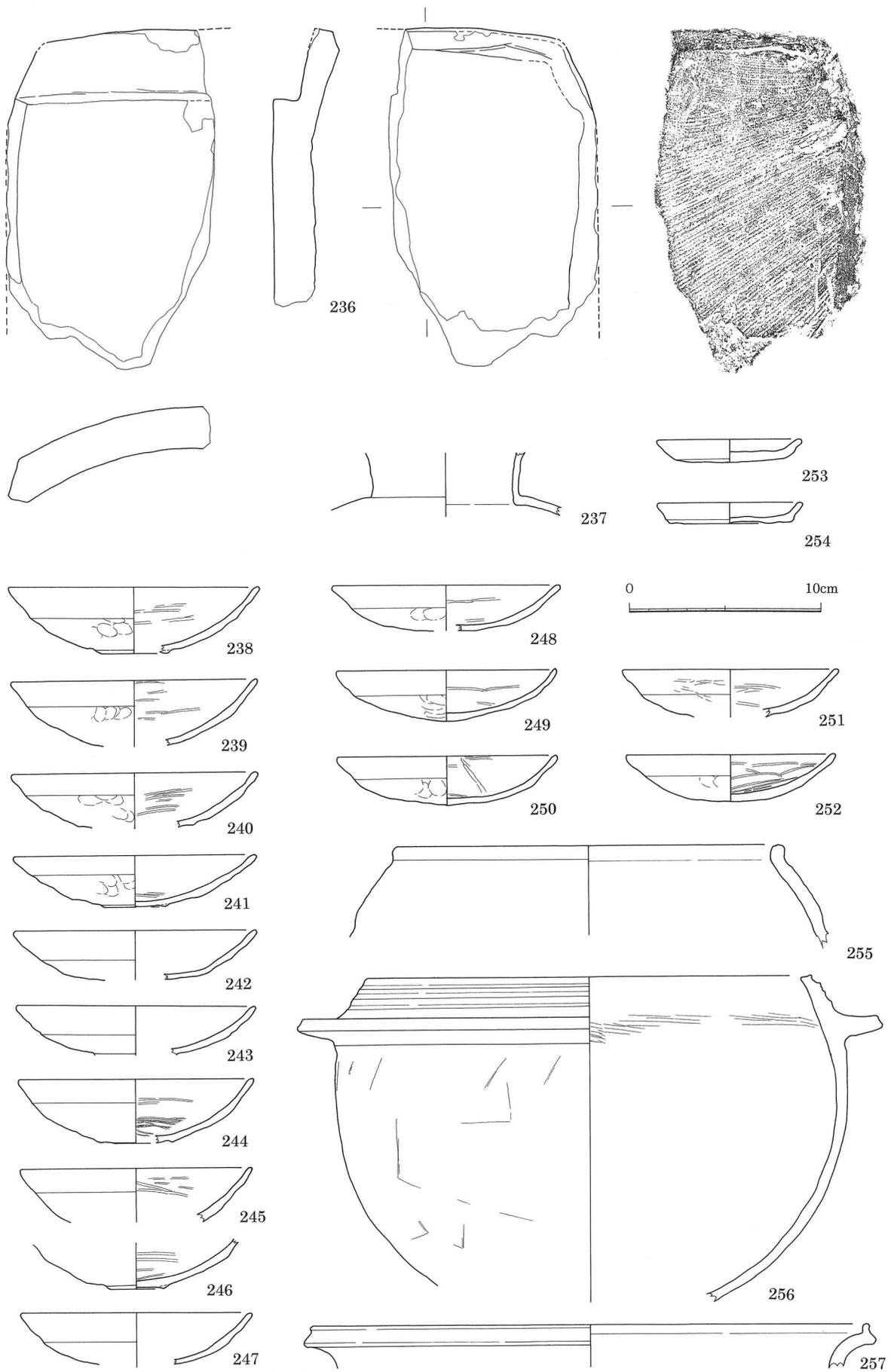
ていることから考えると、排水などの傾斜をもつ機能ではなく、建物などに伴う区画や基礎部分に付随するものと考えられよう。実際、石列の周辺からは、平坦な河原石が数ヶ所で検出されており、礎石立ちの建物に関わるものと考えられよう。

石組井戸15（第51図） 調査区東壁の中央付近で検出された。やはり、東側側溝に掘方を切られている。

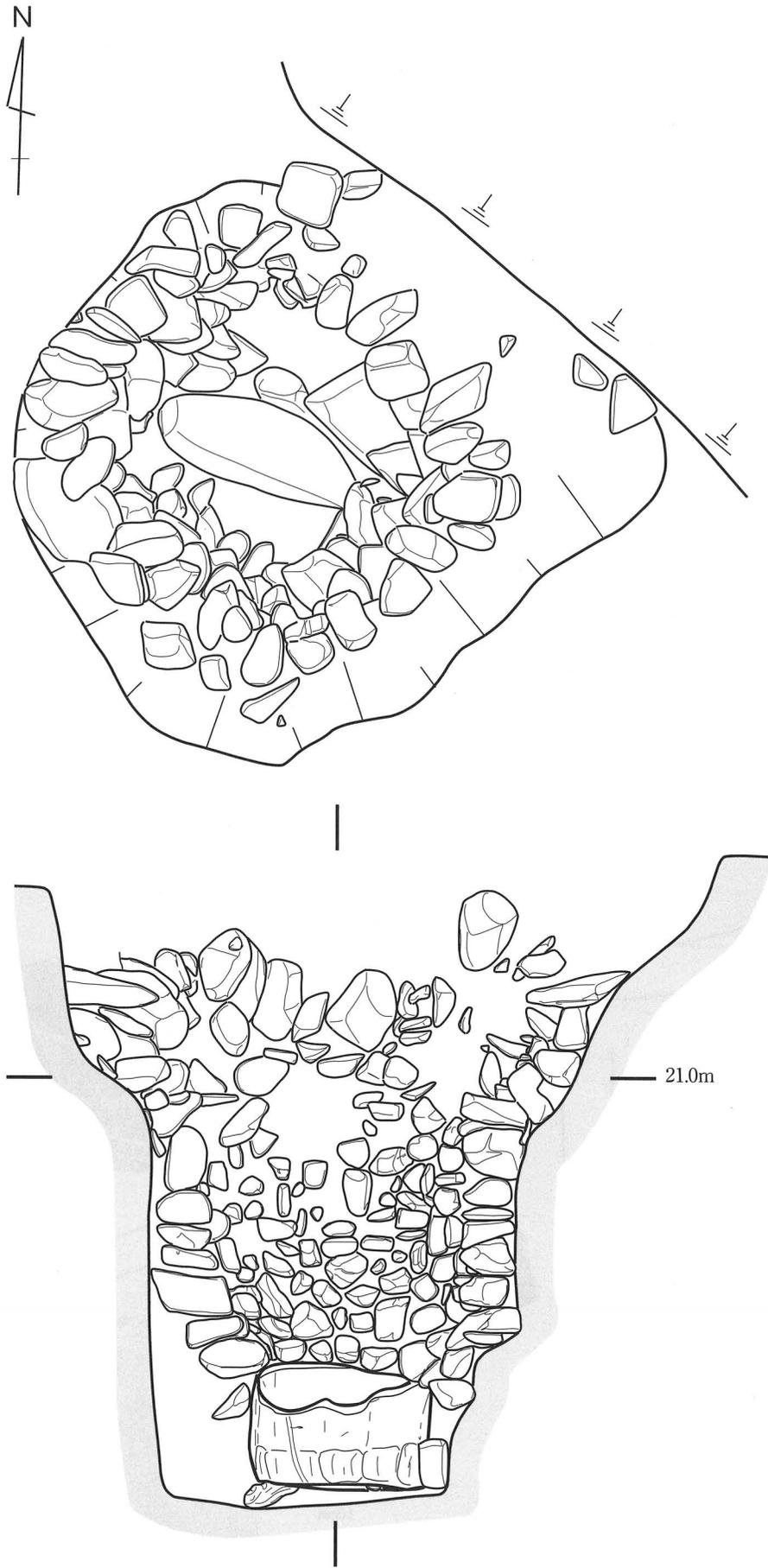
さて、本井戸の構築にあたっては、その位置を決めた後、井戸掘削の際の激しい湧水を避けるため、そこから3m離れたところに、仮の水貯め土坑を掘削していた。この土坑の規模は、長径約3m、短径約1.5m、深さ約1.1mをはかり、最初は井戸ではないかと疑った。しかし、この土坑は集水のため、湧水層まで掘り抜かれ、常に満水状態にしておく必要があった。仮土坑の埋土は、



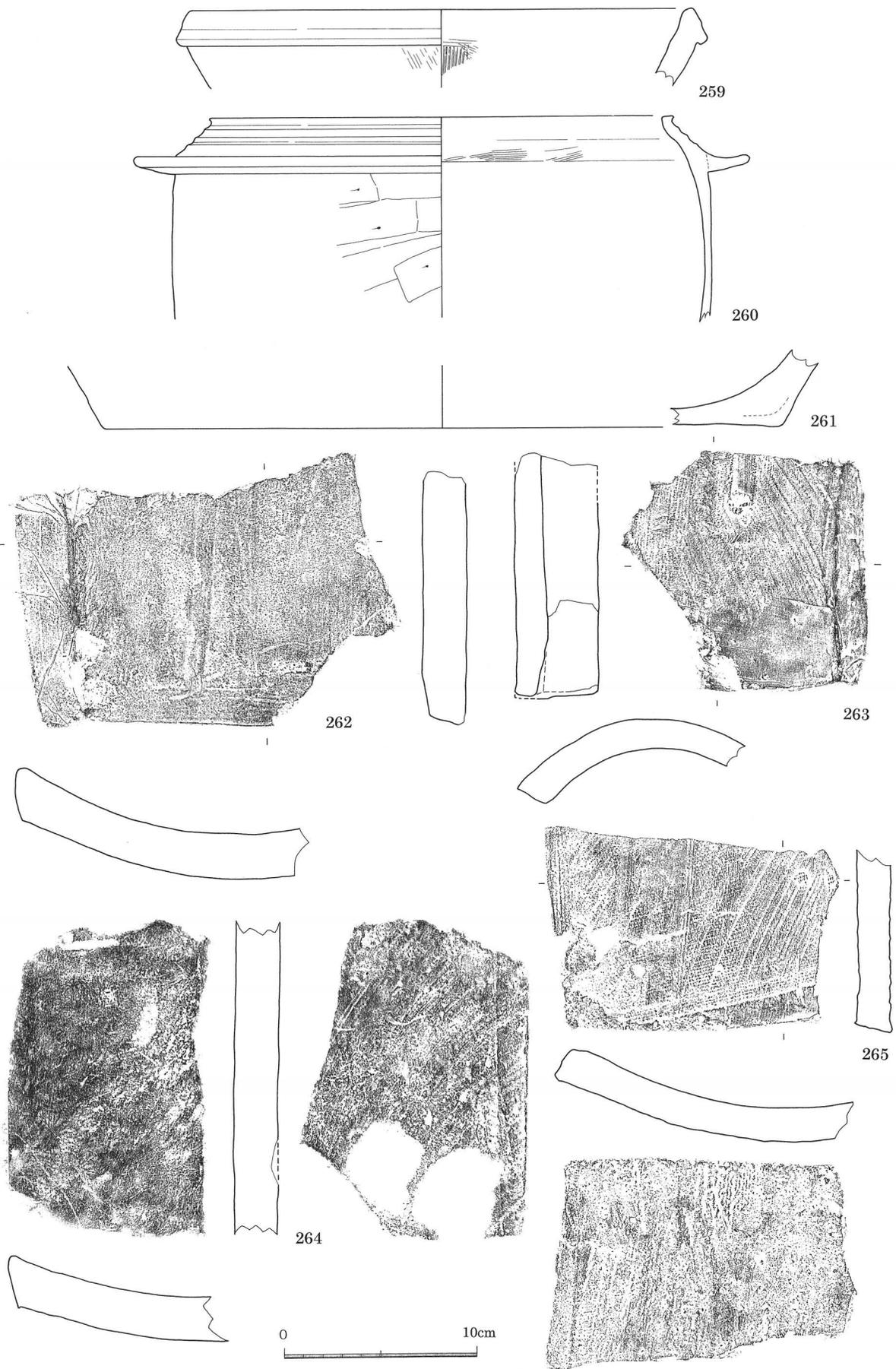
第49図 07-1区石列8平面図



第50図 07-1区石列8出土遺物実測図(236~257)



第51図 07-1区石組井戸15平面図(上)、立面図(下) (1/20)



第52図 07-1区石組井戸15出土遺物実測図(259~265)

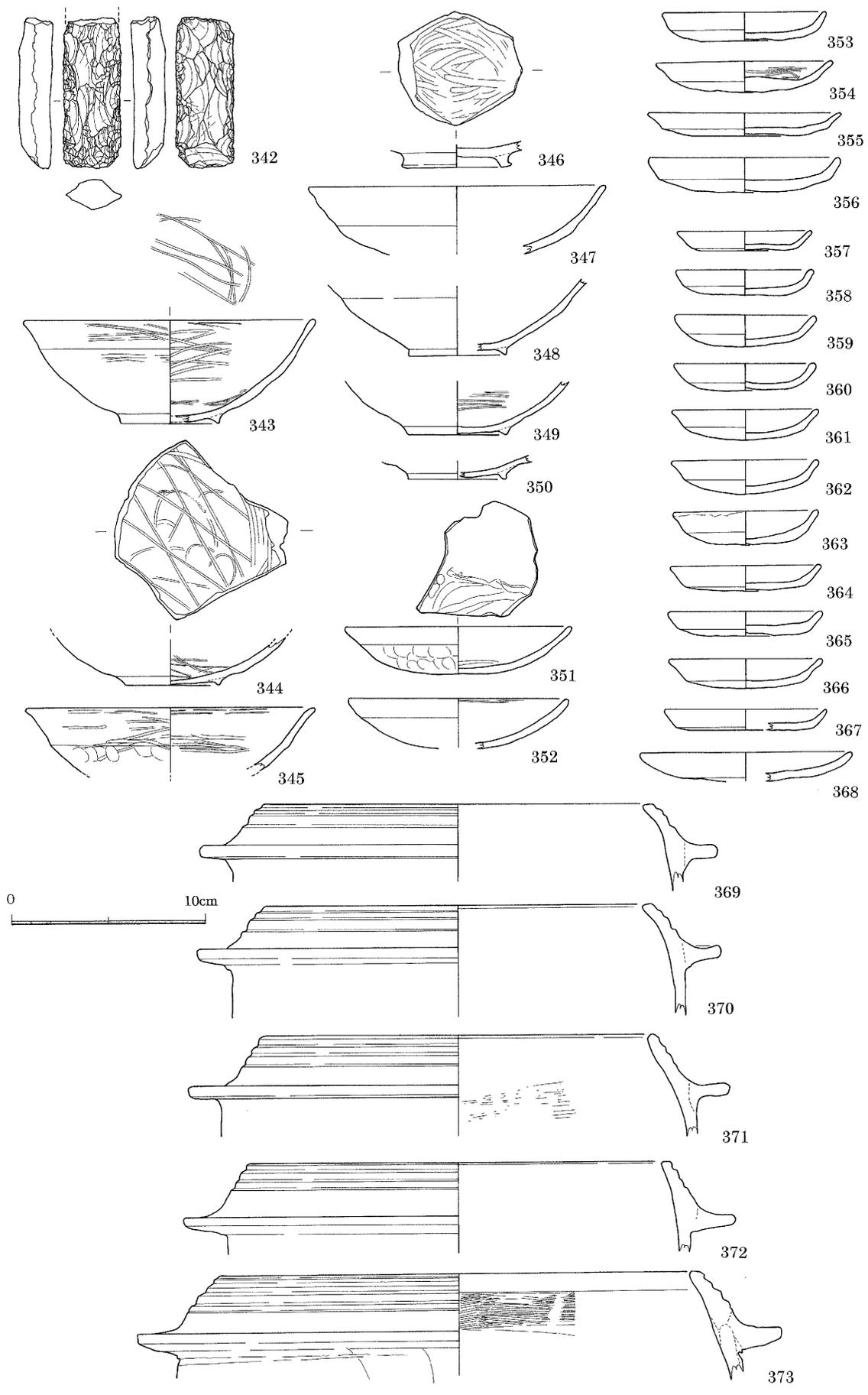
同一のブロック土で一気に埋められた状況であった。

今回の井戸の発掘で一番やり難かったのは、井戸内部を2～30cm掘り下げた時点で、その真ん中に細長い巨石が据えられていたことであった。石の大きさは、長さ約70cm、幅約23cm、厚さ約15cmであり、どっしりとしている。井戸の掘削は、この石を除去することから始まった。

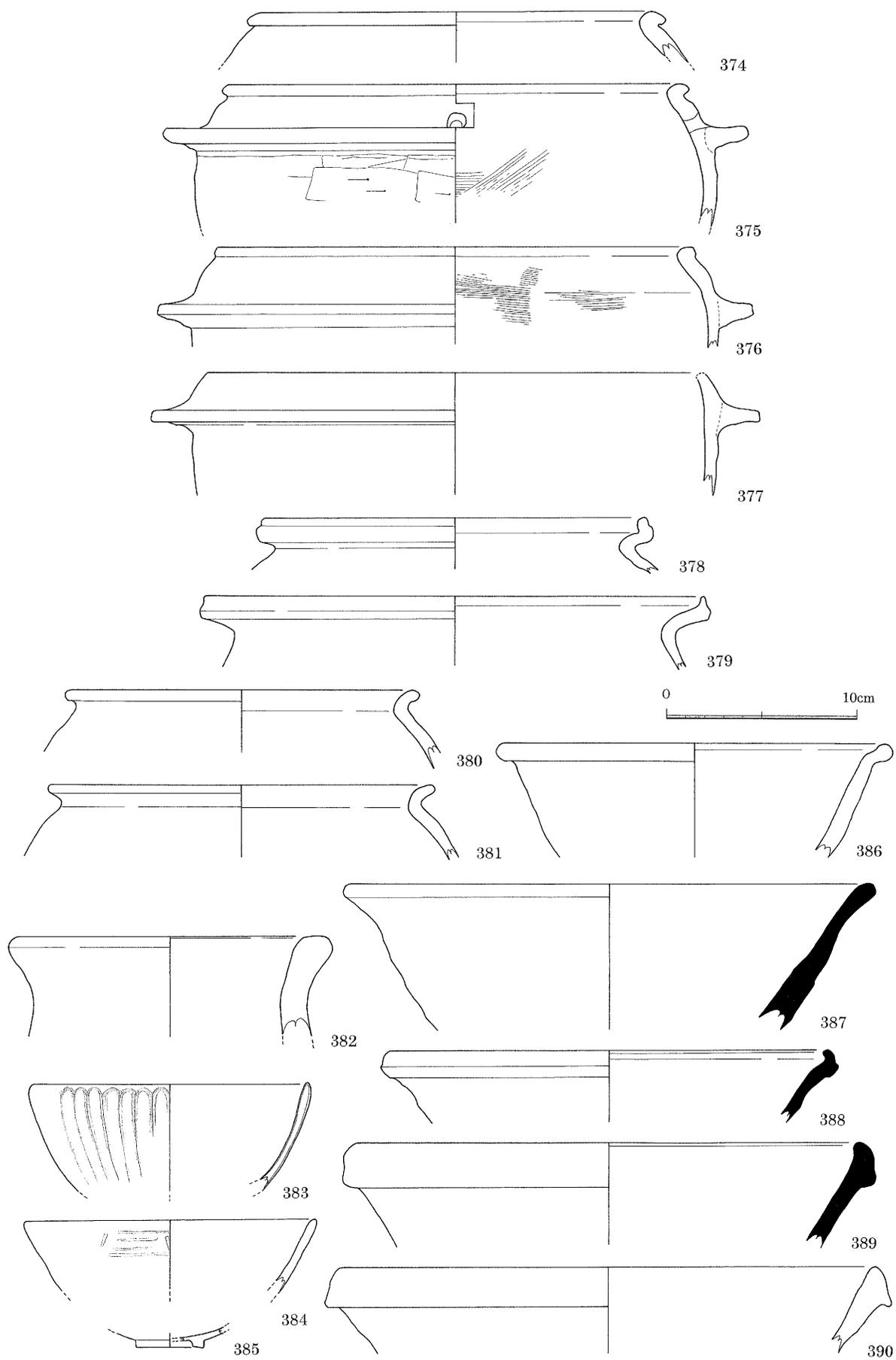
ところで、井戸の掘削にはどれくらいの日数を要するのであろうか。おそらく一週間もかからないであろう。数人の井戸掘り工人が粘土層を一辺約2m、深さ1.8m以上（砂層）まで、断面逆台形状に掘り抜く。ただ、井戸の中には人一人しか入れず、それも自由に動けない。掘削土を上げるのにも、一定の量が決まっている。そして、長時間井戸内で作業できない。酸欠状態になるからだ。疲労度は地上で作業する場合の三倍以上にはなろう。これはいくら熟練した工人でも同じであろう。そして、上部の石組みに取り掛かる前に、その下に井戸枠を設置しなければならない。その井戸枠は軽いものでも小さなものでもない。ゆえに、井戸上部に丸太などで支台を組み、その先端に滑車のようなものを取り付け、それに縄を巻いて井戸枠を固定して徐々に降し、据え付けたものと想像できる。本井戸枠は、径約60cm（二尺）、高さ約40cm以上をはかる。おそらく、大型の木臼を転用したものと考えられる。外面は寸胴形、内面は擂鉢状に削られていたと思われるが、今は底がない。材質は明確ではないが、クスやケヤキといった比較的加工しやすいものであろう。井戸枠の下方外面は縦方向に粗く削られており、木臼の未製品かもしれない。井戸枠は上端部を水平に保つため、その下面には細長い河原石を咬まして高さを調節していた。井戸枠の上端部はほぼ砂層の上面にあたるが、そこに石を貼っていくのは困難であろう。しかし、そこから上は粘土層なので、貼石は可能だ。そして、井戸下面から横方向に一石ずつ、一段ずつ石を貼っていく。人頭大くらいの石を主要な部分に使い、その間隙を小さな石で埋めている。そして井戸が完成した後は、仮土坑の水を抜き、一気にそれを埋め立てて、本井戸に水が集中するようにしている。例に洩れず、本井戸の石組にも控え積みが無く、一重である。井戸内からは瓦器、土師器、瓦、青磁などが出土しており、その廃絶時期は14世紀中葉と考えられよう。

ちなみに、本井戸の石組の状況を見ると、06-2区石組井戸48同様、貼石の井戸であり、決して06-3区石組井戸53のような葺石の井戸ではない。いずれにしても三者三様なのである。

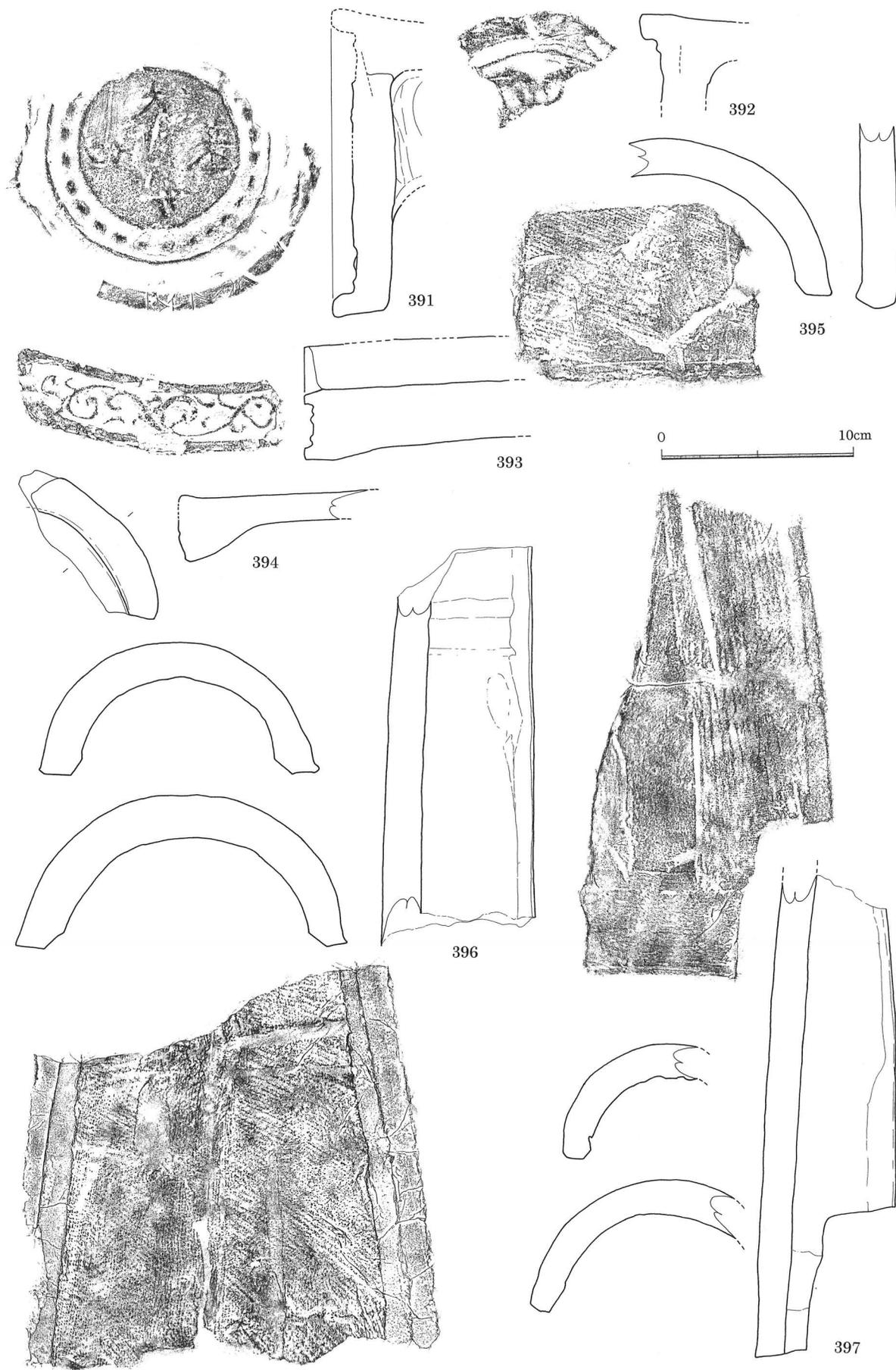
包含層 07-1区の包含層中からは、12世紀中葉の瓦器椀以下、多くの鎌倉～南北朝にかけての中世土器が出土している。紀伊型の土師器土釜やマダコ壺などは、泉州ならでの地域的遺物である。また、中世瓦も多数出土していて、07-1区土坑1出土瓦と同範の「大日寺如来」と裏文字で描かれた軒丸瓦、同じく06-2区土坑32及び07-1区土坑1出土瓦と同範の蓮華文軒丸瓦と唐草文軒平瓦などが珍しい。出土瓦によって、「大日寺」という寺院名が判明した点が貴重である。ただ、この瓦は平安後期の瓦と伴出しているとは言うものの、珠文の大きさから、時期は鎌倉末期～南北朝にかけてのものと同定され、対応する軒平瓦も出土していない。その他、先端部は折れているが、弥生時代中期のサヌカイト製石槍の出土も珍しかった。おそらく、近くに弥生時代の集落跡が存在したのだろう。



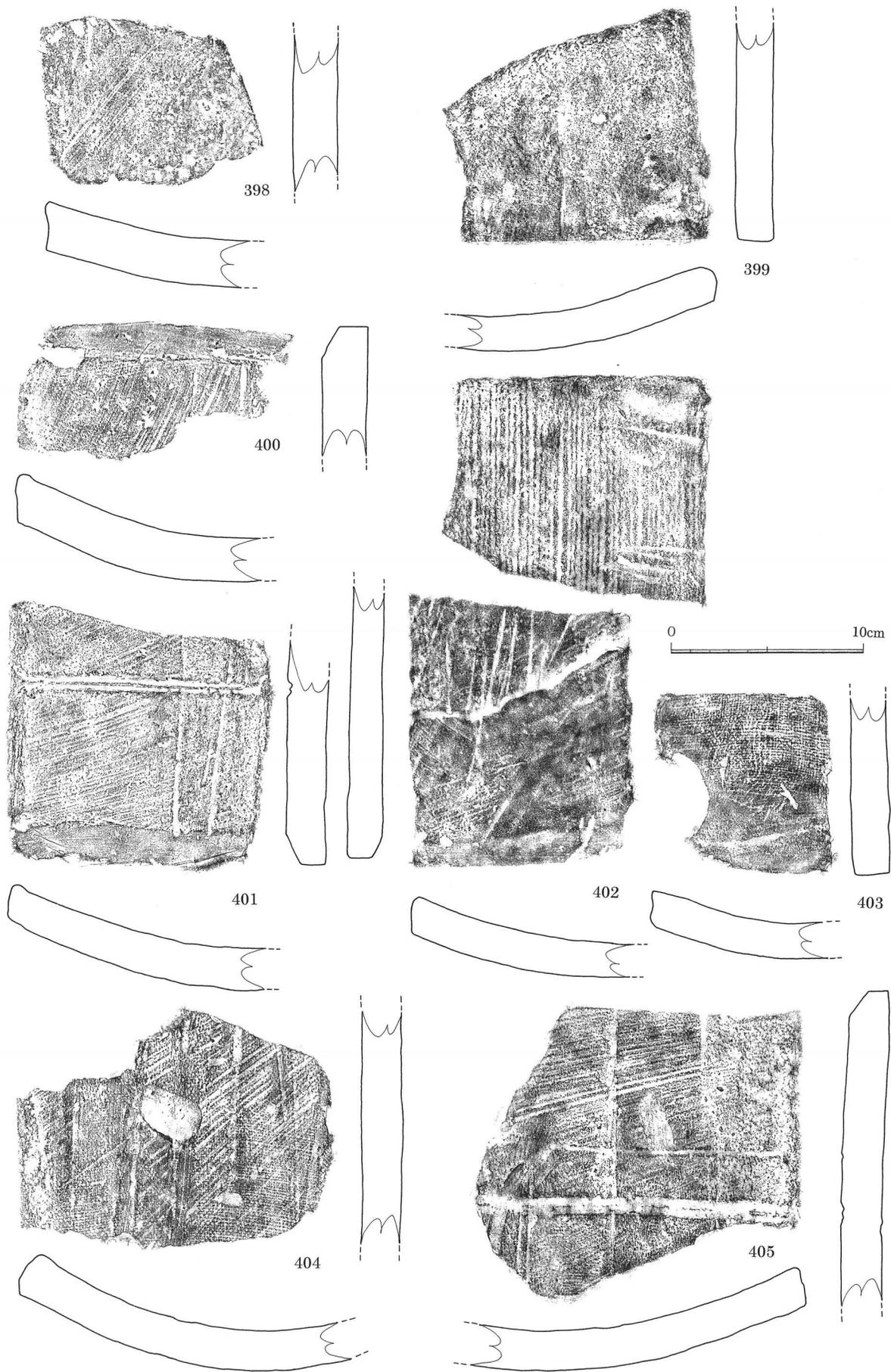
第53图 07-1区包含層出土遺物実測図(342~373)



第54図 07-1区包含層出土遺物実測図 (374~390)



第55图 07-1区包含层出土瓦实测图 (391~397)



第56图 07-1区包含層出土瓦実測図 (398~405)

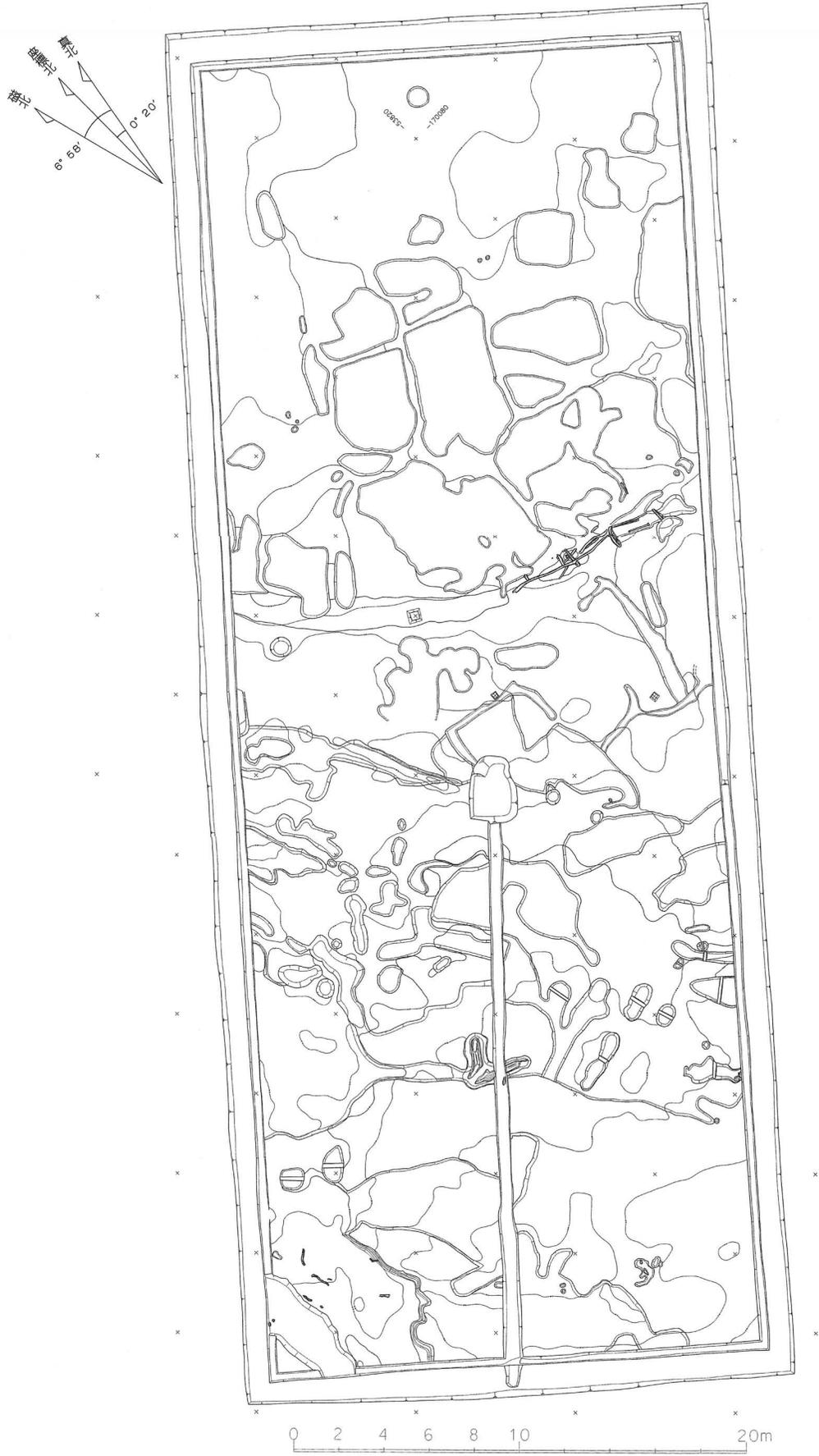
第2項 07-2区

本調査区は、前項まで述べてきた各調査区付近から300mも東北方に離れており、今までの調査区の層序や遺構の様相とは全く異なるものと予想された。調査区の規模は東西約55m、南北約20mをはかり、長方形を呈する。ただ、調査地全体が狭いため、土置き場がなかった。そのため、調査区を中央で分割して発掘を進めることになった。

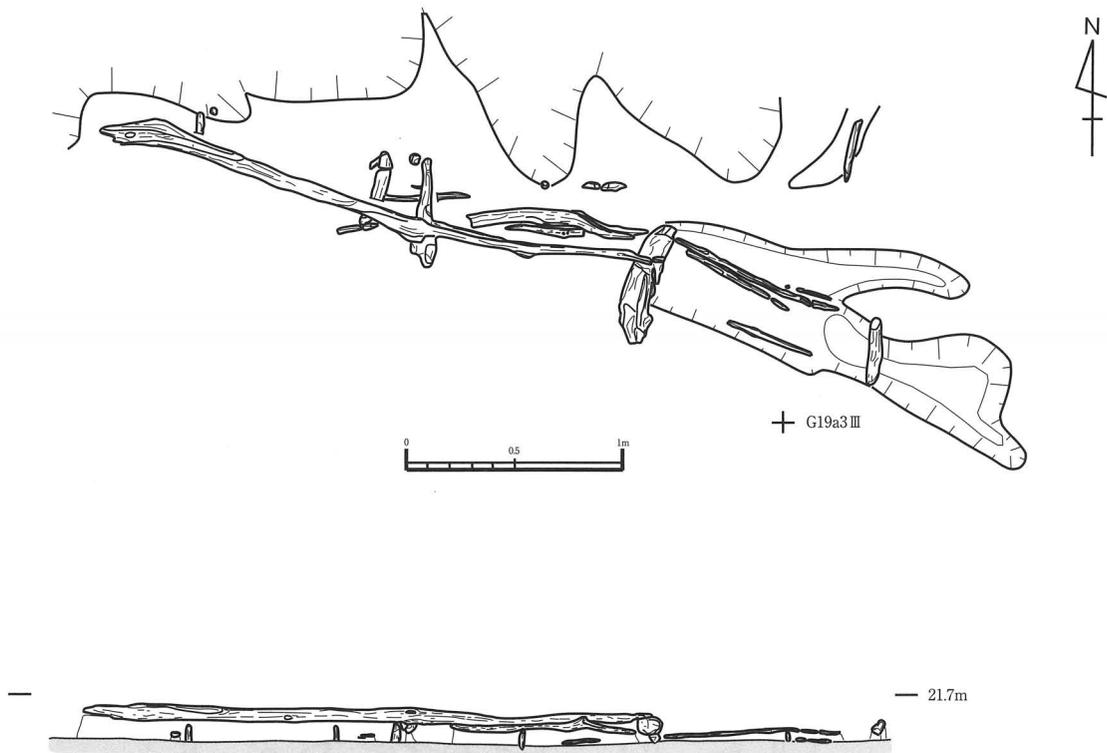
まず、東半部であるが、旧耕土の下面には白色や黄色の粗砂が堆積し、その下には黒色粘土が水平に堆積している。再度、機械掘削して上層の粗砂を除去した。人力掘削は、黒色粘土層から始めた。黒色粘土層には、ほとんど遺物が包含されておらず、いつの時代の堆積かよくわからなかった。そして、この黒色粘土層を除去し、その下の青灰色粘質土及び灰色粘質土上面を遺構面とするべく、遺構検出を進めた。その結果、青灰色粘質土の精査の過程で、上層の黒色粘土面からの浅い落ち込み（斑になっている）が散見された。それら斑になった黒色粘土の落ち込みは、深さ3cmほどで極端に浅い。そして、それら黒色粘土の落ち込みを追求していくと、青灰色粘質土面との違いを薄ぼんやりながら判別できるようになった。すると、その輪郭は畦状になり、これらは水田面の畦ではないかと推定するにいたった。ただ、弥生時代後期の甕底片が1点出土したが、それ以外に土器がほとんど出土しないため時期を決定するのは難しいが、おそらく中世なのであろう。また、調査区西端付近では木組みの遺構（第58図）が検出されているが、これなども水田に伴うものと考えられよう。他に、自然木が横たわっている跡も検出された（第59図）。

縄文時代後期の落ち込み　本調査区の中世遺構面の空測を終了した後、西半分の調査区下層の堆積を確認するべく、新たにトレンチを設定した。トレンチの規模は、長さ約29m、幅約4mをはかる。ところが、中世遺構面から下へ0.1m～0.7mあたりで、縄文時代後期（宮滝式）の縄文土器片やサヌカイト片、炭、自然木を含む土層を数枚確認するにいたった。出土した縄文土器は残りがよく、ローリングをほとんどうけていない。そのため、調査区周辺に縄文時代のムラが存在するのかもしれない。なお、トレンチ内には明確な砂礫層はみられないが、黄褐色系砂質土や淡黒色系粘質土が堆積し、濁った青灰色系粘質土が地山と考えられる。粘質土の性格からいうと、水が常時流れていたものとは到底考えられないが、ヘドロ状態で水に浸かっていた可能性はある。おそらく、河川などに続いていく大きな落ち込みの一部と考えられる。また、土層の堆積状況をみると、東から西へ緩やかに流れているのがわかる。トレンチの方向が東西向きであることから考えると、大規模な河川ならば南北方向に流れていた可能性がある。昨年度の調査区でも弥生時代中期の河川はほぼ南北方向で検出されており、本地域の自然地形に沿ったものである。おそらく「古天ノ川」や「旧天ノ川」ともいうべきものであろう。

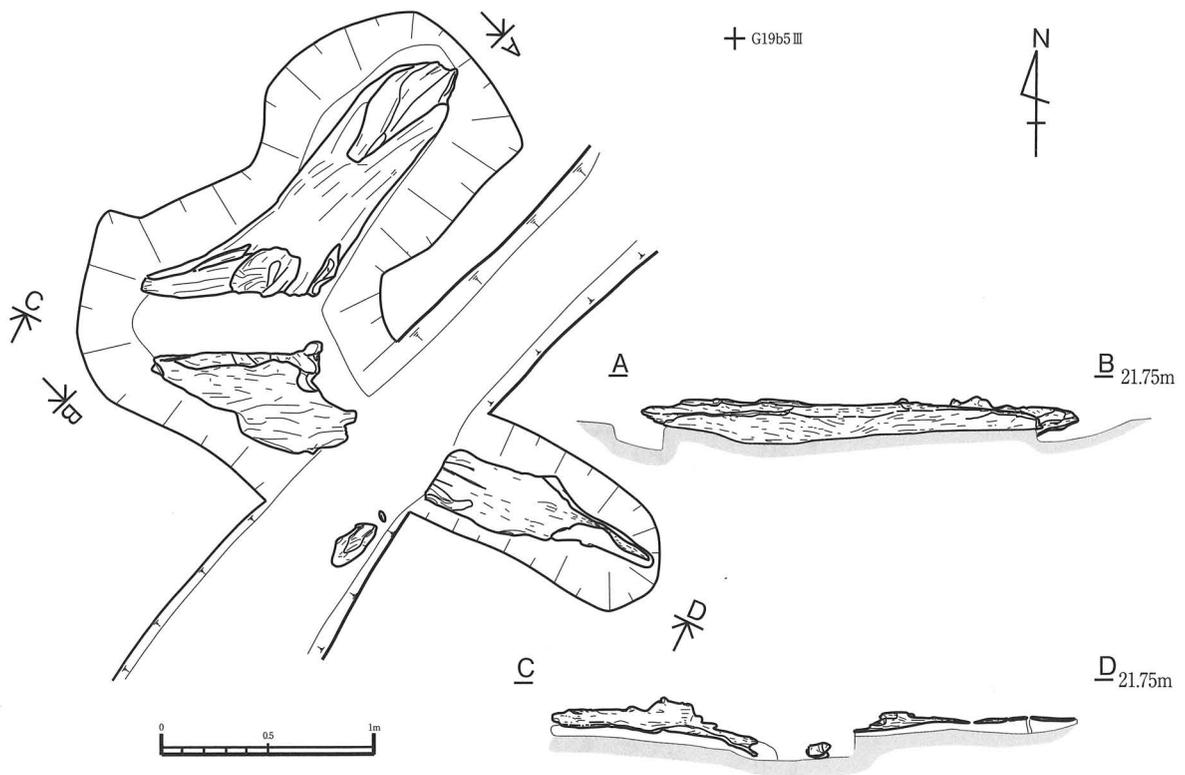
さて、大町遺跡で縄文時代の遺構や遺物が検出されたのは初めてであるが、『岸和田市史』第一巻によれば、本遺跡に近接する金池西遺跡(散布地)でも縄文土器が出土していることが明記されている。その範囲はある程度、限定されそうだ。



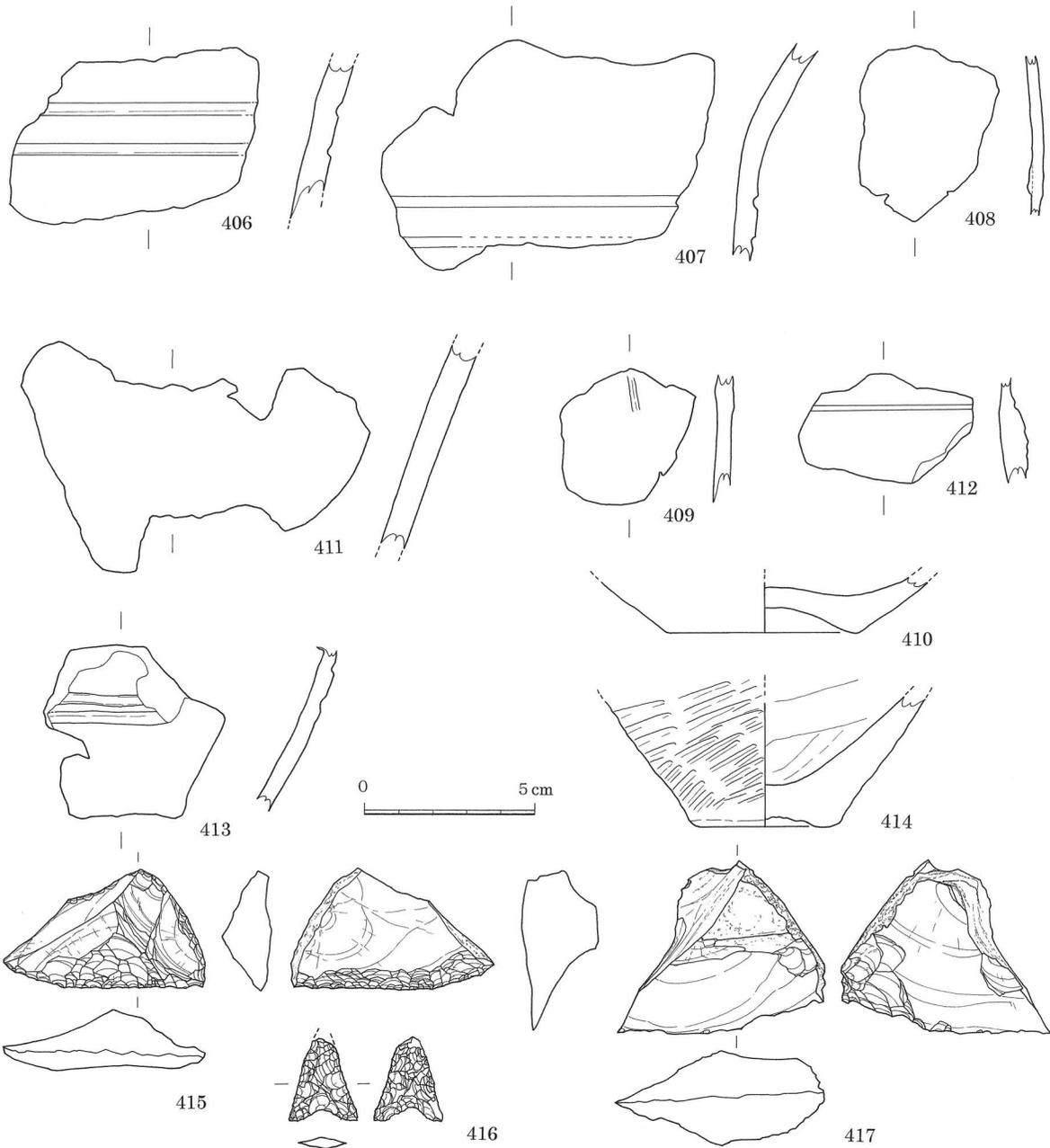
第57図 07-2区平面図 (平成19年度)



第58图 07-2区樋口状遺構平面図・断面図



第59图 07-2区自然木検出状況



第60図 07-2区落ち込み・包含層出土遺物実測図(406~417)

第4章 まとめと展望

前章まで、大町遺跡二ヶ年の発掘調査成果を報告してきたが、ここではそこで得られた情報を時代毎に分析それをまとめていきたい。さらに、これからの遺跡の展望についても言及したい。

1 縄文時代

07-2区の下層確認調査の結果、本遺跡内に縄文時代後期の遺構が存在することが事実となった。それも遺跡の南端部に集中していた調査対象区から東北方へ300m以上も離れた地点からである。ただ、07-2区周辺は、従来から調査例がなく、事前の情報は全くといっていいほどなかった。今回、縄文時代後期の遺構が発見されたが、遺構の平面的な規模や形態はわからない。すなわち、東西方向の長さ29m、幅4m、深さ1mのトレンチ内の情報しかわからないのである。

この縄文時代後期の遺構の性格については、東から西へ傾斜していく大きな落ち込みと考えている。その先は平成15～16年度調査で検出されている南北方向の大河川に続いていくものと考えている。すなわち、集落に伴う住居や土坑、溝などの類ではない。しかし、土器の遺存度からみれば、遠方から流れてきたものでもない。おそらく、近在に集落があるのは確実であろう。前章でも述べたように、金池西遺跡で縄文土器の散布がみられるという。意外にも、縄文集落は金池と大河川に挟まれた平坦な土地に存在するのかもしれない。なお、周辺の遺跡で縄文時代の遺構や遺物が発見されているのは、箕土路遺跡と山ノ内遺跡などである。また、少し離れた海浜部には、著名な春木八幡山遺跡が立地している。

2 弥生時代

弥生時代のものとしては、平成15～16年度の調査で検出された大河川や河道3などがある。これらの存続時期は、弥生時代中期中葉（Ⅲ様式）から後期末葉までであり、07-1区で検出された溝50やその下層で確認された河道とも共通した時期である。今回、07-1区で出土した土器は残りがよく、遠くから流れてきたものではなかった。それでは弥生集落はどこにあったのか。平成16年度調査で検出された河道3は久米田池付近の谷から数条に分かれて流れてくる一つと考えられるが、それを弥生集落の東限と考えたい。それでは西限はどこなのであろうか。溝50は、07-1区の東北部を弧状に廻っていた。その規模は、長さ20m以上、幅約5m、深さ0.7m以上をはかる。これはもう環濠といっても差支えないであろう。すなわち、西限は溝50なのである。ちなみに、それらを平面的にイメージすれば、「I」の左側に「C」が取りつく形態なのである。おそらく、その内部が弥生集落なのであろう。先述したように、集落の存続時期は弥生時代中期中葉（Ⅲ様式）から後期末葉であろう。その時間幅は、本遺跡周辺の弥生集落にとっても共通する。本遺跡に最も近い下池田遺跡では、その集落の規模や遺構の密度は本遺跡に比べるべくもないが、集落の存続幅は共通している。同様なことは、和泉市府中遺跡や岸和田市土生遺跡、少し離れるが、泉佐野市三軒屋遺跡や泉南市男里遺跡でもいえるかもしれない。逆にいうと、泉州地域では和泉・泉大津両市にまたがる池上曾根遺跡などの弥生時代前期新段階で集落が形成される

遺跡の方が珍しいのかもしれない。そのことは堺市西区四ツ池遺跡でもいえよう。

3 古墳時代

本調査では、古墳時代の遺構は全く検出されていない。ただ、平成18年5月に行った新設道路敷設に伴う西側部分の試掘調査において、青紫色粘質土の遺物包含層が確認されている。そして小片ではあるが、須恵器や埴輪、瓦器などの遺物も出土している。実際その付近では、かつて池尻古墳（円墳）が存在していた。さらに、本府営住宅用地の西北側に接する部分を岸和田市教育委員会が田鶴羽遺跡と命名し、発掘調査を実施している。それらのことから考えると、新設道路の西側部分の発掘調査においても、同様な上部を削平された古墳や、中世建物が検出される可能性が高い。要するに、田鶴羽遺跡内の古墳や池尻古墳、さらに新設道路部分で検出される古墳も含めて、それは一つの古墳群として理解できよう。そして、その古墳群の東北の限りは天ノ川であることも疑いない。ただ、西南の限りはよくわからない。

ところで、久米田古墳群と田鶴羽古墳群の違いは明瞭である。まず立地である。久米田古墳群は小高い丘陵上に占拠し、その眺望は抜群である。一方、田鶴羽古墳群は河川に向かって傾斜する斜面上に立地している。次に古墳の規模である。久米田古墳群最古・最大の首長墓、貝吹山古墳は全長130mをはかる大型前方後円墳であり、周囲には壕を備えていた。また、墳丘上には円筒埴輪列が廻り、葺石も施されていた。一方、田鶴羽古墳群では大きなもので一辺9m前後、小さなものでは4～5mと極端に小さい。埋葬施設についても、久米田古墳群では石室や石棺系であるのに対し、田鶴羽古墳群では木棺か土壙墓であろう。さらに副葬品についても、貝吹山古墳では銅鏡、銅鏃、鉄製甲冑、石製腕飾類などが出土しているのに対し、田鶴羽古墳群では土器類しか見いだせない。そして、両者の決定的な違いは、古墳群の盛行期である。久米田古墳群は、泉州地域では岸和田市摩湯山古墳に次いで築造された古墳群で、その盛行期は4世紀後葉から6世紀にかけての150年間であろう。単純に考えて5～6世代にあたる。一方、田鶴羽古墳群では、5世紀後葉の50年間が盛行期であり、せいぜい2世代なのである。それらからみても、両者は全く別の古墳群と断言できよう。

4 飛鳥～奈良～平安時代

本調査では、この時代の遺構は全くといっていいほど検出されていない。ただ、遺跡周辺に目を転ずれば、JR阪和線近くの下池田遺跡に接し、熊野街道沿いに池田王子跡が存在する。この付近はかつて白鳳期の軒丸瓦などが出土し、小松里廃寺と呼ばれている。しかし、範囲確認調査さえ実施されたことがなく、伽藍配置なども不明である。ただ、泉州地域で施行されている海岸線に沿った条里方向とは異なる南北方向の地割りが確認できる程度である。

さて本地域は、奈良時代において他の地域とは大きく異なる出来事が二つあった。

一つは、久米田池の築造である。霊亀二年（725）、聖武天皇は行基に命じ、久米田池の築造に着手させる。そして行基は、十四年の歳月をかけ天平十年（738）に久米田池を完成させる。また、天平六年（734）には久米田池の維持・管理を主目的に久米田寺を建立する。久米田池は

完成し、天ノ川流域を中心とした八木郷一带の田畑は大いに潤い、本遺跡周辺の景観も一変したことであろう。その結果、耕地面積も大いに増えたことは想像に難くない。

二つ目は和泉国の成立である。天平寶字元年（757）、河内国（大国）からの「出先機関的な」扱いから脱し、和泉国（下国）は新たに成立する。和泉国は、北から大鳥郡、和泉郡、日根郡の三郡に分かたれ、国府は和泉郡（現在のJR阪和線和泉府中駅辺り）に置かれた。ただ、国府の規模や位置などは今でも諸説あり、はっきりしていない。和泉郡内の郷には、信太・上泉・下泉・軽部・坂本・池田・山直・八木・掃守・木島の十郷があり、大町遺跡は八木郷に属している。また、八木郷は天ノ川沿いに展開する池尻・大町・小松里・箕土路・下池田・中井・荒木・吉井の八地区から構成され、中井地区の夜疑神社が郷社で八木郷の中心にあたる。

次に、平安時代である。400年も続いた時代にもかかわらず、本遺跡では当該期の遺構は全く検出されていない。大阪府下でも、当該期の遺跡は中世の遺跡に比べると、極端に少ない。本遺跡周辺では、三田遺跡出土の緑釉香炉ぐらいしか思い浮かばない。それほど、印象が少ないのである。ただ、本遺跡では平安時代後期（12世紀）の軒丸瓦・軒平瓦が数点出土している。当地周辺は末法思想の影響で中世寺院は増えていくが、それが平安時代後葉頃（11～12世紀）からあったのか、それとも鎌倉時代前葉頃（13世紀前葉）に成立し、瓦だけが何処からか持ってこられたのか、よくわからない。何れにしても、平安時代後葉頃（11～12世紀）には、中世の萌芽が現れ出しているのかもしれない。

5 鎌倉～室町時代

ようやく、本遺跡の調査にとって重要な時代を迎えた。ただ、平成15～16年度の発掘調査では、中世遺構は全くといっていいほど検出されなかった。発掘調査の結果から考えると、中世遺構の東限は04-1区河道3までなのであろう。そして、西限は天ノ川を越え、さらに西の調査区でも中世建物が出ているらしい。そうなれば、中世遺構は東西幅約400m以上の牛滝街道も含めた広い範囲に広がっていることになる。それが、一連の集落なのか、複合された集落なのか、よくわからない。前章でも述べたが、大町遺跡検出の中世の遺構・遺物は、単なる一般集落のものではない。すなわち、寺院に関わる集落、さしずめ「大町廃寺」とでもいうような中世寺院をイメージさせる。実際、熊野街道沿いにも犬飼堂廃寺というような遺跡も見受けられる。奈良時代から続く名刹久米田寺を除いて、中世になって新たに御堂や祠といった類の中世寺院が建てられるようになったのだろう。

さて、その後の大町遺跡がどうなっていったのか。中世寺院は急激に衰退し、この地は耕地化され、あるいは粘土取りの場所に変化する。そして、大町集落は今少し熊野街道沿いに移動し、発掘調査地から離れるようになる。40数年前、大阪府がこの地を住宅用地として計画した時は、天ノ川を挟んで段差のある田園地帯が広がっていたことは、本書第2図によって、明らかである。

写真図版





a. 07-2区を望む。(北東から) 手前は金池。左上は久米田池



b. 07-2区を望む。(南西から)



a. 06-1区全景（北西から）



b. 06-1区全景（南西から）



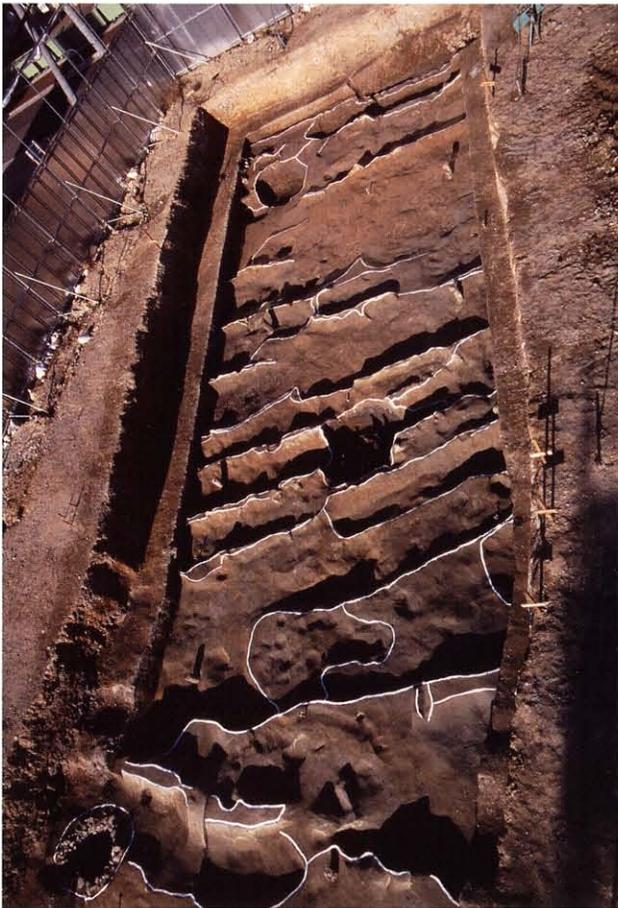
c. 06-1区全景（東半部）（南東から）



d. 06-1区西壁断面（北東から）



a. 06-2区全景斜め写真（東南から）



b. 06-2区全景（東半部）（南西から）



c. 06-2区全景（西半部）（南東から）



d. 06-2区全景（中央部）（南東から）



a. 06-2区土器だまり 45 全景 (南東から) 右上が石組井戸 48



b. 06-2区土器だまり 45 全景 (南から)



c. 06-2区土器だまり 45 検出状況 (北から)



a. 06 - 2 区土坑 32 東壁断面 (西南から)



b. 06 - 2 区木組井戸 47 検出状況 (西南から)



c. 06 - 2 区木組井戸 47 上面 (北から)



a. 06 - 2 区木組井戸 47 全景 (西から)



b. 06 - 2 区木組井戸 47 立面 (西から)



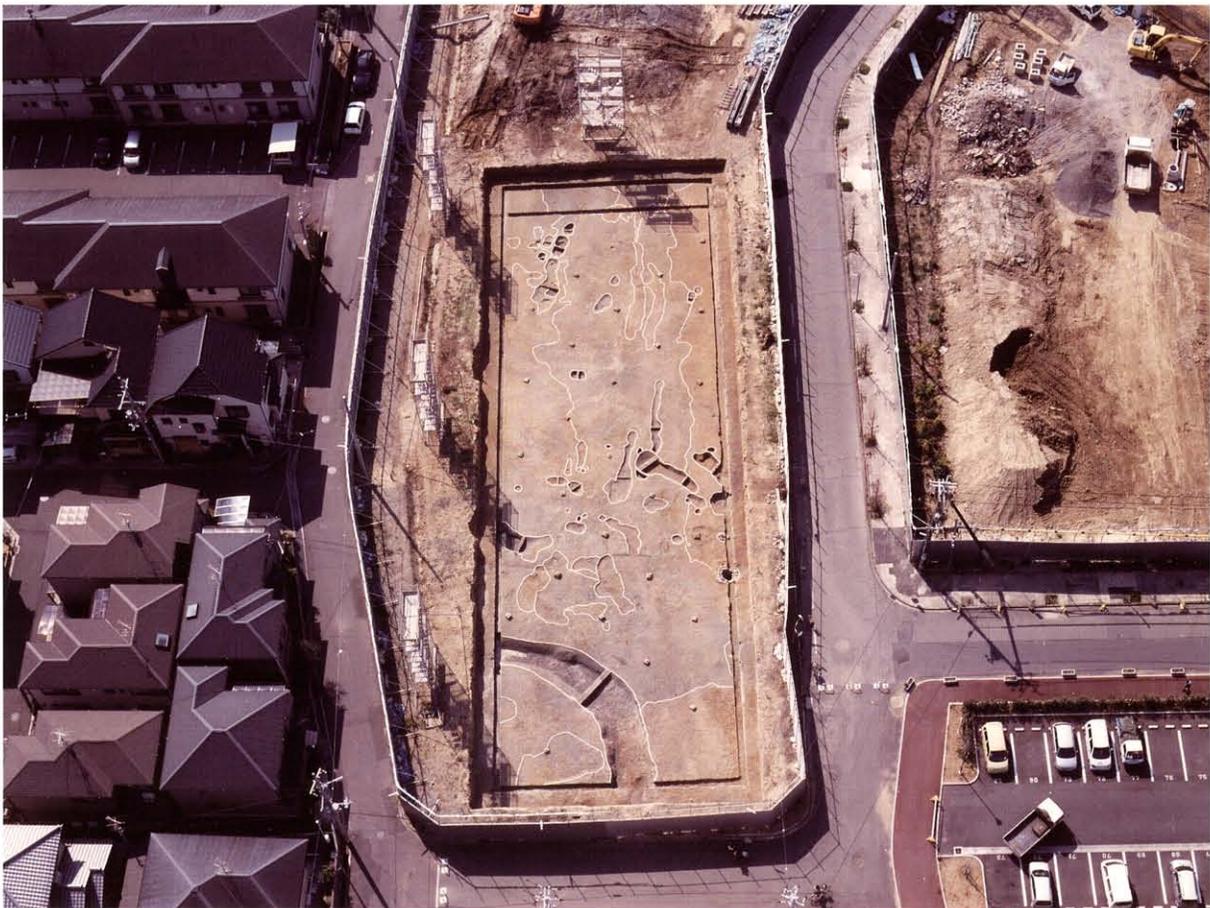
a. 06-2区石組井戸48上面(南から)



b. 06-2区石組井戸48立面(南東から)



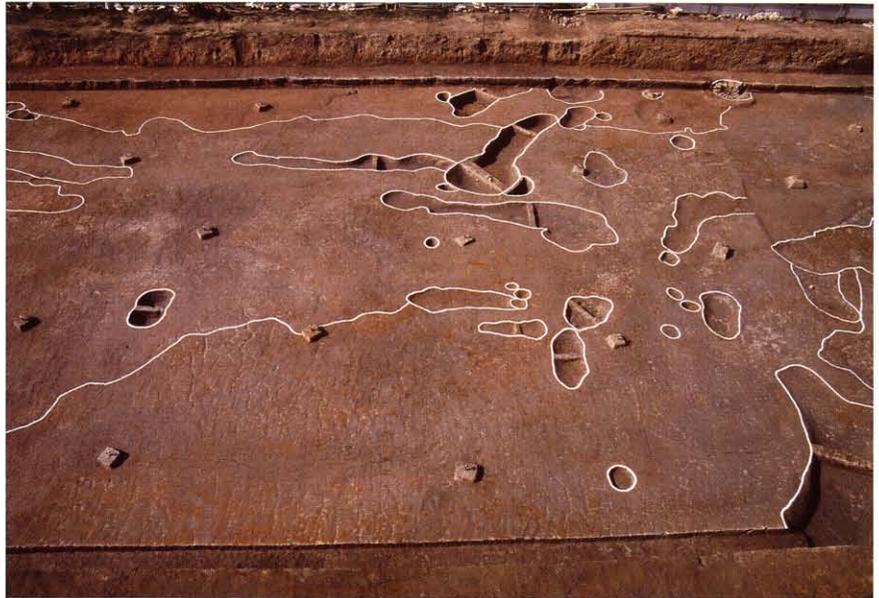
a. 06 - 2 区・3 区空中写真（下が 3 区。東南から）



b. 06 - 3 区空中写真（北東から）



a. 06 - 3 区西半部全景 (東から)



b. 06 - 3 区中央部全景 (南東から)



c. 06 - 3 区東半部全景 (南東から) 右下が溝 50



a. 06-3区溝 50断面 (北西から)



b. 06-3区弥生時代後期甕出土状況 (南から)



c. 06-3区加工木出土状況



a. 06 - 3 区自然木出土状況



b. 06 - 3 区集石 96 出土状況



c. 06 - 3 区石組井戸 53 検出状況 (北東から)



a. 06-3区石組井戸53内部(南から)



b. 06-3区石組井戸53遺物出土状況(南から)



c. 06-3区石組井戸53立面(南から)



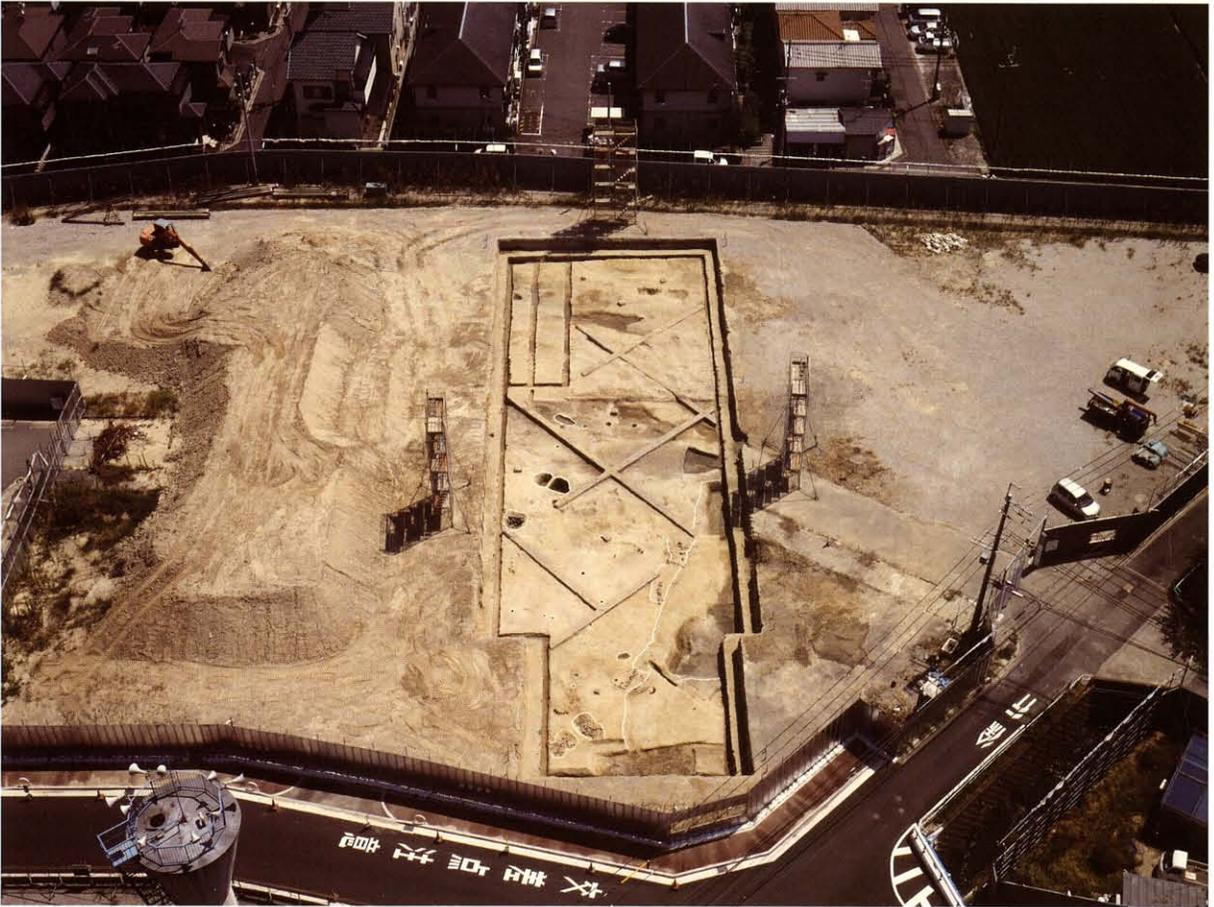
a. 06 - 3 区下層確認トレンチ全景 (南西から)



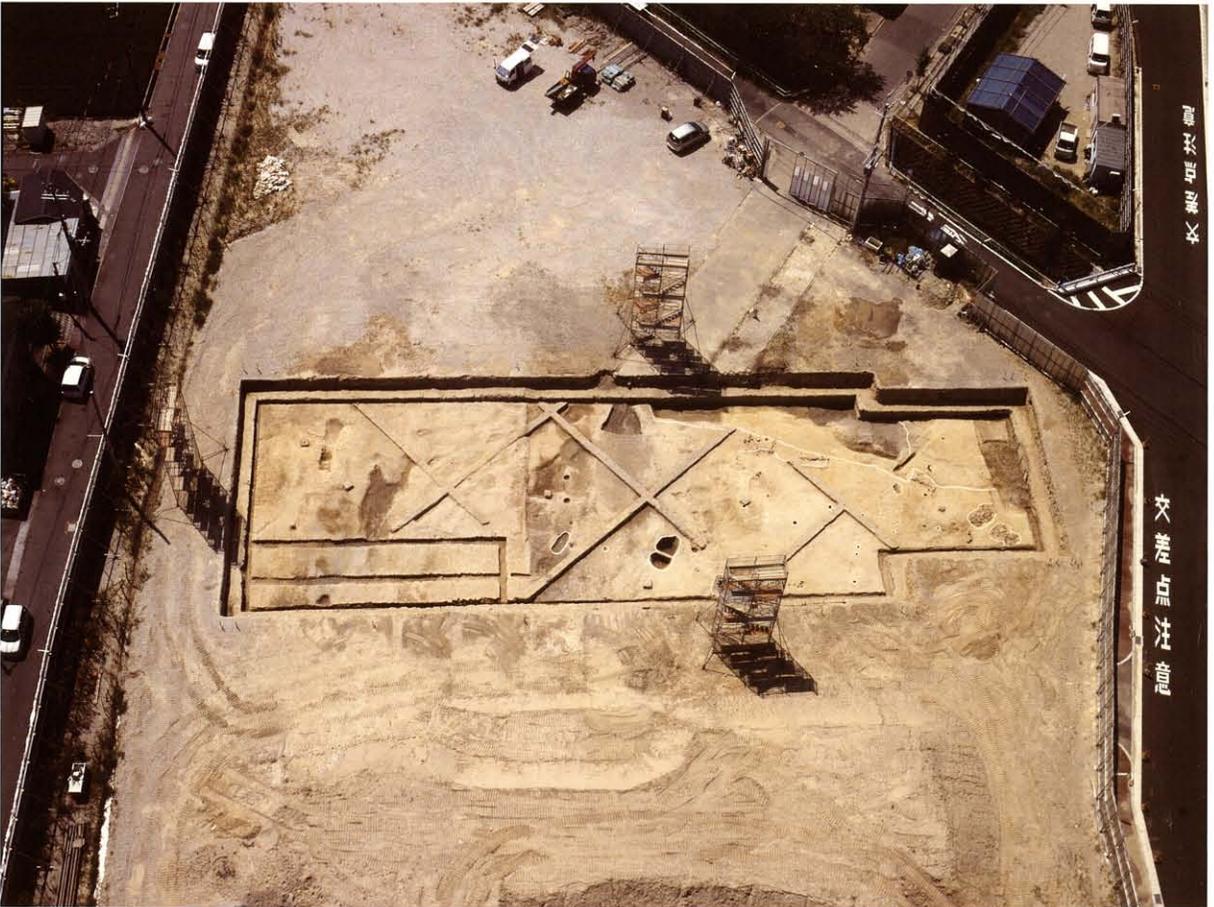
b. 06 - 3 区下層確認トレンチ弥生土器出土状況 (北西から)



c. 06 - 3 区下層確認トレンチ自然木出土状況



a. 07-1区全景斜め写真（北西から）



b. 07-1区全景斜め写真（北東から）



a. 07 - 1 区調査区全景 (南東から)



b. 07 - 1 区調査区中央部全景 (北東から)



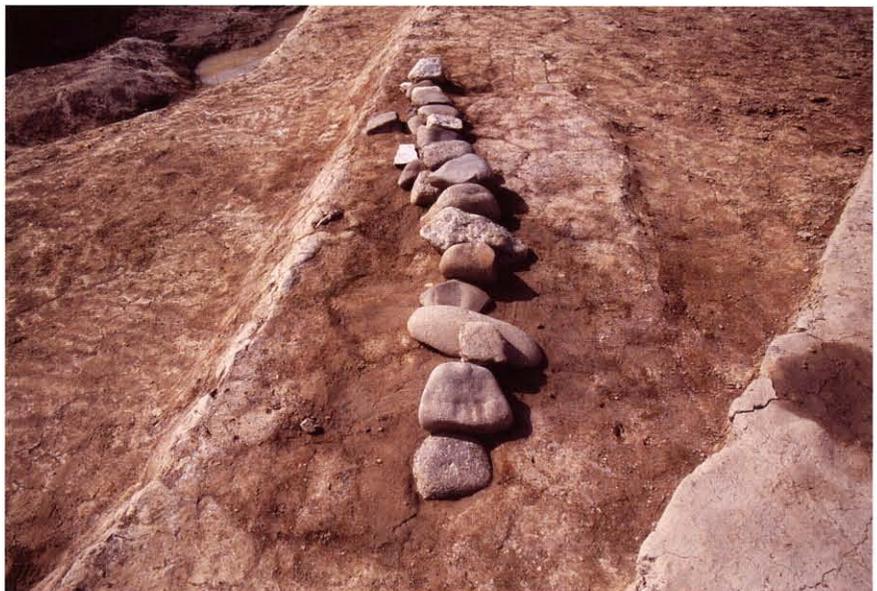
c. 07 - 1 区調査区南端部全景 (北西から)



a. 07 - 1 区石列 4 検出状況



b. 07 - 1 区石列 5 検出状況



c. 07 - 1 区石列 7 検出状況



a. 07-1区土坑1・土坑2 検出状況 (南から)



b. 07-1区土坑1 検出状況 (北東から)



c. 07-1区土坑2 検出状況 (南から)



a. 07-1区土坑1・土坑2掘削完了（南から）



b. 07-1区石列8付近土釜出土状況（東から）



c. 07-1区溝16土器だまり状況（北東から）



a. 07 - 1 区石組井戸 15 検出状況 (南から)



b. 07 - 1 区石組井戸 15 立面 (南西から)



c. 07 - 1 区下層自然木出土状況



a. 07 - 2 区東半部空中写真（北西から）



b. 07 - 2 区西半部空中写真（北西から）



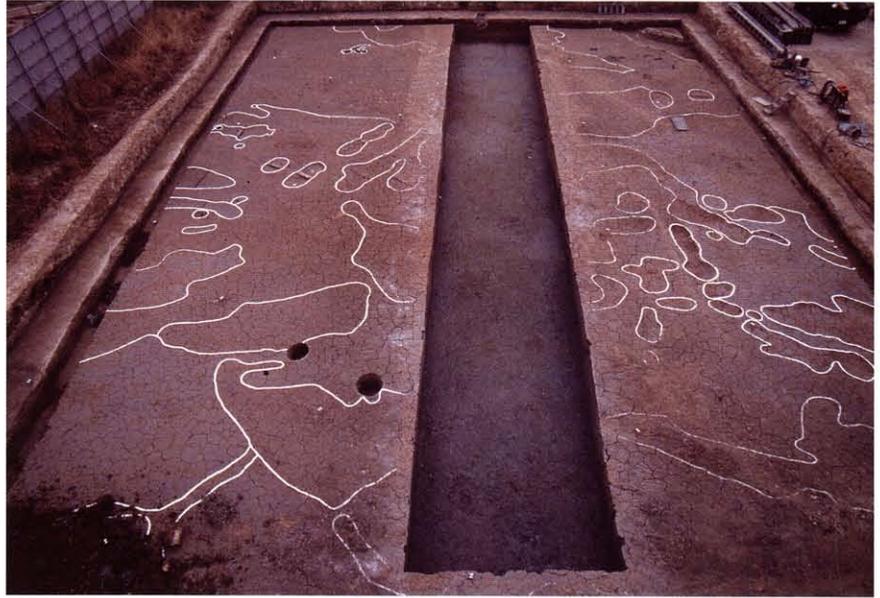
a. 07 - 2 区西半部全景 (北東から)



b. 07 - 2 区西半部中央全景 (北西から)



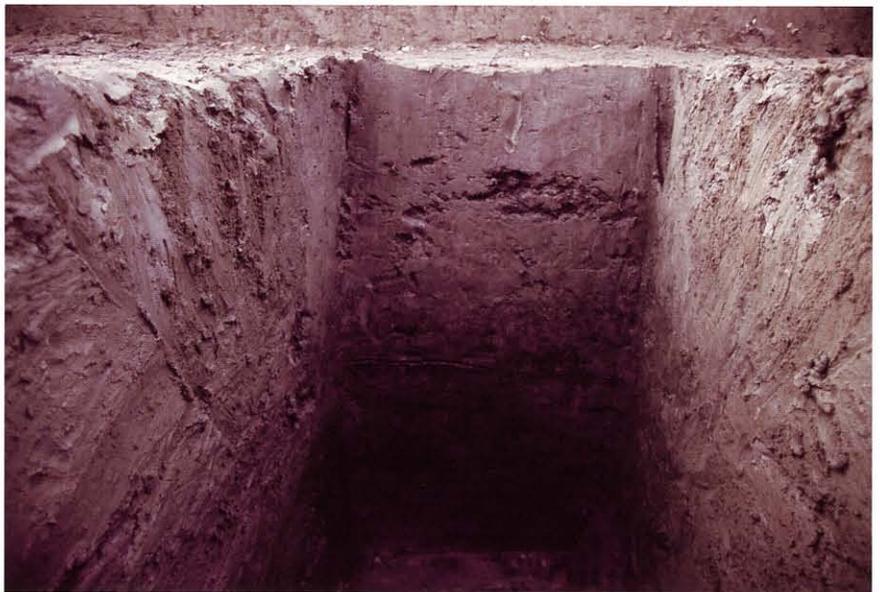
c. 07 - 2 区西半部自然木出土状況 (北西から)



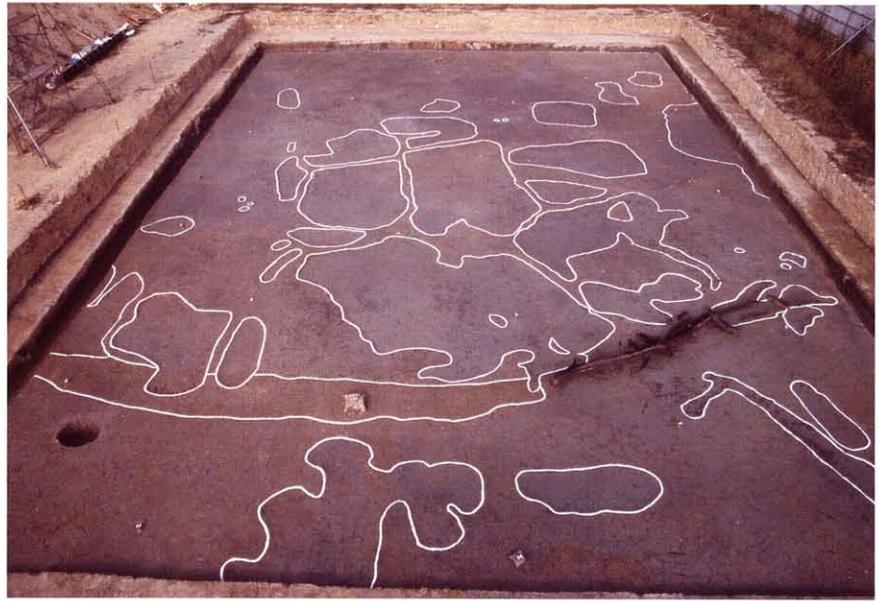
a. 07-2区西半部下層確認トレンチ（北東から）



b. 07-2区西半部下層確認トレンチ南壁縄文土器出土状況



c. 07-2区西半部下層確認トレンチ南壁断面



a. 07 - 2 区東半部全景 (南西から)



b. 07 - 2 区東半部全景 (北西から)



c. 07 - 2 区東半部導水施設状況細部 (東から)



16

a. 蓮華文軒丸瓦



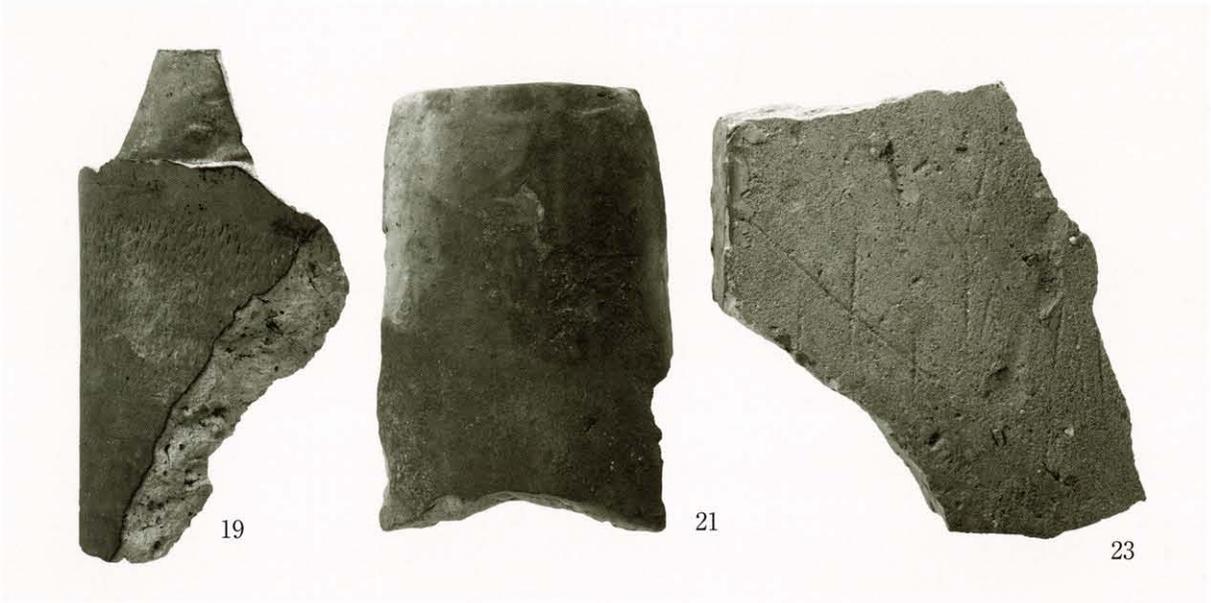
17

b. 巴文軒丸瓦



18

c. 巴文軒丸瓦



a. 玉縁式丸瓦・丸瓦・平瓦



b. 瓦質羽釜・土師器土釜・瓦質甕



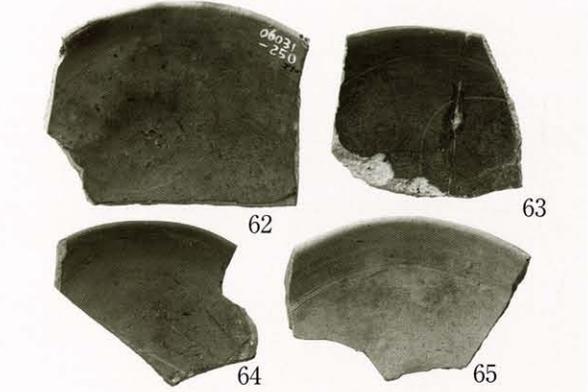
a. 瓦器椀、土師器椀



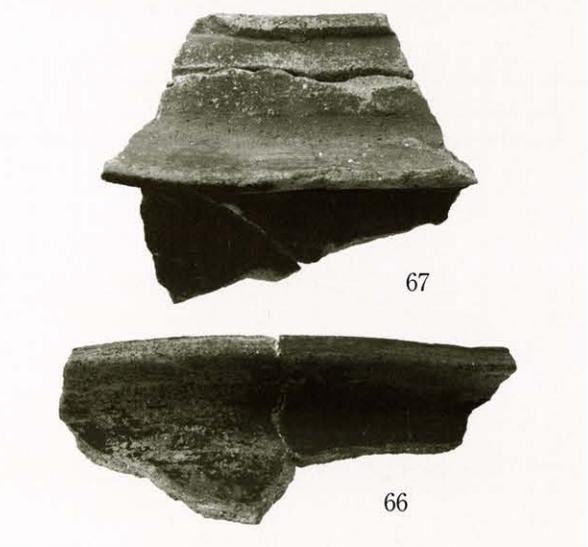
b. 土師器土釜



b. 土器だまり45出土土師器土釜（紀伊型）



c. 木組井戸47出土瓦器碗・小皿、土師器小皿



d. 木組井戸47出土土師器土釜



a. 土器だまり45出土土師器土釜

e. 木組井戸47出土青磁碗



71 ~ 80

a. 木組井戸47曲物枠



102 ~ 105

b. 石組井戸48木製井桁



91

a. 唐草文軒平瓦



81

f. 土師器皿



92

b. 軒平瓦



83

g. 瓦質土釜



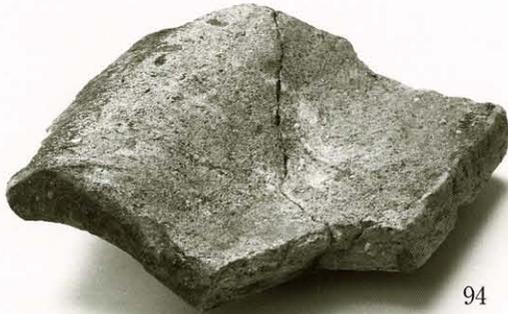
93

c. 丸瓦



88

h. 瓦質土釜



94

d. 雁振瓦



89



90

i. 瓦質すり鉢 (外面)



95

e. 熨斗瓦 (表・裏)



j. 瓦質すり鉢 (内面)



106

a. 弥生土器壺



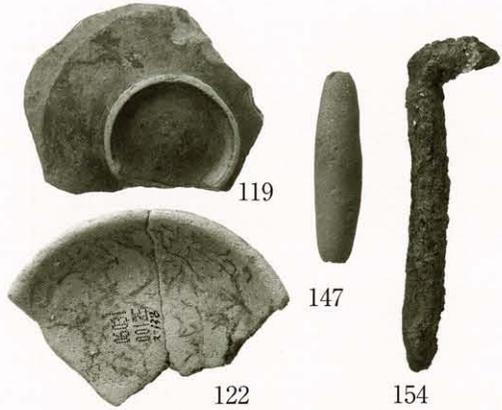
116

d. 瓦器椀



114

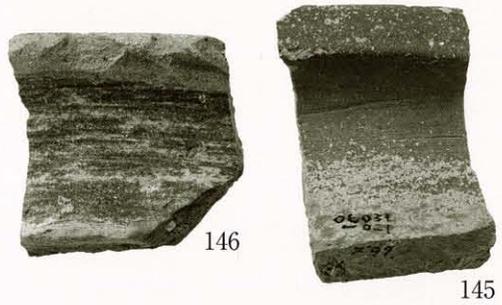
b. 弥生土器高杯 (外面・円盤充填)



e. 小型瓦器椀、土師器小皿、土錘、鉄器



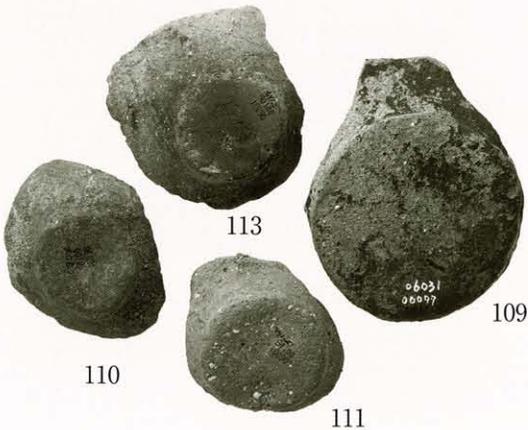
b. 弥生土器高杯 (外面・円盤充填)



146

145

f. 須恵器甕、常滑焼甕



110

113

111

109

c. 弥生土器壺・鉢・甕



143

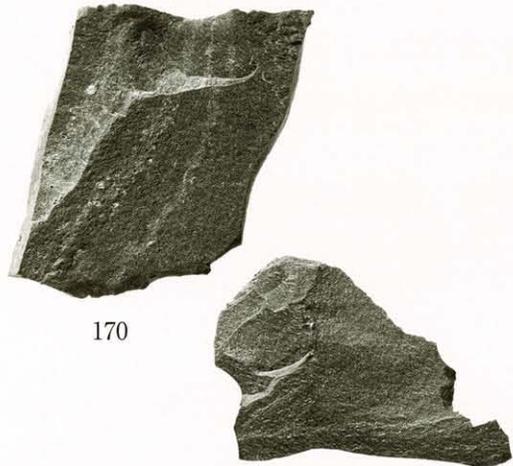
144

g. 東播ねり鉢、瓦質すり鉢



166

a. 河川出土弥生土器甕



170

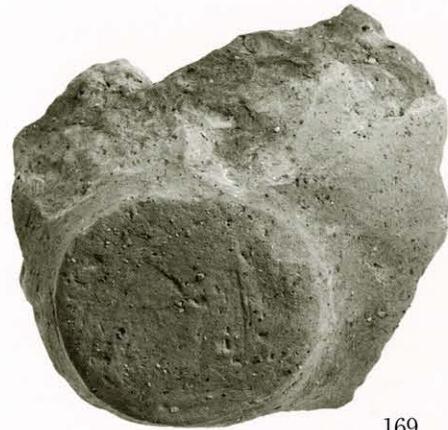
171

b. 調査区南西部側溝出土サヌカイト剥片



167

c. 溝50出土弥生土器小型甕



169

d. 溝50出土弥生土器壺



168

e. 溝50出土弥生土器甕



193 ~ 207

f. 石組井戸53出土桶梓



175



179



180



178



172



173



174



177



176



185

a. 石組井戸53出土瓦器碗、土師器小皿（灯明皿）



a. 石組井戸53出土土師器小皿



a. 蓮華文軒丸瓦



b. 文字軒丸瓦「□日寺如□」



a. 巴文軒丸瓦



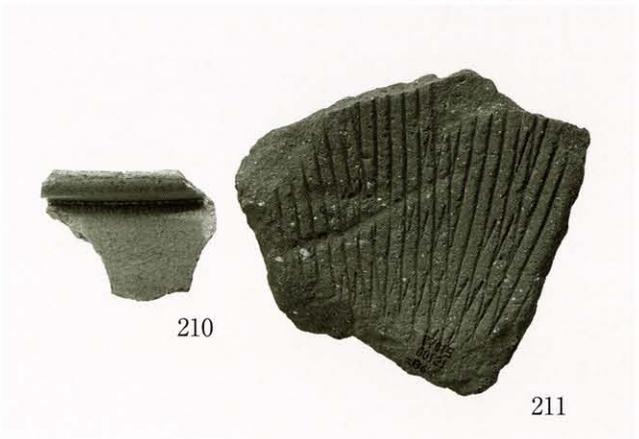
b. 唐草文軒平瓦



c. 唐草文軒平瓦



d. 丸瓦



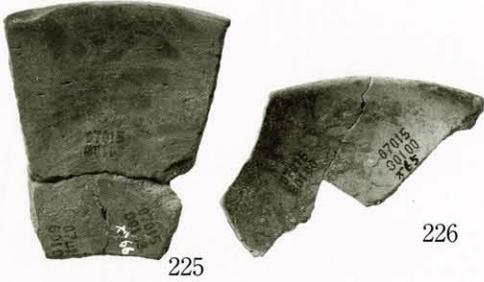
e. 京焼鉢、湊焼すり鉢



a. 土坑 2 出土玉縁式丸瓦



b. 土坑 2 出土土師器小皿



c. 土坑 2 出土瓦器椀



d. 土坑 2 出土瓦質土釜



e. 石列 8 出土玉縁式平瓦



f. 石列 8 出土青磁壺 (外・内面)



g. 石列 8 出土瓦器椀



h. 石列 8 出土土師器小皿



258

a. 石列 8 出土土師器土釜



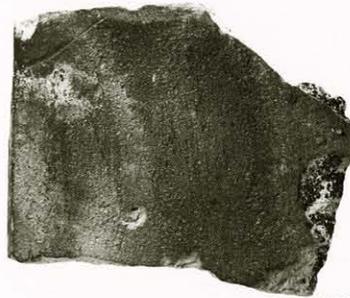
261

b. 石組井戸 15 出土備前焼壺



260

c. 石組井戸 15 出土土師器土釜



262



263

d. 石組井戸 15 出土平瓦・丸瓦



266

e. 石組井戸 15 出土木臼



267



280



276



288



270



277



275



284

a. 瓦器碗



300



303

b. 瓦器小皿



297



307



295



309



298



299



311



314

a. 瓦器小皿



316



322



320



323

b. 土師器皿



324



327



328



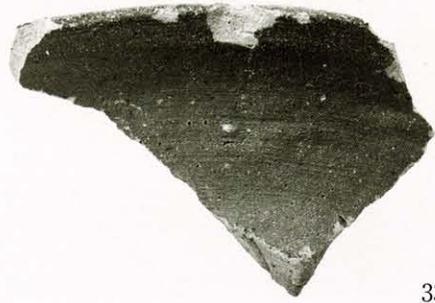
329

a. 土師器・瓦質土釜



333

b. 須恵器壺



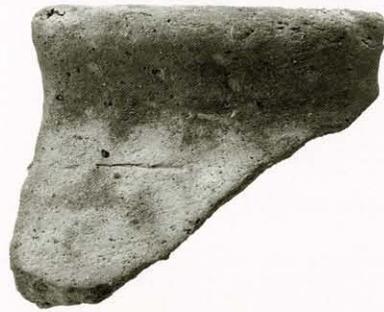
336

c. 常滑焼壺



337

d. 常滑焼甕



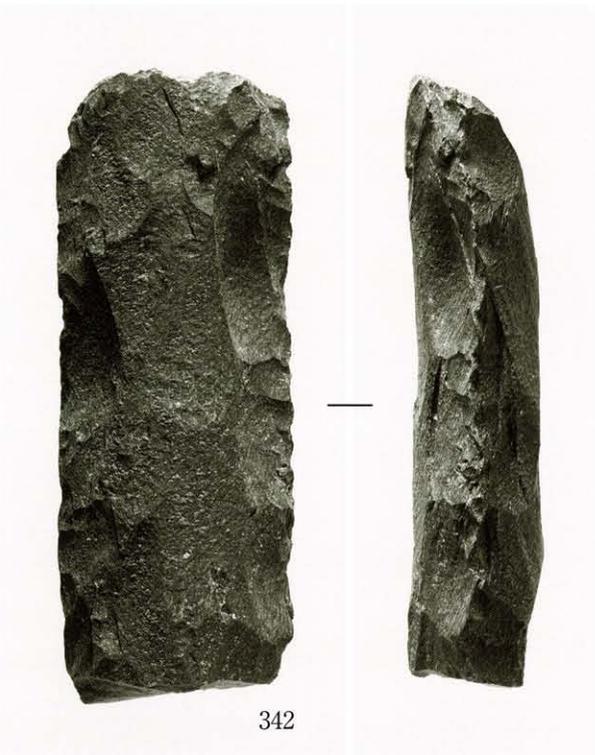
338

e. 土師器マダコ壺



339

f. 須恵器イイダコ壺



342

a. サヌカイト製石槍



381

e. 須恵器ねり鉢



b. 土師器小皿



386

f. 瀬戸焼鉢



375

c. 土師器羽釜



230

g. 土坑2出土瀬戸焼片口鉢



382

d. 土師器マダコ壺



392

h. 蓮華文軒丸瓦



391

a. 文字軒丸瓦「大日寺如来」



393

b. 唐草文軒平瓦



412

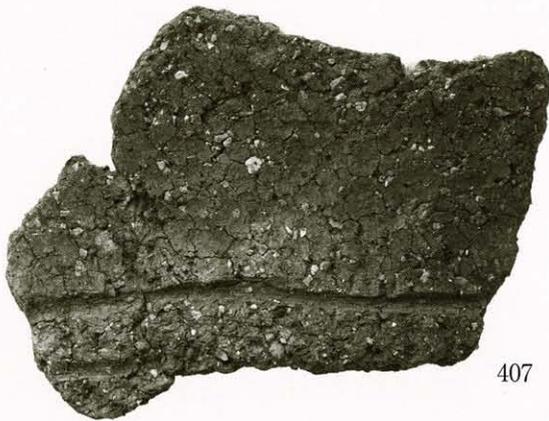


413



410

a. 縄文土器（宮滝式）



407



411

b. 縄文土器（宮滝式）



415

c. サヌカイト製削器



416

d. サヌカイト製石鏃



414

e. 弥生土器甕

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおまちいせき に							
書名	大町遺跡Ⅱ							
副書名	-府営岸和田大町住宅建替えに伴う発掘調査-							
巻次								
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	2009-2							
編著者名	上林史郎							
編集機関	大阪府教育委員会							
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351 (代表)							
発行年月日	2010年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
おおまちいせき 大町遺跡	きしわだしおおまち 岸和田市大町	27202	122	34° 44' 39"	135° 32' 56"	2006年10月9日 ～ 2007年3月7日 2007年6月20日 ～ 2007年12月12日	1,826 2,470	府営岸和田 大町住宅 建替え
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
おおまちいせき 大町遺跡	集落	縄文時代後期	落ち込み	縄文土器 サヌカイト		当該期の大規模な落ち込み が発見された。		
	集落	弥生時代後期	河川	弥生土器		従来から検出されていた大規模な河川につながる支流が 検出された。		
	集落	鎌倉～室町	石組井戸 木組井戸 集石遺構	瓦器・土師器 瓦・須恵器 木製品・曲物		中世の寺院に関連する遺構・ 遺物が検出された。		
要約	<p>平成18年度の調査では、新たに中世の寺院に関連する遺構・遺物が検出された。特に、木組や石組の精巧な井戸が三基検出された。</p> <p>平成19年度の調査では、前年度に引き続き、中世の寺院に関連する遺構・遺物が検出された。新たに石組井戸が一基検出された。特筆すべきは、下層の確認トレンチで、縄文時代後期の大規模な落ち込みが検出されており、近接して当該期の集落の存在が想定される。</p>							

大阪府埋蔵文化財調査報告2009-2

大町遺跡Ⅱ

—府営岸和田大町住宅建替えに伴う発掘調査—

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目

TEL 06 (6941) 0351

発行日 平成22年3月31日

印刷 石川特殊特急製本株式会社

〒540-0014 大阪府大阪市中央区竜造寺町7番38号

